

Linux(R) , HP-UX

通信管理

XNF/LS 使用の手引

解説・手引・文法・操作書

3000-3-B51-20

マニュアルの購入方法

このマニュアル、および関連するマニュアルをご購入の際は、
巻末の「ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内」をご参
照ください。

対象製品

P-9S14-5111 XNF/LS/BASE 01-01 (適用 OS : Red Hat Enterprise Linux 5.1 , 5.3 (x86 , Intel EM64T))
P-F9S14-5111D XNF/LS/OSI Extension 01-01 (適用 OS : Red Hat Enterprise Linux 5.1 , 5.3 (x86 , Intel EM64T))
P-F9S14-5111E XNF/LS/OSI Extension/Cluster 01-00 (適用 OS : Red Hat Enterprise Linux 5.1 , 5.3 (x86 , Intel EM64T))
P-F9S14-5111H XNF/LS/Host Adaptor 01-01 (適用 OS : Red Hat Enterprise Linux 5.1 , 5.3 (x86 , Intel EM64T))
P-1J14-5211 XNF/LS/BASE 01-00 (適用 OS : HP-UX 11i V3(IPF))
P-F1J14-5211D XNF/LS/OSI Extension 01-00 (適用 OS : HP-UX 11i V3(IPF))
P-F1J14-5211E XNF/LS/OSI Extension/Cluster 01-00 (適用 OS : HP-UX 11i V3(IPF))

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。
なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

HP-UX は、米国 Hewlett-Packard Company のオペレーティングシステムの名称です。
Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。
Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標若しくは商標です。

発行

2009 年 1 月 (第 1 版) 3000-3-B51
2009 年 11 月 (第 3 版) 3000-3-B51-20

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2009, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容 (3000-3-B51-20) XNF/LS/BASE 01-00 (HP-UX 11i(IPF)), XNF/LS/OSI Extension 01-00 (HP-UX 11i(IPF)), XNF/LS/OSI Extension/Cluster 01-00 (HP-UX 11i(IPF))

追加・変更内容	変更個所
XNF/LS の前提 OS として , HP-UX 11i V3(IPF) をサポートしました。	1.1(1) , 1.2.1 , 1.3.1 , 1.3.2(2) , 2.2.3(1) , 3.1 , 3.1.1 , 3.1.2 , 3.2.1(1) , 3.2.2 , 3.3 , 3.4 , 付録 B
メッセージを変更しました。 KANC151-I , KANF16006-E , KANF17002-E , KANF17003-E , KANF17005-E , KANF17007-E , KANF18000-E , KANF19001-E , KANF864a0-E , KANF8660*-E	6.2
XNF/H と XNF/LS の相違点についての説明を追加しました。	付録 E

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

変更内容 (3000-3-B51-10) XNF/LS/BASE 01-01 , XNF/LS/OSI Extension 01-01 , XNF/LS/Host Adaptor 01-01

追加・変更内容
XNF/LS の前提 OS として , Red Hat Enterprise Linux 5.1 (Intel EM64T) , および Red Hat Enterprise Linux 5.3 (x86 , Intel EM64T) をサポートしました。
OSI 拡張高信頼化機能をサポートしました。
キープアライブ機能を使用するかどうか選択できるようにしました。
メッセージを追加しました。 KANC058-E , KANC122-E , KANC123-E , KANC124-I , KANC125-I , KANC132-E , KANC154-I , KANC181-I , KANC221-I , KANC276-I , KANC531-I , KANF26201-E , KANF26204-E , KANF26205-E , KANF26206-E , KANF26207-E , KANF26211-E , KANF26213-E , KANF26214-E , KANF26221-E , KANF26222-E , KANF26223-E , KANF26224-E , KANF26228-E , KANF26229-E , KANF2622a-E , KANF2622b-E , KANF2622c-E , KANF2622d-E , KANF2622e-E , KANF26231-E , KANF26232-E , KANF26233-E , KANF26234-E , KANF26235-E , KANF26241-E , KANF26242-E , KANF26243-E , KANF26244-E , KANF26245-E , KANF26246-E , KANF26247-E , KANF26248-E , KANF262a*-E , KANF262b*-E , KANF262d1-E , KANF262d2-E , KANF262d3-E , KANF262d4-E , KANF262d6-E , KANF262f0-E , KANF262f1-E , KANF262f2-E , KANF262f3-E , KANF262f4-E , KANF86664-E , KANF866a1-E , KANF866d1-E , KANF866d2-E , KANF866d3-E , KANF866d4-E
メッセージを変更しました。 KANC012-W , KANC075-E , KANC076-E , KANC133-E , KANC151-I , KANF8660*-E
XNF/AS の OSI 拡張機能のシステムパラメタ , および XNF/LS の構成定義文の対応を変更しました。

はじめに

このマニュアルは、XNF/LS の機能、操作、および運用方法について説明したものです。XNF/LS の各プログラムプロダクトを次に示します。

Red Hat Linux

- P-9S14-5111 XNF/LS/BASE
- P-F9S14-5111D XNF/LS/OSI Extension
- P-F9S14-5111E XNF/LS/OSI Extension/Cluster
- P-F9S14-5111H XNF/LS/Host Adaptor

HP-UX 11i(IPF)

- P-1J14-5211 XNF/LS/BASE
- P-F1J14-5211D XNF/LS/OSI Extension
- P-F1J14-5211E XNF/LS/OSI Extension/Cluster

対象読者

Red Hat Linux(R)、または HP-UX 11i(IPF) の基礎的な知識、および OSI などの通信プロトコルの知識があるネットワーク管理者の方を対象としています。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章と付録から構成されています。

第 1 章 概要

XNF/LS の特長、ハードウェア構成、ソフトウェア構成などについて説明しています。

第 2 章 機能

XNF/LS の機能（構成の定義機能、通信機能、および保守運用機能）について説明しています。

第 3 章 環境設定と運用

XNF/LS の環境設定方法、および XNF/LS を組み込んだあとの実際の運用方法について説明しています。

第 4 章 構成定義文

XNF/LS の構成定義文について説明しています。

第 5 章 運用コマンド

XNF/LS の運用コマンドについて説明しています。

第 6 章 メッセージ

XNF/LS が output するメッセージについて説明しています。

付録 A 詳細エラーコード、および切断理由コード

XNF/LS が output する詳細エラーコード、および切断理由コードについて説明しています。

付録 B XNF/LS のトレース形式

XNF/LS で採取できるトレース形式について説明しています。

付録 C NSAP アドレス形式

OSI 拡張機能、および OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式について説明しています。

付録 D XNF/AS との相違点

XNF/AS と XNF/LS の相違点について説明しています。

付録 E XNF/H との相違点

XNF/H と XNF/LS の相違点について説明しています。

読書手順

このマニュアルは、次に示す表に従ってお読みいただくことをお勧めします。

目的	記載箇所
XNF/LS の特長、機能について知りたい。	1 章、2 章
組み込みから開始までと、異常時の運用について知りたい。	3 章
構成定義文の定義方法や定義の詳細について知りたい。	4 章
運用コマンドについて知りたい。	5 章
XNF/LS が output するメッセージについて知りたい。	6 章
詳細エラーコード、および切断理由コードについて知りたい。	付録 A
XNF/LS のトレース形式について知りたい。	付録 B
OSI 拡張機能、および OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式について知りたい。	付録 C
XNF/AS と XNF/LS の相違点について知りたい。	付録 D
XNF/H と XNF/LS の相違点について知りたい。	付録 E

このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名称を次に示す略称で表記しています。

製品名称	略称
Extended HNA based communication Networking Facility/for Advanced Server	XNF/AS
Extended HNA based communication Networking Facility/Light Server	XNF/LS
HP-UX 11i V3(IPF)	HP-UX 11i(IPF)
Red Hat Enterprise Linux 5.1 (x86 , Intel EM64T)	Red Hat Linux
Red Hat Enterprise Linux 5.3 (x86 , Intel EM64T)	

このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次に示します。

記号	意味
	この記号で区切られた項目から、選択して指定できることを示します。 (例) -A -B これは、-A または -B のどちらかを選択することを示します。
[]	この記号で囲まれているオペランドは、省略できることを示します。 (例1) [send_number 送信バッファ個数] これは、send_number オペランドの指定を省略できることを示します。 (例2) [-A -B] これは、-A もしくは -B を指定するか、またはどちらも省略することを示します。
{}	この記号で囲まれている項目のうち、必ず一組の項目を選択することを示します。 (例) {yes no} これは、yes または no のどちらかを選択することを示します。
—	オペランドの指定を省略した場合、選択記号 {} で囲まれている項目のうち、仮定される標準値を示します。 (例) [tcp_nodelay {yes no}] これは、オペランドの指定を省略すると、no を指定したことと同じ意味になることを示します。
	本文中ではオペランドをフルスペルで記述していますが、省略形でも指定できます。省略形として使用する文字は、オペランド中に _____ で囲んで示します。省略形では、_____ で囲んだ文字だけを指定します。 (例) max_TPTCP_connection →max_TPTCP
<>	各項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。
《》	省略できる項目を省略したとき、XNF/LS によって仮定される標準値を示します。
(())	指定する項目の範囲を示します。
~	~ の記号の前の項目は、~ 記号以降の <> , 《》 , (()) などで示される文法規則に従って記述されなければならないことを示します。

このマニュアルで使用する構文要素記号

このマニュアルで使用する構文要素記号を次に示します。

構文要素	定義
10進数字	0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9
16進数字	0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, A, B, C, D, E, F, a, b, c, d, e, f
10進数	10進数字の集まりです。
16進数	16進数字の集まり（偶数けた）です。
小数点付き 10進数	小数点第1位までの小数点を含めた、10進数字の集まりです。

構文要素	定義
英字	a , b , c , d , e , f , g , h , i , j , k , l , m , n , o , p , q , r , s , t , u , v , w , x , y , z , A , B , C , D , E , F , G , H , I , J , K , L , M , N , O , P , Q , R , S , T , U , V , W , X , Y , Z
英数字	英字、または英字と数字の混合で、先頭は英字です。また、英数字として「_（アンダスコア）」を使用できます。

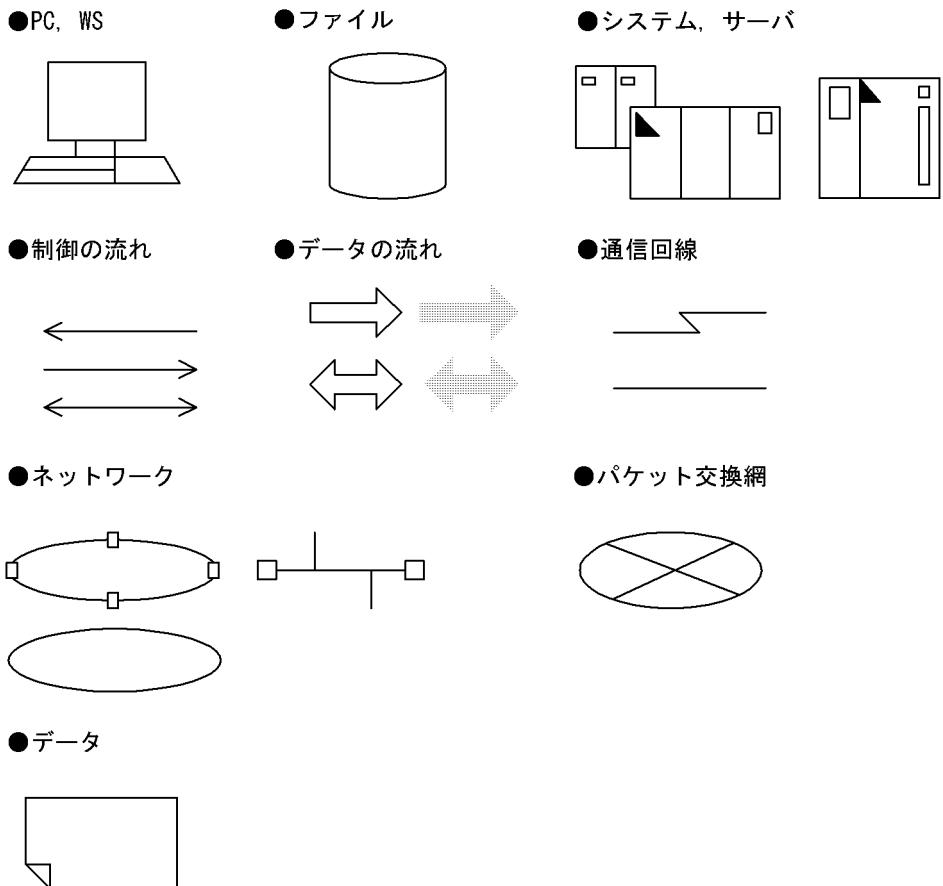
このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する主な英略語を次に示します。

英略語	説明
AFI	Authority and Format Identifier
AP	Application Program
API	Application Program Interface
IDP	Initial Domain Part
IP	Internet Protocol
NC	Network Connection
NL	Network Layer
NSAP	Network Service Access Point
OS	Operating System
OSI	Open Systems Interconnection
PC	Personal Computer
PDU	Protocol Data Unit
PP	Program Product
RFC	Request For Comment
TC	Transport Connection
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
TL	Transport Layer
TLI	Transport Layer Interface
TPDU	Transport Protocol Data Unit
TSAP	Transport Service Access Point
TSDU	Transport Service Data Unit
WS	WorkStation

図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を、次のように定義します。



常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは、常用漢字を使用することを基本としていますが、次に示す用語については、常用漢字以外の漢字を使用しています。

個所（かしょ） 必須（ひっす） 輻輳（ふくそう）

KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ $1,024$ バイト、 $1,024^2$ バイト、 $1,024^3$ バイト、 $1,024^4$ バイトです。

目次

1	概要	1
1.1	特長	2
1.2	プロトコルとサービス	3
1.2.1	プロトコルの範囲	3
1.2.2	プロトコルの機能	3
1.3	構成	6
1.3.1	ハードウェア構成	6
1.3.2	ソフトウェア構成	6
2	機能	7
2.1	構成の定義機能	8
2.2	通信機能	9
2.2.1	OSI 拡張機能	9
2.2.2	自局 IP アドレス指定機能	9
2.2.3	OSI 拡張高信頼化機能	10
2.3	保守運用機能	12
2.3.1	コマンドでの運用	12
2.3.2	構成変更	13
3	環境設定と運用	15
3.1	XNF/LS の環境設定	16
3.1.1	環境設定 (Red Hat Linux の場合)	17
3.1.2	環境設定 (HP-UX 11i(IPF) の場合)	19
3.2	開始と終了	24
3.2.1	開始処理	24
3.2.2	終了処理	25
3.3	構成の変更	26
3.4	XNF/LS が使用する障害情報ファイル	28
3.5	XNF/LS が output するメッセージ	29
3.6	異常時の運用	30
3.6.1	回復処理の手順	30
3.6.2	異常時の処理	30

3.7 キープアライブ機能	32
3.8 自局 IP アドレス指定機能を使用するときの注意事項	33
3.9 OSI 拡張高信頼化機能を使用するときの注意事項	34
3.9.1 アダプタ番号の指定	34

4

構成定義文	35
-------	----

4.1 作成の概要	36
4.1.1 作成の流れ	36
4.1.2 定義文一覧と指定できる文数	36
4.2 構成定義文の記述方法	38
4.2.1 基本文法	38
4.2.2 オペランドの階層	39
4.2.3 日本語の扱い	39
4.2.4 全角文字および、半角文字の扱い	39
4.3 構成定義文の詳細	40
4.3.1 configuration (構成定義開始宣言文)	40
4.3.2 TPTCP_buffer (OSI 拡張機能用バッファ定義文)	42
4.3.3 TPTCP_common (OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文)	44
4.3.4 TPTCP_define (OSI 拡張機能用情報定義文)	46
4.3.5 TPTCP_slot (OSI 拡張機能用自局 IP アドレス定義文)	48
4.3.6 TPTCP_VC (OSI 拡張高信頼化機能用仮想サーバ定義文)	49
4.4 構成定義文の定義例	51
4.4.1 OSI 拡張機能を使用する場合の定義	51
4.4.2 自局 IP アドレス指定機能を使用する場合の定義	52
4.4.3 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の定義	53

5

運用コマンド	57
5.1 運用コマンドの一覧	58
5.2 運用コマンドの詳細	59
5.2.1 comlog (エラーメッセージを表示する)	60
5.2.2 xnfdelete (構成を削除する)	62
5.2.3 xnfedit (トレスースを編集する)	63
5.2.4 xnfgen (ゼネレーションを実行する)	65
5.2.5 xnffoffline (オフライン状態にする)	67
5.2.6 xnfonline (オンライン状態にする)	68

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)	69
5.2.8 xnfstart (XNF/LS を開始する , または構成を追加する)	78
5.2.9 xnfstop (XNF/LS を終了する)	79
5.2.10 xnftdump (メモリダンプを取得・編集する)	80
5.2.11 xnftrace (トレースを採取する)	82

6

メッセージ

87

6.1 メッセージの見方	88
6.1.1 メッセージの形式	88
6.1.2 メッセージの対処方法	88
6.1.3 メッセージの出力先	88
6.2 メッセージの詳細	90

付録

123

付録 A 詳細エラーコード , および切断理由コード	124
付録 B XNF/LS のトレース形式	127
付録 C NSAP アドレス形式	129
付録 D XNF/AS との相違点	131
付録 E XNF/H との相違点	138

索引

143

図目次

図 1-1 プロトコルと XNF/LS のサービス範囲（エンドシステムでの OSI 拡張機能）	3
図 2-1 定義文の役割	8
図 2-2 OSI 拡張機能のネットワーク構成	9
図 2-3 自局 IP アドレス指定（系切り替え）構成例	10
図 2-4 サーバ現用 / 予備運用での系切り替え構成例（OSI 拡張高信頼化機能）	11
図 2-5 ホスト予備運用での系切り替え構成例（OSI 拡張高信頼化機能）	11
図 3-1 XNF/LS の環境設定	16
図 3-2 パケット交換網を経由するネットワーク構成例	32
図 4-1 OSI 拡張機能を使用した場合の構成例	51
図 4-2 相互系切り替え構成で自局 IP アドレス指定機能を使用した場合の構成例	52
図 4-3 OSI 拡張高信頼化機能を使用して接続する場合の構成例	53
図 C-1 OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式	129
図 C-2 OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式	130

表目次

表 1-1 XNF/LS がサポートする機能	4
表 2-1 XNF/LS の機能と運用コマンド	12
表 3-1 XNF/LS に関連するカーネルパラメタ	17
表 3-2 XNF/LS に関連するカーネル調整パラメタ	20
表 3-3 XNF/LS が使用する障害情報ファイルの使用目的と作成時期	28
表 3-4 メッセージの出力先および参照方法	29
表 3-5 指定できる仮想スロット番号の範囲	34
表 4-1 構成定義文と指定できる文数	36
表 4-2 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の構成定義文	37
表 5-1 XNF/LS の運用コマンド	58
表 5-2 キーワードとコマンドの対応	59
表 5-3 仮想サーバの状態	75
表 5-4 XNF/LS 開始時の仮想サーバの状態	77
表 5-5 仮想サーバのパスの状態	77
表 6-1 定義文のエラーメッセージの内容	91
表 A-1 トランスポート層 (TL) の詳細エラーコード , 切断理由コード	124
表 A-2 OSI 拡張機能使用時の詳細エラーコード , 切断理由コード	124
表 A-3 ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の詳細エラーコード , 切断理由コード	125
表 A-4 ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の NSAP 登録拒否理由コード	126
表 D-1 XNF/AS から XNF/LS への構成定義文の変更点	131
表 D-2 XNF/AS の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応	132
表 D-3 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の , XNF/AS と XNF/LS の構成定義文の変更点	133
表 D-4 XNF/AS と XNF/LS とのコマンド文法の相違点	133
表 D-5 XNF/LS で削除されたコマンド (XNF/AS と XNF/LS の相違点)	137
表 E-1 XNF/H から XNF/LS への構成定義文の変更点	138
表 E-2 XNF/H の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応	139
表 E-3 XNF/H と XNF/LS とのコマンド文法の相違点	139
表 E-4 XNF/LS で削除されたコマンド (XNF/H と XNF/LS の相違点)	142

1 概要

XNF/LS は , Red Hat Linux , または HP-UX 11i(IPF) 上で RFC1006 プロトコルに基づく OSI 通信を可能にする通信管理プログラムです。この章では , XNF/LS の特長や XNF/LS が扱うプロトコルとサービスの範囲を説明します。また , XNF/LS を使用するために必要なハードウェア , およびソフトウェアの構成について説明します。

1.1 特長

1.2 プロトコルとサービス

1.3 構成

1.1 特長

XNF/LS は通信管理プログラムです。XNF/LS には次のような特長があります。

(1) Red Hat Linux , または HP-UX 11i(IPF) 上で RFC1006 プロトコルに基づく OSI 通信が可能

XNF/LS は , Red Hat Linux または HP-UX 11i(IPF) 上での OSI 拡張機能を備えています。OSI 拡張機能は , RFC1006 プロトコルに基づく TCP/IP 上で OSI 通信 (TLI 通信機能) を実現する機能です。

また , OSI 拡張機能に機能を追加した , OSI 拡張高信頼化機能も備えています。ただし , OSI 拡張高信頼化機能は , HP-UX 11i(IPF) では使用できません。

(2) 構成情報の作成と管理

XNF/LS は , ユーザが容易に構成情報を作成できる機能 (構成定義機能) を提供します。

(3) 保守機能の強化

トレースや障害ログを採取する機能 , および運用状態を表示する機能など , さまざまな保守機能を備えています。

1.2 プロトコルとサービス

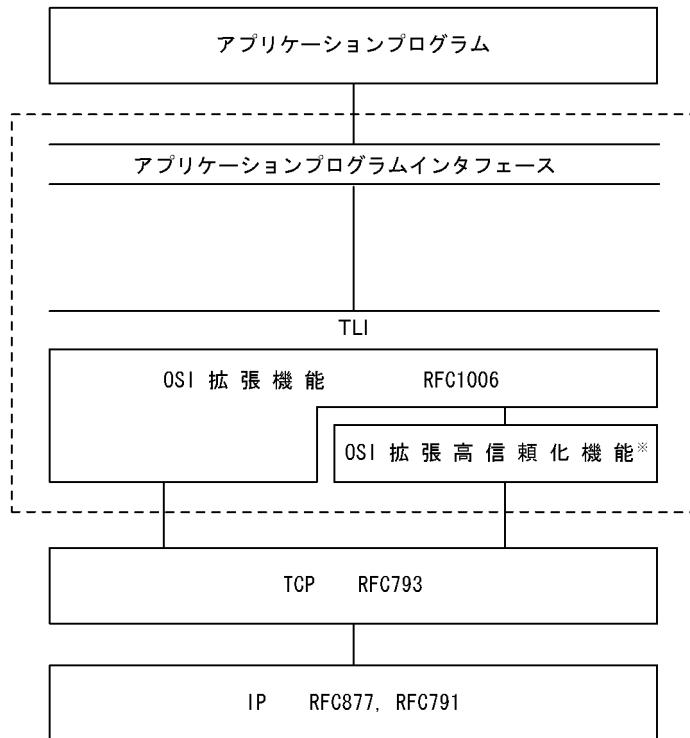
XNF/LS を使うと、次の機能で通信できます。

- TLI 通信機能
- OSI 拡張機能

1.2.1 プロトコルの範囲

XNF/LS が扱うプロトコルとサービスの範囲を図 1-1 に示します。

図 1-1 プロトコルと XNF/LS のサービス範囲（エンドシステムでの OSI 拡張機能）



(凡例) [] : XNF/LS のサービス範囲

注※ HP-UX 11i (IPF) では使用できません。

1.2.2 プロトコルの機能

XNF/LS がサポートする機能を表 1-1 に示します。

1. 概要

表 1-1 XNF/LS がサポートする機能

機能	機能詳細	サポート可否
ネットワークコネクションへの割り当て	-	
TPDU の転送	-	
分割と組み立て	-	
連結と分離	-	×
コネクションの確立	-	
コネクションの確立の拒否	-	
正常解放	暗黙的 明示的	×
異常解放	-	
TPDU のトランSPORTコネクションへの関連づけ	-	
DT_TPDU の番号付け	普通フォーマット	×
	拡張フォーマット	×
優先データ転送	ネットワーク普通データ転送	×
	ネットワーク優先データ転送	×
障害後の再割り当て	-	×
TPDU 確認までの保持	ネットワークの送達確認	×
	AK	×
再同期	-	×
多重化と逆多重化	-	×
明示的フロー制御	使用	×
	不使用	
チェックサム	使用	×
	不使用	
凍結レファレンス	-	×
タイムアウト時の再送	-	×
再順序付け	-	×
無活動監視制御	-	×
プロトコル誤りの扱い	-	
分流と合流	-	×
コネクション設定処理中の初期データ交換	-	×
TPDU 長指定省略時の扱い	仮定値 65531 オクテット	

(凡例)

: サポートします。

× : サポートしません。

- : 該当しません。

1.3 構成

ここでは、XNF/LS を使用するときのハードウェア構成、およびソフトウェア構成について説明します。

1.3.1 ハードウェア構成

XNF/LS は、Red Hat Enterprise Linux 5.1 (x86 , Intel EM64T) , Red Hat Enterprise Linux 5.3 (x86 , Intel EM64T) , または HP-UX 11i V3(IPF) が適用できる BladeSymphony , HA8500 シリーズなどのハードウェア構成で動作できます。

1.3.2 ソフトウェア構成

ここでは、XNF/LS を構成するソフトウェア、および XNF/LS が動作するために必要な前提プログラムについて説明します。

(1) XNF/LS を構成するソフトウェア

XNF/LS は次のプログラムから構成されています。

- XNF/LS/BASE
XNF/LS のベースプログラムで、構成定義や運用コマンドの機能を提供します。
- XNF/LS/OSI Extension
XNF/LS/BASE の下で、TCP/IP 上での OSI 通信（TLI 通信機能）を提供します。
- XNF/LS/OSI Extension/Cluster
XNF/LS/BASE と XNF/LS/OSI Extension の下で、自局 IP アドレス指定機能を提供します。
- XNF/LS/Host Adaptor
XNF/LS/BASE と XNF/LS/OSI Extension の下で、OSI 拡張高信頼化機能を提供します。

(2) 前提プログラム

XNF/LS を使用するには前提プログラムとして次のどれかが必要です。

- Red Hat Enterprise Linux 5.1 (x86 , Intel EM64T)
- Red Hat Enterprise Linux 5.3 (x86 , Intel EM64T)
- HP-UX 11i V3(IPF)

XNF/LS が動作するための OS です。

2 機能

XNF/LS には、ソフトウェア資源を定義する機能、通信を行う上で必要な通信機能、および連続運転をするための保守運用機能があります。この章では、それぞれの機能の概要を説明します。

2.1 構成の定義機能

2.2 通信機能

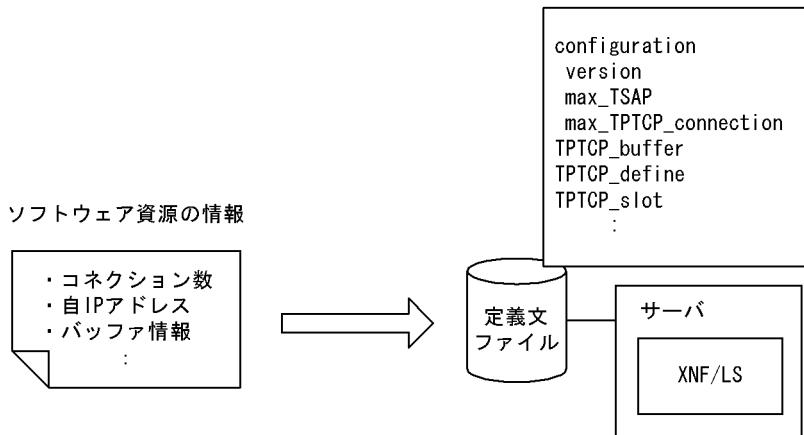
2.3 保守運用機能

2.1 構成の定義機能

XNF/LS にはユーザが容易に構成情報を作成し、管理できる機能があります。ここでは、構成の定義機能について説明します。

XNF/LS に情報を与えるために、構成定義文を使用します。定義文は XNF/LS が管理や操作をするときの対象となるソフトウェア資源についての情報や付加制御情報を XNF/LS に与えます。定義文を作成することで、XNF/LS を使用する環境を整えます。定義文の役割を図 2-1 に示します。

図 2-1 定義文の役割



XNF/LS の構成定義文の詳細については、「4. 構成定義文」を参照してください。

2.2 通信機能

XNF/LS では、通信機能として OSI 拡張機能を提供しています。また、付加的な通信機能として、自局 IP アドレス指定機能、および OSI 拡張機能に機能を追加した OSI 拡張高信頼化機能も提供しています。ここでは、これらの機能について説明します。

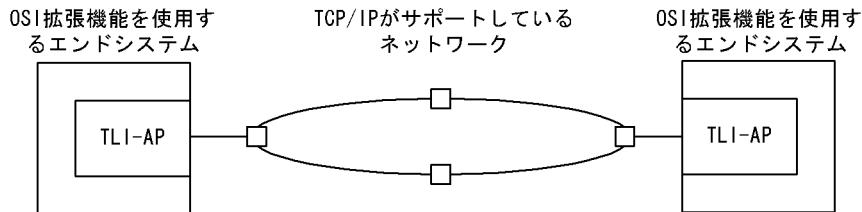
2.2.1 OSI 拡張機能

OSI 拡張機能は、TCP/IP ネットワーク上で、RFC1006 に基づく OSI 通信（TLI 通信機能）を行う通信機能です。XNF/LS では、エンドシステムとして OSI 通信（TLI 通信機能）を行います。

エンドシステムの上位 AP は TLI 通信機能を使用する AP です。マニュアルでは、これらの AP を総称して「TLI-AP」と表記します。

OSI 拡張機能のネットワーク構成を図 2-2 に示します。

図 2-2 OSI 拡張機能のネットワーク構成



2.2.2 自局 IP アドレス指定機能

自局 IP アドレス指定機能は、OSI 拡張機能を使用するエンドシステムで、アプリケーションプログラムから送信元 IP アドレスを明示的に指定する機能です。

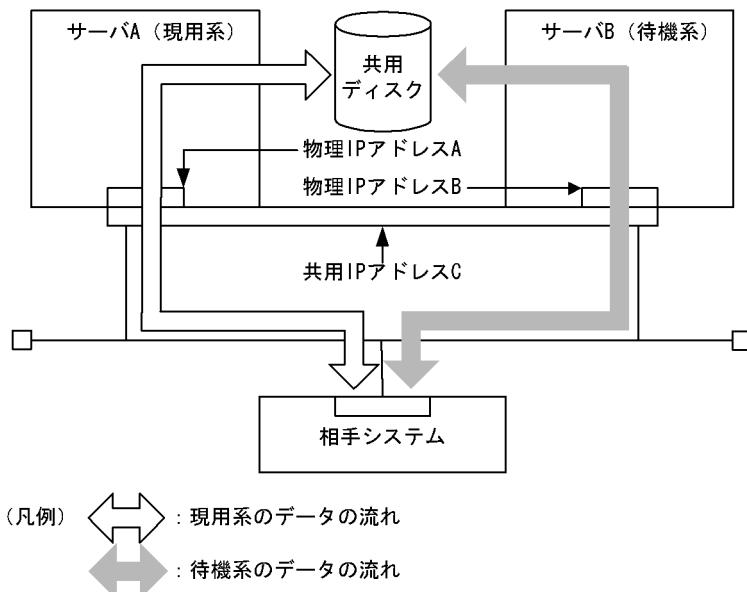
自局 IP アドレス指定機能は、OSI 拡張機能を使用するエンドシステムで発呼する場合にだけ有効で、着信する場合は無効となります。

系切り替えで自局 IP アドレス指定機能を使用する構成例を図 2-3 に示します。

この構成例のように、現用系・待機系サーバの自局 IP アドレス指定機能で共用 IP アドレス C を定義すれば、系切り替えが発生した場合でも相手システムから見える送信元 IP アドレスを同じに見せることができます。

2. 機能

図 2-3 自局 IP アドレス指定（系切り替え）構成例



なお、系切り替え構成での IP アドレスの設定方法については、系切り替えを制御する HA モニタなどの製品マニュアルを参照してください。

2.2.3 OSI 拡張高信頼化機能

(1) 機能概要

OSI 拡張高信頼化機能は、従来の OSI 拡張機能に加え、次のような特長を持っています。

- TCP/IP 上で相手システムの状態を監視する機能
TCP/IP 上で相手システムの状態を監視します。相手システムの状態を監視することで、障害を検出する時間、および障害の回復に掛かる時間を短縮できます。
- 障害検出時またはホットスタンバイの切り替え処理時に確立しているコネクションを解放する機能
障害を検出した場合、またはホットスタンバイによって通信相手を切り替えた場合、自動的にコネクションを解放します。
- 仮想サーバ機能
仮想サーバ機能を使用すると、仮想サーバを定義できます。仮想サーバにネットワークアドレスを持つことができるため、系切り替えが発生しても、仮想サーバを移動することで、同じネットワークアドレスで通信を再開できます。

なお、この機能は VOS3 システムとの接続でだけ有効となります。また、この機能は HP-UX 11i(IPF) では使用できません。

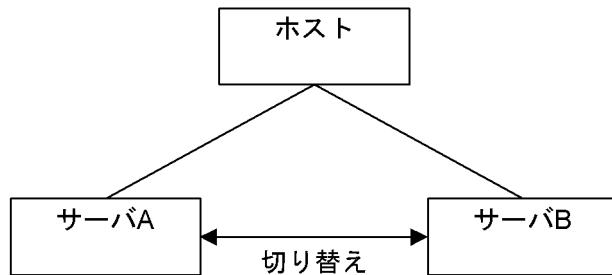
(2) 基本構成例

(a) サーバ現用 / 予備運用

サーバ現用 / 予備運用での系切り替えでは、障害発生時に実行系サーバから待機系サーバへの切り替えが発生した場合でも、ホスト側アプリケーションで通信路の変更を意識しないで動作できます。

サーバ現用 / 予備運用での系切り替え構成例を次に示します。

図 2-4 サーバ現用 / 予備運用での系切り替え構成例 (OSI 拡張高信頼化機能)

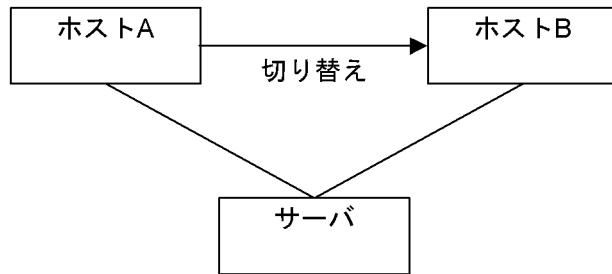


(b) ホスト予備運用

ホスト予備運用では、実行系ホスト側の障害で待機系ホストへ系切り替えをした場合でも、サーバ側アプリケーションは通信路が変更されたことを意識しないで動作できます。

ホスト予備運用での系切り替え構成例を次に示します。

図 2-5 ホスト予備運用での系切り替え構成例 (OSI 拡張高信頼化機能)



2.3 保守運用機能

XNF/LS はハードウェアの障害を一部分に限定し、連続運転をできるようにするための保守運用機能を備えています。

2.3.1 コマンドでの運用

XNF/LS には、連続運転をできるようにするための保守運用機能として、運用コマンドがあります。運用コマンドは、次のような場合に使用します。

- リソースの状態を表示する場合
- 障害の原因を究明するために、資料を採取する場合

XNF/LS の機能と対応する運用コマンドの一覧を表 2-1 に示します。コマンドの詳細については、「5.2 運用コマンドの詳細」を参照してください。

表 2-1 XNF/LS の機能と運用コマンド

運用		XNF/LS の機能	使用する運用コマンド
通常の運用	起動・終了	XNF/LS を開始します。	xnfstart
		XNF/LS を終了します。	xnfstop
	定義文のチェックおよびゼネレーションファイルの作成	XNF/LS の構成定義文をチェックしゼネレーションファイルを作成します。	xnfgen
	構成の変更	XNF/LS 稼働中にリソースを追加します。	xnfstart -R
		仮想サーバを削除します。	xnfdel
	定期的な保守	AP および OSI 拡張高信頼化機能のリソースの状態を表示します。	xnfshow
		XNF/LS のバッファ使用状況を表示します。	
障害時の運用	メッセージの表示	エラーメッセージを表示します。	comlog
	障害の回復、またはリソースの切り替え	仮想サーバをオンライン状態にします。	xnfonline
		仮想サーバをオフライン状態にします。	xnfoffline
	障害原因の調査	XNF/LS 稼働中に、XNF/LS の内部テーブルのメモリダンプを取得して編集します。	xnftdump
		トレースを採取します。	xnftrace
		トレースを編集します。	xnfedit

2.3.2 構成変更

現在運用中の仮想サーバの構成を変更したい場合、定義文ファイルの情報を変更します。XNF/LS の稼働中にコマンドで変更します。操作方法については、「3.3 構成の変更」を参照してください。

3

環境設定と運用

この章では、XNF/LS を使用するときに必要な環境の設定方法、および XNF/LS を組み込んだあとの実際の運用方法について説明します。

3.1 XNF/LS の環境設定

3.2 開始と終了

3.3 構成の変更

3.4 XNF/LS が使用する障害情報ファイル

3.5 XNF/LS が output するメッセージ

3.6 異常時の運用

3.7 キープアライブ機能

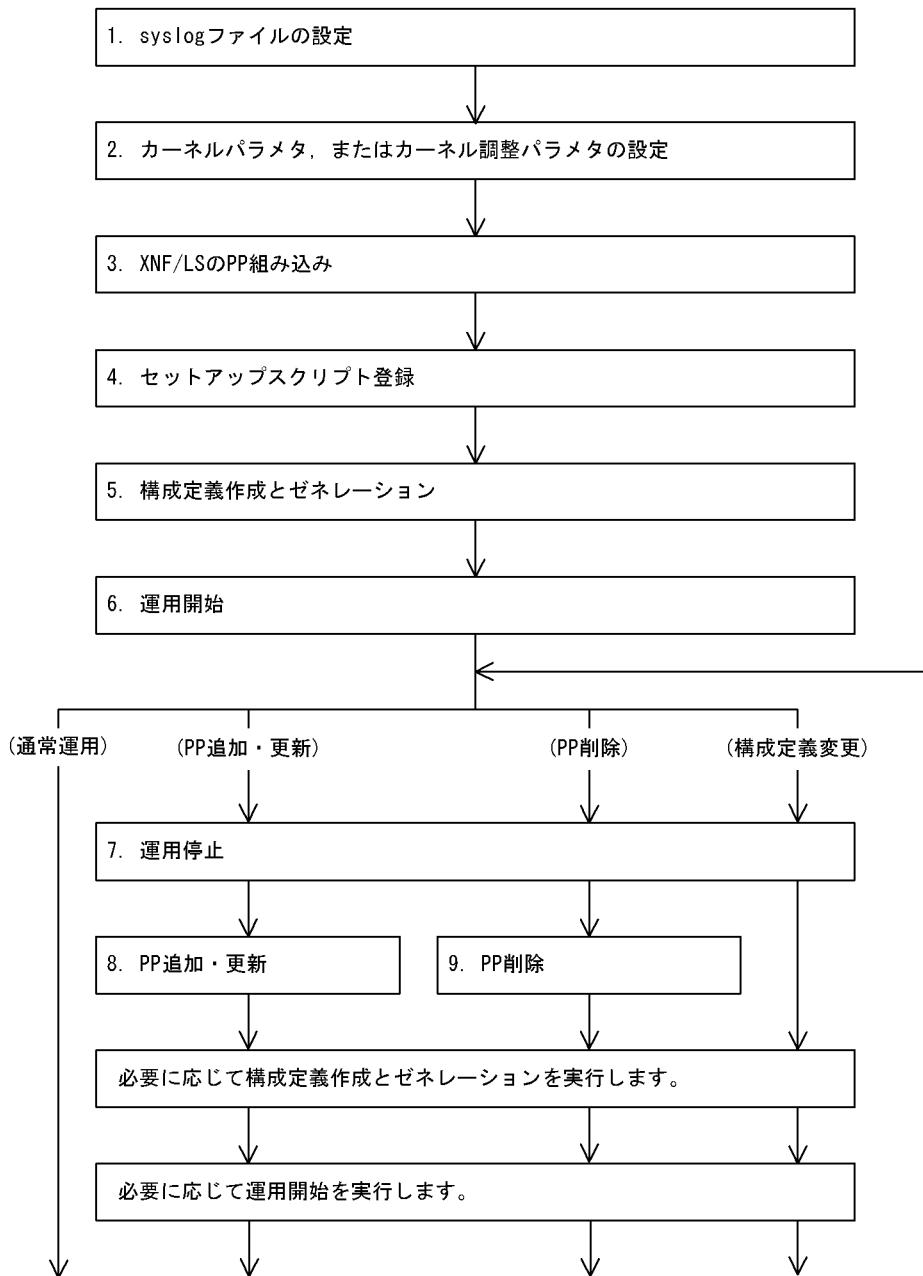
3.8 自局 IP アドレス指定機能を使用するときの注意事項

3.9 OSI 拡張高信頼化機能を使用するときの注意事項

3.1 XNF/LS の環境設定

XNF/LS を使用するためには必要な環境設定の手順を図 3-1 に示します。

図 3-1 XNF/LS の環境設定



3.1.1 環境設定 (Red Hat Linux の場合)

Red Hat Linux の場合の環境設定の手順を次に示します。

(1) syslog ファイルの設定

syslog ファイルの設定手順を次に示します。

1. syslog の設定ファイルに syslog ファイルの格納先を設定します。
2. service syslog restart などでデーモンを再起動します。

syslog ファイルは障害発生時の記録が残るように、1 日以上残すようにしてください。

syslog の詳細については、OS のマニュアルを参照してください。

(2) カーネルパラメタの設定、gzip パッケージのインストール

(a) カーネルパラメタの設定

必要に応じて、カーネルパラメタを変更します。XNF/LS に関連するカーネルパラメタを表 3-1 に示します。

表 3-1 XNF/LS に関連するカーネルパラメタ

項目	カーネルパラメタ	設定ファイル
共有メモリ識別子のシステム最大数 ¹	kernel.shmmni	/etc/sysctl.conf
システム内の共有メモリ全体の制限	kernel.shmall	
共有メモリセグメントの最大サイズ ²	kernel.shmmax	
セマフォ識別子ごとのセマフォの最大数 ³	kernel.sem の第 1 引数	
システム全体のセマフォの最大数 ³	kernel.sem の第 2 引数	
セマフォ識別子の最大数 ³	kernel.sem の第 4 引数	

注 1

XNF/LS/BASE が使用する共有メモリ識別子は 3 個です。

注 2

XNF/LS/BASE が使用する共有メモリのセグメントサイズについては、リリースノートを参照してください。

注 3

XNF/LS/BASE が使用するセマフォ識別子は 1 個です。また、セマフォ識別子に対するセマフォは 2 個となります。

カーネルパラメタの設定方法については、OS のマニュアルを参照してください。

3. 環境設定と運用

(b) gzip パッケージのインストール

xnftdump コマンドは、gzip コマンドと zcat コマンドを使用するため、gzip パッケージをインストールする必要があります。

(3) XNF/LS の PP 組み込み

必要なディスク容量をチェックし日立 PP インストーラを組み込みます。組み込んだ日立 PP インストーラを起動し、必要な PP を選択して PP の組み込みを実施します。

(4) セットアップスクリプト登録

XNF/LS/BASE の PP 組み込み後、セットアップスクリプトをシステムに登録できます。セットアップスクリプトはシステムの起動・停止時に、XNF/LS を自動的に運用開始状態、および運用停止状態にするためのものです。この登録をしなかったり、間違ったりするとシステムの起動・停止での自動運用はできません。次のように登録してください。

(a) OS 起動時のセットアップスクリプト登録

/etc/rc.d/rc?.d/S**xnfs を作成し、/etc/xnfstart を記述します。

? : ランレベルを示す整数（1 けた）

システム運用に合わせて決定してください。

** : 起動順序を示す 00 から 99 までの整数（2 けた）

システム上のネットワーク設定が起動してから、XNF/LS を起動するように決定してください。

(b) OS 停止時のセットアップスクリプト登録

/etc/rc.d/rc?.d/K**xnfs を作成し、/etc/xnfstop を記述します。

? : ランレベルを示す整数（1 けた）

システム運用に合わせて決定してください。

** : 終了順序を示す 00 から 99 までの整数（2 けた）

システム上のネットワーク設定が終了する前に、XNF/LS を終了するように決定してください。

(5) 構成定義作成とゼネレーション

vi コマンドなどを使用して、定義文ファイルを作成してください。XNF/LS の定義文ファイルのファイル名称は自由に付けられます。作成したあと、-c オプション指定の xnfgen コマンドを実行して、文法的に正しいかどうかチェックします。文法エラーがなくなつてから、-c オプション指定なしの xnfgen コマンドを使用してゼネレーションを実行してください。ゼネレーションを実行すると、定義文ファイルから XNF/LS を開始するためには必要なゼネレーションファイルが生成されます。構成定義文作成の詳細については、「4. 構成定義文」を参照してください。

(6) 運用開始

運用開始の手順については、「3.2 開始と終了」を参照してください。

(7) 運用停止

XNF/LS の PP を追加・更新・削除および構成定義を変更する場合は、運用を停止する必要があります。運用を停止する場合、最初に上位 AP を停止し、その後 XNF/LS を停止します。XNF/LS の運用停止の手順については、「3.2 開始と終了」を参照してください。

(8) PP 追加・更新

日立 PP インストーラの組み込みが不要な以外は「3.1.1(3)XNF/LS の PP 組み込み」、「3.1.1(4) セットアップスクリプト登録」と同じ手順です。

(9) PP 削除

日立 PP インストーラで不要な PP を選択して削除します。XNF/LS/BASE を削除した場合は、「3.1.1(4) セットアップスクリプト登録」で登録したセットアップスクリプトを OS の rm コマンド (-f 指定) で削除します。間違ないように注意が必要です。

3.1.2 環境設定 (HP-UX 11i(IPF) の場合)

HP-UX 11i(IPF) の場合の環境設定の手順を次に示します。

(1) syslog ファイルの設定

syslog ファイルの設定手順を次に示します。

1. syslogd の設定ファイル (/etc/syslog.conf) に syslog ファイルの格納先を設定します。
2. kill -HUP `cat /var/run/syslog.pid` などで、/etc/syslog.conf の内容をデーモンに反映します。

syslog ファイルは障害発生時の記録が残るように、1 日以上残すようにしてください。

syslog ファイルの容量は /etc/default/syslogd で指定できます。syslog の詳細については、OS のマニュアルを参照してください。

(2) カーネル調整パラメタの設定

必要に応じて、カーネル調整パラメタを変更します。XNF/LS に関するカーネル調整パラメタを表 3-2 に示します。

3. 環境設定と運用

表 3-2 XNF/LS に関するカーネル調整パラメタ

項目	カーネル調整パラメタ
システム内の共有メモリセグメント識別子の最大数 ¹	shmmni
プロセスごとの共有メモリセグメントの最大数 ¹	shmseg
共有メモリセグメントの最大サイズ ²	shmmmax
セマフォ識別子ごとのセマフォの最大数 ³	semmsl
システム全体のセマフォの最大数 ³	semnns
セマフォ識別子の最大数 ³	semnni
プロセスの取り消し構造体の最大数 ⁴	semnnu
プロセスごとの取り消しエントリの最大数 ⁵	semume
読み取り / 書き込み共有メモリをプロセスコアダンプに含めるかどうかの決定 ⁶	core_addshmem_write

注 1

XNF/LS/BASE が使用する共有メモリセグメント識別子は 2 個です。

注 2

XNF/LS/BASE が使用する共有メモリのセグメントサイズについては、リリースノートを参照してください。

注 3

XNF/LS/BASE が使用するセマフォ識別子は 1 個です。また、セマフォ識別子に対するセマフォは 2 個となります。

注 4

XNF/LS/BASE のプロセスの取り消し構造体の最大数を次に示します。

$\text{max_TPTCP_connection} \div 128 + \text{XNF/LS のコマンド同時実行数} + \text{XNF/LS にアクセスする上位 AP のプロセス数} + 3$

: 計算結果の値を小数点以下で切り上げることを示します。

注 5

XNF/LS/BASE のプロセスごとの取り消しエントリの最大数は 2 です。

注 6

1 を設定します。0 を設定していると、XNF/LS が異常終了した場合に出力されるコアダンプに、共有メモリ情報が採取されないため、異常終了した原因を究明できません。

カーネル調整パラメタの設定方法については、OS のマニュアルを参照してください。

(3) XNF/LS の PP 組み込み

必要なディスク容量をチェックし日立 PP インストーラを組み込みます。組み込んだ日立 PP インストーラを起動し、必要な PP を選択して PP の組み込みを実施します。

(4) セットアップスクリプト登録

XNF/LS/BASE の PP 組み込み後、セットアップスクリプトをシステムに登録できます。セットアップスクリプトはシステムの起動・停止時に、XNF/LS を自動的に運用開始状態、および運用停止状態にするためのものです。この登録をしなかったり、間違ったりするとシステムの起動・停止での自動運用はできません。次のように登録してください。

(a) OS 起動時のセットアップスクリプト登録

/sbin/rc?.d/S***xnfs を作成し、/etc/xnfstart を記述します。

? : ランレベルを示す整数（1けた）
システム運用に合わせて決定してください。

*** : 起動順序を示す 000 から 999 までの整数（3けた）
システム上のネットワーク設定が起動してから、XNF/LS を起動するように決定してください。

(b) OS 停止時のセットアップスクリプト登録

/sbin/rc?.d/K***xnfs を作成し、/etc/xnfstop を記述します。

? : ランレベルを示す整数（1けた）
システム運用に合わせて決定してください。

*** : 終了順序を示す 000 から 999 までの整数（3けた）
システム上のネットワーク設定が終了する前に、XNF/LS を終了するように決定してください。

(c) OS 起動時および停止時のセットアップスクリプトの例

OS 起動時および停止時のセットアップスクリプトの例を次に示します。

```
#!/sbin/sh
#
# XNF/LS start/stop script
#
PATH=/usr/sbin:/usr/bin:/sbin
export PATH

rval=0

case $1 in
'start_msg')
    echo "Starting XNF/LS"
;;
esac
```

```
'stop_msg')
    echo "Stopping XNF/LS"
    ;;
'start')
    /etc/xnfstart
    rval=$?
    ;;
'stop')
    /etc/xnfstop
    rval=$?
    ;;
*)
    echo "usage: $0 {start|stop|start_msg|stop_msg}"
    rval=1
    ;;
esac

exit $rval
```

(5) 構成定義作成とゼネレーション

vi コマンドなどを使用して、定義文ファイルを作成してください。XNF/LS の定義文ファイルのファイル名称は自由に付けられます。作成したあと、-c オプション指定の xnfgen コマンドを実行して、文法的に正しいかどうかチェックします。文法エラーがなくなってから、-c オプション指定なしの xnfgen コマンドを使用してゼネレーションを実行してください。ゼネレーションを実行すると、定義文ファイルから XNF/LS を開始するために必要なゼネレーションファイルが生成されます。構成定義文作成の詳細については、「4. 構成定義文」を参照してください。

(6) 運用開始

運用開始の手順については、「3.2 開始と終了」を参照してください。

(7) 運用停止

XNF/LS の PP を追加・更新・削除および構成定義を変更する場合は、運用を停止する必要があります。運用を停止する場合、最初に上位 AP を停止し、その後 XNF/LS を停止します。XNF/LS の運用停止の手順については、「3.2 開始と終了」を参照してください。

(8) PP 追加・更新

日立 PP インストーラの組み込みが不要な以外は「3.1.2(3)XNF/LS の PP 組み込み」、「3.1.2(4) セットアップスクリプト登録」と同じ手順です。

(9) PP 削除

日立 PP インストーラで不要な PP を選択して削除します。XNF/LS/BASE を削除した場

場合は、「3.1.2(4) セットアップスクリプト登録」で登録したセットアップスクリプトをOSのrmコマンド(-f指定)で削除します。間違えないように注意が必要です。

3.2 開始と終了

ここでは、XNF/LS の開始処理と終了処理について説明します。

3.2.1 開始処理

(1) 自動開始

OS 起動時のセットアップスクリプトを登録している場合、XNF/LS はシステムを起動すると自動的に開始されます。このため、xnfstart コマンドを入力する必要はありません。OS 起動時のセットアップスクリプトについては、OS ごとに次の箇所を参照してください。

Red Hat Linux の場合

「3.1.1(4)(a)OS 起動時のセットアップスクリプト登録」

HP-UX 11i(IPF) の場合

「3.1.2(4)(a)OS 起動時のセットアップスクリプト登録」

なお、TPTCP_VC 文の initial_status オペランドに HAM と指定した仮想サーバをオンライン状態にする場合、xnfonline コマンドを入力する必要があります。

(2) コマンドでの開始

次のような場合に xnfstart コマンドを入力して XNF/LS を開始します。

- xnfstop コマンドで強制終了したとき
- システムの起動時に XNF/LS を自動開始しない（OS 起動時のセットアップスクリプトを登録していない）とき
- OS 起動時のセットアップスクリプトを登録しているが、XNF/LS が自動開始に失敗したとき

なお、TPTCP_VC 文の initial_status オペランドに HAM と指定した仮想サーバをオンライン状態にする場合、xnfonline コマンドを入力する必要があります。

xnfstart コマンド、xnfonline コマンドについては、「5.2 運用コマンドの詳細」を参照してください。

(3) 構成変更後の開始

xnfstop コマンドで XNF/LS を終了させたあと、それまでのシステム構成を変更して再度 XNF/LS を開始するには、xnfstart コマンドで XNF/LS を起動する前に、xnfgen コマンドでゼネレーションファイルを生成する必要があります。ゼネレーションファイルの生成方法については、「4.1.1(1) 定義文ファイルの作成と通常ゼネレーション」を参照してください。

XNF/LS が動作中の構成変更については、「3.3 構成の変更」を参照してください。

3.2.2 終了処理

OS 停止時のセットアップスクリプトを登録している場合、XNF/LS はシステムが終了すると自動的に終了します。OS 停止時のセットアップスクリプトについては、OS ごとに次の個所を参照してください。

Red Hat Linux の場合

「3.1.1(4)(b)OS 停止時のセットアップスクリプト登録」

HP-UX 11i(IPF) の場合

「3.1.2(4)(b)OS 停止時のセットアップスクリプト登録」

xnfstop コマンドで終了する場合は、XNF/LS を使用するすべての上位アプリケーションプログラムが終了してから入力します。アプリケーションプログラムが通信中のときには、xnfstop コマンドを入力すると、障害になることがあります。xnfstop コマンドについては、「5.2 運用コマンドの詳細」を参照してください。

3.3 構成の変更

XNF/LS の稼働中に、仮想サーバの構成を変更できます。構成変更には次の三つがあります。

- リソースの追加
- リソースの削除
- 同一リソースの変更

XNF/LS の稼働中に、構成変更できるリソースは仮想サーバだけです。なお、仮想サーバは、configuration 文の max_TPTCP_VC オペランドで指定した数まで追加できます。

仮想サーバの構成の変更は、OSI 拡張高信頼化機能使用時に使用できます。HP-UX 11i(IPF) では、OSI 拡張高信頼化機能が使用できないため、構成の変更はできません。

(1) リソースの追加

XNF/LS を停止しないでリソースを追加できます。現在稼働中のリソースへの影響はありません。定義文ファイルにリソースを追加し、xnfgen コマンドでゼネレーションファイル作成後、xnfstart -R コマンドで稼働中の XNF/LS にリソースを追加します。

リソースの追加手順を次に示します。

1. 運用中の定義文ファイルを複写します。
2. 複写した定義文ファイルに、追加したいリソースを追加します。
3. xnfgen -c コマンドで文法をチェックし、誤りがあれば修正します。
4. 文法誤りがなくなったら、運用中の定義文ファイルにリソースを追加したファイルを上書きします。
5. xnfgen コマンド (-c オプションなし) で、追加した構成のゼネレーションファイルを作成します。
6. xnfstart -R コマンドで、動作中の XNF/LS にリソースを追加します。
7. comlog コマンドを入力するか、または syslog ファイルを参照して、xnfstart -R コマンド実行時にエラーメッセージが表示されていないことを確認します。
エラーメッセージが表示されている場合、エラーメッセージに従い手順 1 からやり直してください。
8. 必要に応じて、追加したリソースに対して xnfonline コマンドを入力し、運用を開始します。

(2) リソースの削除

XNF/LS の稼働中に特定のリソースを削除できます。xnfdelete コマンドでリソース名称を指定して削除します。xnfdelete コマンドでリソースを削除しても、定義文ファイルの

内容は更新されません。xnfdelete コマンドでリソースを削除したあとに定義文ファイルの内容を更新し、xnfgen コマンドでゼネレーションファイルを作成してください。

xnfdelete コマンドでリソースを削除したあと、定義文ファイルの内容を更新して、xnfgen コマンドでゼネレーションファイルを作成しないと、XNF/LS の停止（xnfstop コマンドの入力、システムの終了、または XNF/LS の異常終了）後、XNF/LS を再開始しても、XNF/LS はゼネレーションファイルの内容で開始されるので、削除したはずのリソースが、削除されていない状態で起動されてしまいます。

リソースの削除手順を次に示します。

1. リソースの状態がオフライン状態でなければ、xnfoffline コマンドでリソースの運用を停止します。
2. xnfdelete コマンドで、対象となるリソースを削除します。
3. 削除したリソースをゼネレーションファイルに反映するため、定義文ファイルを複写します。
4. 複写した定義文ファイルから、xnfdelete コマンドで削除したリソースを削除します。
5. xnfgen -c コマンドで文法をチェックし、誤りがあれば修正します。
6. 文法誤りがなくなったら、運用中の定義文ファイルにリソースを削除したファイルを上書きします。
7. xnfgen コマンド（-c オプションなし）で、削除した構成のゼネレーションファイルを作成します。

（3）同一リソースの変更

同一リソースの変更は、「(2) リソースの削除」で示したリソースを削除したあと、「(1) リソースの追加」で示したリソースを追加することで行います。定義文ファイルの内容を変更して、xnfgen コマンドおよび xnfstart -R コマンドを実行しても、あらかじめリソースを削除しておかないと、変更した内容は有効になりません。

3.4 XNF/LS が使用する障害情報ファイル

XNF/LS は、動作中に障害情報などの情報をファイルに出力します。XNF/LS が使用する障害情報ファイルの使用目的と作成時期を表 3-3 に示します。

表 3-3 XNF/LS が使用する障害情報ファイルの使用目的と作成時期

ファイル名	使用目的	作成時期
/xnfs/ras/log/msglog	メッセージログ	xnfstart 時
/xnfs/ras/log/softlog	ソフトウェアエラーログ	xnfstart 時
/xnfs/ras/dump/ コアファイル	XNF/LS のプロセスの障害情報	XNF/LS のプロセス異常終了時

注

- Red Hat Linux の場合、/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更しているときは、/xnfs/ras/dump ディレクトリではなく、kernel.core_pattern で指定したディレクトリにコアファイルが出力されます。
- XNF/LS が起動してから XNF/LS が停止するまでに出力される最大コアファイル数は 6 個です。それ以外に、xnftrace コマンドで起動したトレースデーモンが異常終了した場合は、異常終了した回数分のコアファイルが出力されます。

XNF/LS は、障害発生時のダンプやログなどの障害情報を /xnfs/ras/ ディレクトリ下に格納します。これらの障害情報は次に発生した障害で上書きされてしまうため、別の場所に退避するようにしてください。

3.5 XNF/LS が出力するメッセージ

XNF/LS は、動作中にコマンドに対する応答メッセージや、障害発生メッセージを出力します。メッセージの出力先および参照方法を表 3-4 に示します。

表 3-4 メッセージの出力先および参照方法

出力メッセージ種別	出力先	参照方法
xnfstart コマンドに対するエラーメッセージ	syslog ファイル	vi コマンドなどで syslog ファイルを参照します。
	標準エラー出力	-
xnfstart -R コマンドに対するエラーメッセージ	syslog ファイル	vi コマンドなどで syslog ファイルを参照します。
	XNF/LS の内部メモリ	comlog コマンドで参照します。
xnfstart コマンド以外のコマンドに対するメッセージ	標準出力	-
	標準エラー出力	-
リソースの障害メッセージ（非同期メッセージ）	syslog ファイル	vi コマンドなどで syslog ファイルを参照します。
	XNF/LS のメッセージファイル	comlog コマンドで参照します。

（凡例）- : 該当しません。

XNF/LS のメッセージファイルに蓄えられるメッセージ数は、約 400 個までです。メッセージファイルはラップアラウンド形式で使用するため、古いメッセージは comlog コマンドを入力しても参照できない場合があります。

syslog ファイル容量は、1 日程度のメッセージを保持できるようにしてください。

3.6 異常時の運用

XNF/LS の稼働中に発生する、障害に対する運用方法について説明します。

3.6.1 回復処理の手順

障害を検出した場合、XNF/LS は自動的に障害発生メッセージを XNF/LS のメッセージファイルや syslog ファイルに採取します。

回復処理の手順を次に示します。

手順

1. 障害発生メッセージ (syslog ファイルまたは comlog コマンドで出力した標準出力を参照) から、障害が発生した個所を確認します。
2. 障害発生メッセージから障害の原因を特定します。特定できない場合、トレース情報の採取などで調査します。トレース情報の採取については、「5.2.11 xnftrace (トレースを採取する)」を参照してください。
3. 障害の原因を取り除きます。

3.6.2 異常時の処理

(1) プロセスの異常終了

XNF/LS のプロセスとして次のものがあります。

- 通信プロセス：XNF/LS の通信を行うプロセス
- デーモンプロセス：通信プロセスと連動して通信を行うプロセス

XNF/LS のプログラムエラーで通信プロセスが異常終了した場合、XNF/LS は自動的にコアファイル (XNF/LS のプロセスの障害情報) を採取し、回復回数上限 (3 回) まで通信プロセスを回復します。それでも回復できない場合、XNF/LS は停止状態になります。デーモンプロセスが異常終了した場合は、デーモンプロセスの回復処理は行わずにコアファイルを採取して、XNF/LS は停止状態になります。XNF/LS が停止した場合、オペレータは、メッセージの内容に従って xnfstart コマンドで XNF/LS を再開始する必要があります。通信プロセスが異常終了した場合、KANF17003-E メッセージが出力されてコアファイルが出力されますが、次に通信プロセスが異常終了すると上書きされるおそれがあるため、コアファイルを退避してください。

(2) システムのメモリ不足

TPTCP_buffer 文で定義したバッファプール領域が、システムで使用できるメモリ容量より大きいと、XNF/LS が開始できません。xnfstart コマンド入力時に、メモリ不足のメッセージが表示されます。この場合、TPTCP_buffer 文で定義するバッファ容量を再見積りする必要があります。

また、XNF/LS 動作中に、xnfshow コマンドでバッファプールの使用状況を見ることができます。xnfshow コマンドで取得した情報を基に、バッファ容量の再見積もりをしてください。

(3) ファイルの I/O エラー

ファイル関連のシステムコールの、ログ情報が採取されていますので、そのエラー番号を解析して障害を取り除いてください。

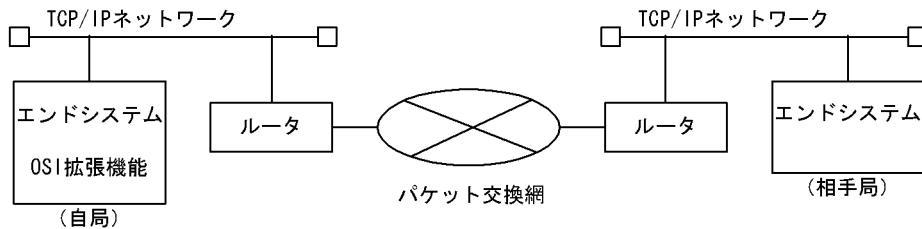
3.7 キープアライブ機能

OSI拡張機能では、ソケットの「キープアライブ機能」を使用できます。キープアライブ機能は、確立したTCPコネクション上で定期的なメッセージ通信を行うことによって、回線障害などの発生を検知するためのものです。図3-2に示すようなネットワーク構成では、パケット交換網をキープアライブ機能によるデータパケットが通過します。なお、このデータパケットも課金対象となります。

キープアライブ機能を使用するかどうかは選択できます。ただし、OSI拡張高信頼化機能上のOSI拡張機能の通信では、常に使用します。

キープアライブ機能の詳細については、OSのマニュアルを参照してください。

図3-2 パケット交換網を経由するネットワーク構成例



3.8 自局 IP アドレス指定機能を使用するときの注意事項

自局 IP アドレス指定機能を使用するときの注意事項について説明します。

- 自局 IP アドレス指定機能を使用する場合、TPTCP_slot 文の VASS オペランドで指定した仮想スロット番号を、TLI を使用する AP が XNF/LS に通知する必要があります。
仮想スロット番号は、マルチネットワーク情報のアダプタ番号フィールドに設定して通知します。指定可能な仮想スロット番号の範囲は 20 ~ 49 です。
- TPTCP_slot 文の IP_address オペランドで指定した IP アドレスで着信した場合、アプリケーションプログラムには TPTCP_define 文の VASS オペランドで指定した仮想スロット番号を通知します。
- TPTCP_slot 文の IP_address オペランドで指定した IP アドレスで着信してコネクションが確立した状態で、xnfshow コマンドで TLI 通信機能のリソースを表示した場合、TPTCP_define 文の VASS オペランドで指定した仮想スロット番号が表示されます。

3.9 OSI 拡張高信頼化機能を使用するときの注意事項

OSI 拡張高信頼化機能を使用するときの注意事項を次に示します。

3.9.1 アダプタ番号の指定

仮想サーバの仮想スロット番号（VASS）を指定する場合、アプリケーションプログラムが TPTCP_VC 文の VASS オペランドで定義した仮想スロット番号を通信管理に通知する必要があります。

仮想スロット番号は、マルチネットワーク情報のアダプタ番号フィールドに設定して通知します。アダプタ番号で指定できる仮想スロット番号の範囲を次の表に示します。

表 3-5 指定できる仮想スロット番号の範囲

アダプタ番号指定方法	指定できる仮想スロット番号の範囲
数値指定	1 ~ 900

TPTCP_common 文の host_adaptor_port オペランドで指定したポート番号で着呼した場合、相手局が指定した自 NSAP アドレスに対応する仮想スロット番号（TPTCP_VC 文の VASS オペランドで指定）を選択します。OSI 拡張機能で指定したポート番号（TPTCP_define 文の isotsap_port オペランドで指定）で着呼した場合、TPTCP_define 文の VASS オペランドで指定した仮想スロット番号を選択します。

4 構成定義文

この章では、XNF/LS の構成定義文について説明します。

4.1 作成の概要

4.2 構成定義文の記述方法

4.3 構成定義文の詳細

4.4 構成定義文の定義例

4. 構成定義文

4.1.1 作成の流れ

4.1 作成の概要

ここでは、構成定義文の作成の概要について説明します。

4.1.1 作成の流れ

構成定義文を記述した定義文ファイルを作成します。定義文ファイルを作成後、ゼネレーションを行います。ゼネレーションには、通常ゼネレーションと自動ゼネレーションがあります。

(1) 定義文ファイルの作成と通常ゼネレーション

構成定義文は、エディタ（viなど）で定義文ファイルに作成します。定義文ファイルは複数の構成定義文から構成されます。また、コメントも書くことができます。定義文ファイルの名称は任意です。

作成した定義文ファイルの文法を「`xnfgen -f 定義ファイル名 -c`」コマンドでチェックし、文法誤りを訂正したあと、「`xnfgen -f 定義ファイル名`」コマンドでゼネレーションを実行してください。

定義を反映させるには、`xnfstart` コマンドを入力する必要があります。

(2) 自動ゼネレーション

XNF/LS は各 PP のインストール時に、自動ゼネレーションします。自動ゼネレーションする定義文ファイルは、インストール前にゼネレーションされたときの定義文ファイルを XNF/LS がバックアップしたファイルです。

4.1.2 定義文一覧と指定できる文数

XNF/LS の構成定義文の一覧と指定できる文数、および構成定義文の省略可否を表 4-1 に示します。また、OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の構成定義文の省略可否を表 4-2 に示します。

表 4-1 構成定義文と指定できる文数

定義文名	定義内容	定義の文数	必須 / 省略可
構成定義開始宣言文 (configuration)	構成定義情報の開始を宣言します。共通項目情報の最大値を与えます。	先頭に 1 文	必須
OSI 拡張機能用バッファ定義文 (TPTCP_buffer)	OSI 拡張機能で使用するバッファ情報を与えます。	0 ~ 1 文	省略可
OSI 拡張機能用情報定義文 (TPTCP_define)	OSI 拡張機能が使用する仮想スロット情報を与えます。	1 文	必須

定義文名	定義内容	定義の文数	必須 / 省略可
OSI 拡張機能用自局 IP アドレス定義文 (TPTCP_slot)	自局 IP アドレス指定で使用する仮想スロット情報を与えます。	0 ~ 30 文	省略可
OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文 (TPTCP_common)	OSI 拡張高信頼化機能で使用する共通な情報を与えます。	1 文	省略可
OSI 拡張高信頼化機能用仮想サーバ定義文 (TPTCP_VC)	OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合に必要となる、ネットワーク情報を仮想サーバ単位に与えます。	1 ~ 64 文	省略可

表 4-2 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の構成定義文

定義文名	必須 / 省略可
configuration 文	必須
TPTCP_buffer 文	省略可
TPTCP_define 文	必須
TPTCP_common 文	省略可
TPTCP_VC 文	必須

4. 構成定義文

4.2.1 基本文法

4.2 構成定義文の記述方法

ここでは、構成定義文の記述方法について説明します。

4.2.1 基本文法

構成定義文は、次に示すように定義文名とオペランド、および定義文の終わりを示す；(セミコロン)で構成されています。構成定義文は、単に定義文とも呼びます。

定義文名 オペランド オペランド… ;

(1) 定義文名

定義の先頭に位置し、定義文の種別を表します。

(2) オペランド

定義文のオペランドは、キーワードか値のどちらかです。値もキーワードになることがあります。オペランドの指定順序に制限はありません。

(3) 定義文の終わり

セミコロン(;)が定義文の終わりを表します。

(4) コメント

コメントは、/* と */で囲みます。

コメントが書けるのは、次の場所です。

- 定義文名とオペランドとの間の部分
- オペランドとオペランドとの間の部分
- オペランドキーワードとオペランドとの間の部分

(5) 区切り記号

次の文字が、定義文とオペランド、およびオペランドとオペランドの区切り記号になります。

- 空白(スペース)
- LF(¥n) : Line Feed(改行)
- HT(¥t) : Horizontal Tabulation(タブ)
- コメント

定義文名、オペランドキーワード、およびオペランドの文字列中に上記の文字を入れてはいけません。

(6) 指定領域

エディタ (vi など) で入力できる領域が , 指定領域です。

4.2.2 オペランドの階層

オペランドは階層を持ちません。

4.2.3 日本語の扱い

日本語入力はできません。ただし , コメント内には使用できます。

4.2.4 全角文字および , 半角文字の扱い

半角の文字だけを対象とし , 全角の文字は対象外です。ただし , コメント内には使用できます。

4. 構成定義文

4.3.1 configuration (構成定義開始宣言文)

4.3 構成定義文の詳細

ここでは、構成定義文をアルファベット順に説明します。

4.3.1 configuration (構成定義開始宣言文)

(1) 機能

XNF/LS の構成定義の開始を宣言します。この定義文に続けて、各定義文を定義します。

(2) 定義条件

構成定義文全体に対して、定義の先頭に 1 回だけ必ず定義します。

(3) 書き方

```
configuration
    version バージョン番号
    max_TSAP 最大TSAP数
    max_TPTCP_connection 最大トランsportコネクション数
        [max_TPTCP_VC OSI拡張高信頼化機能の最大仮想サーバ数]
        [max_TPTCP_path OSI拡張高信頼化機能の最大パス数]
        [max_TPTCP_vhost OSI拡張高信頼化機能の最大接続相手仮想ホスト数]
    ;
```

(4) オペランド

OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合、configuration 文のすべてのオペランドを定義する必要があります。

(a) version

バージョン番号 ~ <10 進数>((0 ~ 99))

定義文の履歴を管理するバージョン番号を指定します。このオペランドは、ユーザが構成定義を管理するために使用します。

(b) max_TSAP

最大 TSAP 数 ~ <10 進数>((1 ~ 2048))

TSAP を同時に使用する最大数を指定します。

(c) max_TPTCP_connection

最大トランsportコネクション数 ~ <10 進数>((1 ~ 2048))

同時に使用できるトランsportコネクション数の最大数を指定します。このオペラン

ドは、max_TPTCP と省略して指定することもできます。

(d) max_TPTCP_VC

OSI 拡張高信頼化機能の最大仮想サーバ数 ~ <10 進数>((1 ~ 64))

OSI 拡張高信頼化機能で使用する最大仮想サーバ数を指定します。

このオペランドを省略すると、OSI 拡張高信頼化機能を使用したホストとの通信ができません。

このオペランドを指定する場合、次のオペランドを同時に指定してください。

- max_TPTCP_path オペランド
- max_TPTCP_vhost オペランド

(e) max_TPTCP_path

OSI 拡張高信頼化機能の最大パス数 ~ <10 進数>((1 ~ 64))

OSI 拡張高信頼化機能で使用するホストから接続可能なパスの最大値を指定します。

このオペランドを省略すると、OSI 拡張高信頼化機能を使用したホストとの通信ができません。

このオペランドを指定する場合、次のオペランドを同時に指定してください。

- max_TPTCP_VC オペランド
- max_TPTCP_vhost オペランド

(f) max_TPTCP_vhost

OSI 拡張高信頼化機能の最大接続相手仮想ホスト数 ~ <10 進数>((1 ~ 64))

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバの接続先相手仮想ホストの最大数を指定します。

このオペランドを省略すると、OSI 拡張高信頼化機能を使用したホストとの通信ができません。

このオペランドを指定する場合、次のオペランドを同時に指定してください。

- max_TPTCP_VC オペランド
- max_TPTCP_path オペランド

4. 構成定義文

4.3.2 TPTCP_buffer (OSI 拡張機能用バッファ定義文)

4.3.2 TPTCP_buffer (OSI 拡張機能用バッファ定義文)

(1) 機能

バッファプール名称とバッファ個数，およびバッファ長を指定します。

(2) 定義条件

configuration 文の下で 1 回だけ定義できます。この定義文は省略できます。

(3) 書き方

```
TPTCP_buffer
  name バッファプール名称
  [send_number 送信バッファ個数]
  [recv_number 受信バッファ個数]
  ;
```

(4) オペランド

(a) name

バッファプール名称 ~ <英数字>((8 文字以内))

バッファプール名称を指定します。

(b) send_number

送信バッファ個数 ~ <10 進数>((16 ~ 2048)) 《max_TPTCP_connection オペランドの値》

送信バッファプールのバッファ個数を指定します。

同時に使用するトランスポートコネクション数の値を推奨します。 configuration 文の max_TPTCP_connection オペランドの値が 16 未満の場合に， send_number オペランドを省略した場合は， 16 が仮定されます。

(c) recv_number

受信バッファ個数 ~ <10 進数>((16 ~ 2048)) 《max_TPTCP_connection オペランドの値》

受信バッファプールのバッファ個数を指定します。

同時に使用するトランスポートコネクション数の値を推奨します。 configuration 文の max_TPTCP_connection オペランドの値が 16 未満の場合に recv_number オペランドを省略した場合は， 16 が仮定されます。

なお，受信バッファプールのバッファ長（バイト）は TPTCP_define 文の max_TPDU

オペランドの指定値です。

(5) 注意事項

- バッファの使用状況は , xnfshow コマンドで確認できます。使用状況を確認して必要に応じて定義する数を調整してください。
- この定義文を省略した場合 , 次に示すデフォルトのバッファプールを自動的に割り当てます。
 - バッファプール名称 : *TPTCP
 - バッファ面数 : configuration 文の max_TPTCP_connection オペランドの指定値 configuration 文の max_TPTCP_connection オペランドの指定値が 16 未満の場合は , 16 が割り当てられます。
 - バッファ長 :
 - ・送信バッファの場合 : 65528 (バイト)
 - ・受信バッファの場合 : TPTCP_define 文の max_TPDU オペランドの指定値

4. 構成定義文

4.3.3 TPTCP_common (OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文)

4.3.3 TPTCP_common (OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文)

(1) 機能

OSI 拡張高信頼化機能で使用する共通情報を指定します。

(2) 定義条件

OSI 拡張高信頼化機能で仮想ホストと通信する場合 , configuration 文の下で 1 回だけ定義します。この定義文は省略できます。

(3) 書き方

```
TPTCP_common
[host_adaptor_port OSI拡張高信頼化機能の着呼用ポート番号]
[patrol_time パスの生存監視タイマ]
[tcp_nodelay {yes|no}]
:
```

(4) オペランド

(a) host_adaptor_port

OSI 拡張高信頼化機能の着呼用ポート番号 ~ < 10 進数 > ((1 ~ 65535)) 《 22102 》

OSI 拡張高信頼化機能で , 相手ホストからの着呼を受け付ける TCP のポート番号を指定します。

省略した場合は , 22102 を使用します。

(b) patrol_time

パスの生存監視タイマ ~ < 10 進数 > ((1 ~ 2550)) 《 30 》

パスの生存監視時間 (単位 : 秒) を指定します。

(c) tcp_nodelay { yes | no }

OS の機能である TCP の Nagle アルゴリズムを無効にするかどうかを指定します。省略した場合は no が仮定されます。

Nagle アルゴリズムは , 小さなデータしか送信しない場合に , データをすぐに送信しないで , 幾つかのデータを一つのパケットにまとめて送信する機能です。Nagle アルゴリズムについては , TCP/IP に関するドキュメントを参照してください。

yes :

Nagle アルゴリズムを無効にします。

4.3.3 TPTCP_common (OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文)

データをまとめないで、そのまますぐに送信します。このため、送信済みデータが応答待ちの状態になっても、遅延させることなくデータを送信できます。ただし、通信時の送信効率が低下して、ネットワークのトラフィックが増加するおそれがあります。

no :

Nagle アルゴリズムを無効にしません。

小さなデータしか送信しない場合は、データをすぐに送信しないで、幾つかのデータを一つのパケットにまとめてから送信します。

4. 構成定義文

4.3.4 TPTCP_define (OSI 拡張機能用情報定義文)

4.3.4 TPTCP_define (OSI 拡張機能用情報定義文)

(1) 機能

OSI 拡張機能が使用する仮想スロット番号を指定します。

(2) 定義条件

configuration 文の下で 1 回だけ定義できます。この定義文は省略できません。

(3) 書き方

```
TPTCP_define
  VASS 仮想スロット番号
    [isotsap_port 着呼用TCPポート番号]
    [max_TPDU {128|256|512|1024|2048|65531}]
    [TS1_TS1タイム値]
    [tcp_nodeLAY {yes|no}]
    [so_keepalive {yes|no}]
  ;
```

(4) オペランド

(a) VASS

仮想スロット番号 ~ <10 進数>((1 ~ 8))

仮想スロット番号を指定します。番号は任意に指定できますが、ほかの定義文の VASS 定義と同一の番号は指定できません。この番号は、上位 AP が指定するスロット番号と合わせる必要があります。仮想スロット番号とは、上位プログラムが使用する番号です。

(b) isotsap_port

着呼用 TCP ポート ~ <10 進数>((0 ~ 65535)) 《102》

相手局ホストからの着呼を受け付ける TCP のポート番号を指定します。RFC1006 では、102 を使用します。省略した場合は 102 が仮定されます。0 を指定した場合、相手局ホストからの着呼を受け付けません。

(c) max_TPDU {128|256|512|1024|2048|65531}

最大 TPDU 長 (バイト) を指定します。

このオペランドの指定値は、OSI 拡張高信頼化機能でも有効になります。

(d) TS1

TS1 タイマ値 ~ <10 進数>((10 ~ 3600)) 《60》

TS1 タイマ値 (秒) を指定します。TS1 タイマ値には、次のどちらかを指定します。

- トランSPORTコネクション確立時の応答監視時間
- 接続先にエラーを通知したあと、接続先からの TCP コネクション解放監視時間

このオペランドの指定値は、OSI 拡張高信頼化機能でも有効になります。

(e) `tcp_nodelay { yes | no }`

OS の機能である TCP の Nagle アルゴリズムを無効にするかどうかを指定します。省略した場合は no が仮定されます。

Nagle アルゴリズムは、小さなデータしか送信しない場合に、データをすぐに送信しないで、幾つかのデータを一つのパケットにまとめて送信する機能です。Nagle アルゴリズムについては、TCP/IP に関するドキュメントを参照してください。

OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合には、TPTCP_common 文の `tcp_nodelay` オペランドの指定値が有効となります。

`yes` :

Nagle アルゴリズムを無効にします。

データをまとめないで、そのまますぐに送信します。このため、送信済みデータが応答待ちの状態になってしまっても、遅延させることなくデータを送信できます。ただし、通信時の送信効率が低下して、ネットワークのトラフィックが増加するおそれがあります。

`no` :

Nagle アルゴリズムを無効にしません。

小さなデータしか送信しない場合は、データをすぐに送信しないで、幾つかのデータを一つのパケットにまとめてから送信します。

(f) `so_keepalive { yes | no }`

OS の機能である TCP キープアライブパケットを送信するかどうかを指定します。省略した場合は yes が仮定されます。

このオペランドの指定は、OSI 拡張高信頼化機能には適用されません。

`yes` :

TCP キープアライブパケットを送信します。

`no` :

TCP キープアライブパケットを送信しません。

4. 構成定義文

4.3.5 TPTCP_slot (OSI 拡張機能用自局 IP アドレス定義文)

4.3.5 TPTCP_slot (OSI 拡張機能用自局 IP アドレス定義文)

(1) 機能

OSI 拡張機能が使用する仮想スロット番号と自局 IP アドレスの対応を指定します。

(2) 定義条件

自局 IP アドレスを指定して OSI 拡張機能を使用する場合に定義します。configuration 文の下で 30 回まで定義できます。

(3) 書き方

```
TPTCP_slot
  VASS 仮想スロット番号
  IP_address IPアドレス
  ;
```

(4) オペランド

(a) VASS

仮想スロット番号 ~ <10 進数> ((20 ~ 49))

仮想スロット番号を指定します。番号は任意に指定できますが、ほかの VASS 定義と同一の番号は指定できません。この番号は上位 AP が指定するスロット番号と合わせる必要があります。

(b) IP_address

IP アドレス ~ <10 進数> ((各バイト単位に 0 ~ 255))

自局の IP アドレスを、バイトごとにピリオド(.) で区切って、10 進数で指定します。

IP アドレスには「0.0.0.0」以外を指定してください。

(5) 注意事項

- IP_address オペラントに指定する IP アドレスは、OS の設定と合わせる必要があります。
- IP_address オペラントで指定した IP アドレスで着信し、コネクションが確立した状態で TLI 通信機能のリソースを表示 (xnfshow コマンドを実行) した場合、TPTCP_define 文の VASS オペラントで指定した仮想スロット番号が表示されます。

4.3.6 TPTCP_VC (OSI 拡張高信頼化機能用仮想サーバ定義文)

(1) 機能

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバ情報を定義します。

(2) 定義条件

OSI 拡張高信頼化機能で仮想ホストと通信するときに定義できます。

configuration 文の max_TPTCP_VC オペランドで指定した数まで定義できます。

(3) 書き方

```
TPTCP_VC
  name 仮想サーバ名称
  VASS 仮想スロット番号
  [DTE_address 自局のDTEアドレス]
  [network_id ネットワーク識別子]
  [initial_status {active|HAM}]
;
```

(4) オペランド

(a) name

仮想サーバ名称 ~ <英数字> ((14 文字以内))

仮想サーバ名称には、定義文中で固有な値を指定します。

(b) VASS

仮想スロット番号 ~ < 10 進数 > ((1 ~ 900))

仮想スロット番号を任意に指定できます。仮想スロット番号には、ほかの定義文で指定する仮想スロット番号と同一の番号を指定できません。

(c) DTE_address

自局の DTE アドレス ~ < 10 進数 > ((先頭 0 以外の 7 けた))

このオペランドと network_id オペランドを定義することで、INTAP (V1.0) アドレス体系実装規約の WAN 形式 2 の NSAP アドレスを自動生成します。このオペランドは、DTE_addr と省略して指定することもできます。

次の点に注意して、自局 DTE アドレスを設定してください。

- 「 DTE_address オペランド + network_id オペランド」は、ほかの仮想サーバ定義文

4. 構成定義文

4.3.6 TPTCP_VC (OSI 拡張高信頼化機能用仮想サーバ定義文)

で指定している「DTE_address オペランド + network_id オペランド」(NSAP アドレス)と異なるアドレスを指定してください。

- DTE アドレスの先頭 1 けたは , 0 以外の値を指定してください。

(d) network_id

ネットワーク識別子 ~ < 10 進数 > ((9000 ~ 9999))

このオペランドと DTE_address オペランドを定義することで , INTAP (V1.0) アドレス体系実装規約の WAN 形式 2 の NSAP アドレスを自動生成します。このオペランドは , net_id として省略して指定することもできます。

次の点に注意して , 自局 DTE アドレスを設定してください。

- 「DTE_address オペランド + network_id オペランド」は , ほかの仮想サーバ定義文で指定している「DTE_address オペランド + network_id オペランド」(NSAP アドレス)と異なるアドレスを指定してください。

(e) initial_status { active | HAM }

XNF/LS を開始したときの仮想サーバの状態を指定します。このオペランドは , init_st と省略して指定することもできます。また , このオペランドの指定を省略した場合は , active が仮定されます。

active :

現用の仮想サーバです。

HAM :

予備の仮想サーバです。

4.4 構成定義文の定義例

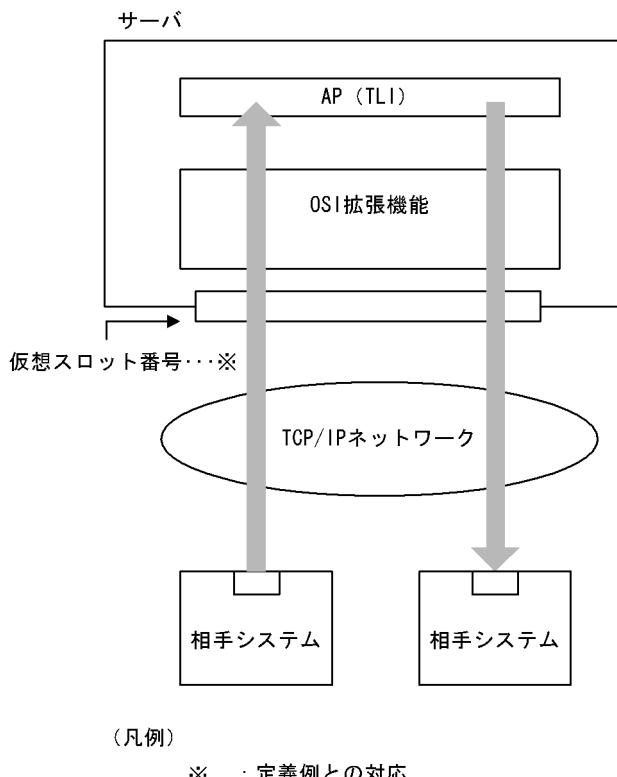
ここでは、構成定義文の定義例について説明します。

4.4.1 OSI拡張機能を使用する場合の定義

(1) 構成例

OSI拡張機能を使用した場合の構成例を図4-1に示します。なお、図中の注[※]は、「4.4.1(2) 定義例」と対応しています。

図4-1 OSI拡張機能を使用した場合の構成例



(2) 定義例

定義例を次に示します。定義中の注[※]は、図4-1と対応しています。

```
configuration
  version 1
  max_TSAP 64
  max_TPTCP_connection 64
;
```

4. 構成定義文

4.4.2 自局 IP アドレス指定機能を使用する場合の定義

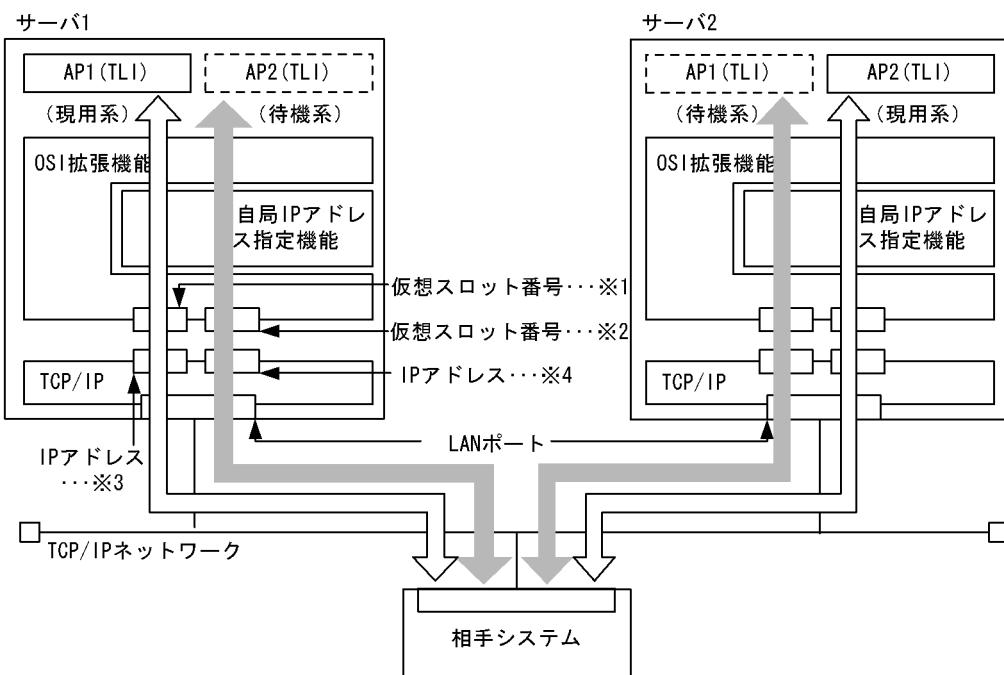
```
TPTCP_define  
    VASS 6 .....  
;  
TPTCP_buffer  
    name TP_BUF  
    send_number 128  
    recv_number 128  
;
```

4.4.2 自局 IP アドレス指定機能を使用する場合の定義

(1) 構成例

相互系切り替え構成で自局 IP アドレス指定機能を使用した場合の構成例を図 4-2 に示します。なお、図中の注 は、「4.4.2(2) 定義例」と対応しています。

図 4-2 相互系切り替え構成で自局 IP アドレス指定機能を使用した場合の構成例



(凡例)

※n : 定義文との対応

↔ : 現用系のデータの流れ

↔ : 待機系のデータの流れ

(2) 定義例

定義例を次に示します。定義中の注 は、図 4-2 と対応しています。

```

configuration
version          1
max_TSAP        16
max_TPTCP_connection 16
;
TPTCP_define
    VASS      8
;
TPTCP_slot
    VASS      20 ..... 1
    IP_address 192.168.100.1 ..... 3
;
TPTCP_slot
    VASS      21 ..... 2
    IP_address 192.168.100.2 ..... 4
;

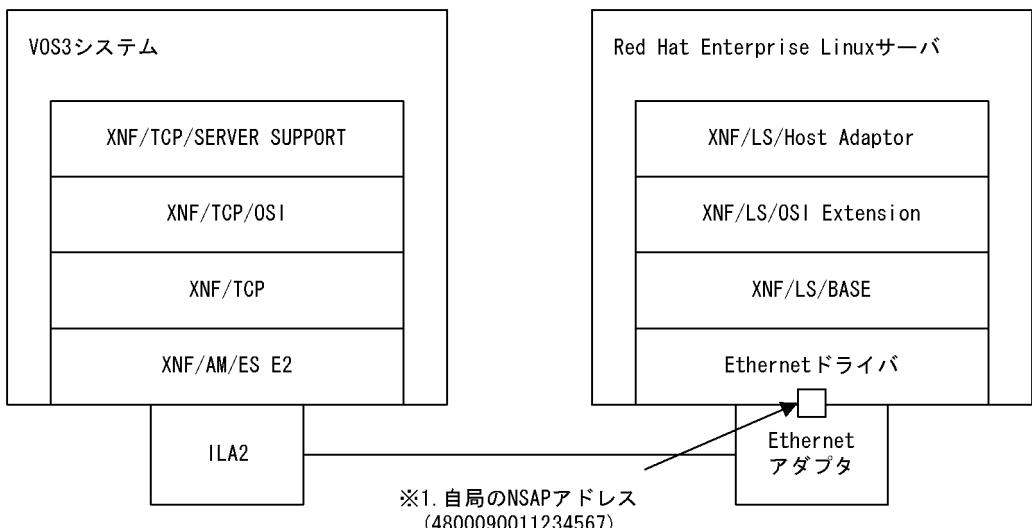
```

4.4.3 OSI拡張高信頼化機能を使用する場合の定義

(1) 構成例

1台のRed Hat Enterprise Linuxサーバと1台のVOS3システムを、OSI拡張高信頼化機能を使用して接続する場合の構成例を次の表に示します。

図4-3 OSI拡張高信頼化機能を使用して接続する場合の構成例



(2) 定義例

定義例を次に示します。なお、定義中の番号は、図4-3の番号と対応しています。

(a) Red Hat Enterprise LinuxサーバのXNF/LSの定義例

```
configuration
```

4. 構成定義文

4.4.3 OSI拡張高信頼化機能を使用する場合の定義

```
version 1
max_TPTCP_VC 5
max_TPTCP_path 1
max_TPTCP_vhost 1
max_TSAP 100
max_TPTCP_connection 100
;
TPTCP_common
    patrol_time 30
;
TPTCP_define
    VASS 6
;
TPTCP_VC
    name TPVC01
    VASS 100
    DTE_address 1234567 ..... 1
    network_id 9001 ..... 1
    initial_status active
;
```

(b) VOS3システムのXNF/AM/ES E2の定義例

```
/*********************************************
/* XNF/AM DEFINITION FOR XNF/LS/HOST ADAPTOR */
/*
/* HOST      : HOST1
/*
/*********************************************
DEFINE-NETWORK
    VERSION 2;
DEFINE-SUBNETWORK
    NAME HSTFEP
    SNIC 8002
    AUTHORITY PRIVATE
    TYPE HOST-FEP
    VERSION 2;
/*********************************************
/* HOST1
/*
/*********************************************
HOST-NODE NAME HOST1 VERSION 25 SNPA-NNP 100;
    ULE NAME HOST1XNF TYPE XNF
        XNF-PARAMS CONNECTION(50 1024 50 100)
            COMMAND 20
            TRACE-BUF 128
            DATA-BUF (500,1024,500,9)
            TCP-HIGH-PERFORMANCE USE
                /* XNF/TCP HIGH-PERFORMANCE MODE */
                /* XNF/TCP PARAMETER */
            TCP-CONNECTION (50 103)
            TPTCP-CONNECTION (50 102)
            TCP-DATA-BUF (968 1700 295 4);
        ULE NAME XTCP
            TYPE UCE
            UCE-PARAMS AUTHORIZE NO-CHECK
            T-SELECTOR X'01000001'
            PERFORMANCE-LEVEL HIGH /* HIGH-PERFORMANCE */
            U-FUNCTION-PROFILE UPROF.XNFTCP;
        ULE N OSAS1000 TYPE OSAS TSEL X'00010000'
            UPROFILE UPROF.SV.TL2;
        ULE N OSAS2000 TYPE OSAS TSEL X'00020000'
            UPROFILE UPROF.SV.TL2;
/*
/* SERV1
/*
/*********************************************
```

4.4.3 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の定義

```

ULE NAME ULE1           /* XNF/TCP/OSI TLAPPL      */
TYPE UCE
T-SELECTOR X'0A'
UCE-PARAMS AUTHORIZE NO-CHECK
PERFORMANCE-LEVEL HIGH /* HIGH-PERFORMANCE      */
U-FUNCTION-PROFILE UPROF.SV.TL2;
/******************************************** */
/* PROFILE DEFINITION                  */
/******************************************** */
DEFINE-PROFILE NAME PROF;
    U-FUNCTION-PROFILE NAME UPROF.SV.TL2
        T-CONNECTION-PROFILE TCONN.SV.TL2
        S-CONNECTION-PROFILE S-PROF;
    U-FUNCTION-PROFILE NAME UPROF.XNFTCP
        TL-SPECIFICATION
        EXPEDITED-DATA NOT-USE
        SL-SPECIFICATION
        MAX-TSDU 0;
    S-CONNECTION-PROFILE NAME S-PROF
        MAX-TSDU 0;
    T-CONNECTION-PROFILE NAME TCONN.SV.TL2
        EXPEDITED-DATA NOT-USE
        TL-CLASS 2;

```

(c) VOS3 システムの XNF/TCP/OSI (OTLDEF) の定義例

```

OTLDEF INITIAL
OTLDEF APPL,UCE=OSAS1000,TSEL=X'A0000000'
OTLDEF APPL,UCE=OSAS2000,TSEL=X'B0000000'
OTLDEF TLAPPL,UCE=ULE1,UCETYPE=UCE,
        TSEL=X'0102',
        MAXTPDU=65531
OTLDEF FINAL
END
X
X

```

(d) VOS3 システムの XNF/TCP/SERVER SUPPORT (XOTLDF) の定義例

```

XOTLDF INITIAL
HOST1 XOTLDF VNODER,NSAP=4800090010000001,NODE=(HOST1)
OSAS1000 XOTLDF UCE
OSAS2000 XOTLDF UCE
SERV1 XOTLDF VNODER,NSAP=4800090011234567,NODE=(SERV1) .... 1
ULE1 XOTLDF UCE
HOST1 XOTLDF NODE
SERV1 XOTLDF NODE
PATH1 XOTLDF PATH,NODE=(HOST1,SERV1)
XOTLDF FINAL
END

```

(e) VOS3 システムの XNF/TCP (XTCPDF) の定義例

```

/
***** */
/
/* VOS3 XNF/TCP XTCPDF TABLE      */
/
***** */
/
        XTCPDF INITIAL,HOST=1
        XTCPDF XNFTCP,UCENAME=XTCP,
                HOST=1,
                IPADDR=0A010101,
X
X
X

```

4. 構成定義文

4.4.3 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の定義

```
NIKNAME=XNFTCP,  
COMMENT='XNF/TCP MAIN UCE'  
XTCPDF FINAL  
END
```

X

(f) VOS3 システムの XNF/TCP (PROFILE) の定義例

```
DEF,N,N=HOST1,IP=10.1.1.1,VIAL=INTERNET  
DEF,ILA,N=ILAA,DCB=A00,LANTYPE=CSMACD  
DEF,L,N=LINK1,ILA=ILAA,NODE=HOST1  
DEF,N,N=SERV1,IP=10.1.1.3,VIAL=LINK1  
SYSGEN  
STA,N=ILAA
```

5

運用コマンド

この章では、XNF/LS を運用するときに使用する運用コマンドについて説明します。

5.1 運用コマンドの一覧

5.2 運用コマンドの詳細

5.1 運用コマンドの一覧

XNF/LS には、保守、運用をするための運用コマンドがあります。XNF/LS の運用コマンドを表 5-1 に示します。

表 5-1 XNF/LS の運用コマンド

分類	コマンド名	説明
スーパーユーザ用	xnfdelete	OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバを削除します。
	xnfgen	定義文ファイルを解析して、ゼネレーションファイルを作成します。
	xnfoffline	OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバをオフライン状態にします。
	xnfonline	OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバをオンライン状態にします。
	xnfstart	XNF/LS を開始します。
	xnfstop	XNF/LS を終了します。
	xnftdump	XNF/LS 稼働中に、XNF/LS の内部テーブルのメモリダンプを取得して編集します。
一般ユーザ用	xnftrace	トレースを採取します。
	comlog	エラーメッセージを表示します。
	xnfedit	トレースを編集します。
	xnfshow	AP および OSI 拡張高信頼化機能のリソースの状態を表示します。または、XNF/LS バッファ使用状況を表示します。

注意事項 :

XNF/LS の運用コマンドは、OS の TZ 環境変数に従って時刻を表示します。このため、現地時刻などの出力を必要とする場合には、TZ 環境変数を設定してください。TZ 環境変数については、OS のマニュアルを参照してください。

5.2 運用コマンドの詳細

ここでは、運用コマンドをアルファベット順に説明します。

運用コマンドの記述形式を次に示します。

コマンド名称 オプション

コマンド名称：

コマンド名称は、実行するコマンドが登録されているファイルのファイル名称です。

オプション：

オプションは、”-(ハイフン)”で始まる文字列で、引数を取らないか、または1個の引数を取ります。

オプションの記述形式を次に示します。

-オプションフラグ

または

-オプションフラグ 引数

(凡例)

オプションフラグ：

1文字の英字。英大文字と英小文字は、区別されます。

引数：

オプションフラグに対する引数で、リソースの名称やプロトコル種別などを指定します。

リソースをグループ化して操作する場合、-x オプションでキーワードを指定して操作します。操作方法については、各コマンドの説明を参照してください。

各キーワードとコマンドの対応を表 5-2 に示します。

表 5-2 キーワードとコマンドの対応

キーワード	意味	使用できるコマンド
socket	ソケット通信を示します。	xnfedit, xnftrace
tli	API を示します。	xnfedit, xnfshow, xnftrace
tpvc	OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバの情報を示します。	xnfshow

5. 運用コマンド

5.2.1 comlog (エラーメッセージを表示する)

5.2.1.1 comlog (エラーメッセージを表示する)

(1) 形式

```
/etc/comlog
```

(2) 機能

XNF/LS が動作中に出力するメッセージは、syslog ファイルや標準エラー出力に出力されますが、XNF/LS のメッセージファイルにもメッセージを蓄積しています。このコマンドを使用することで、「6. メッセージ」に示す KANF で始まるメッセージを、標準出力に出力できます。

このコマンドは、XNF/LS 停止後でも使用できます。

(3) 実行者

一般ユーザ

(4) オプション

ありません。

(5) 注意事項

- XNF/LS は、メッセージファイルに約 400 個のメッセージを蓄えられます。メッセージファイルは、ラップアラウンド形式で使用するため、古いメッセージは comlog コマンドを入力しても参照できない場合があります。
- XNF/LS を開始後、日立 PP インストーラを起動して XNF/LS 関連の PP を削除すると、XNF/LS のメッセージファイルがクリアされるため、以前のメッセージは参照できません。この場合、syslog ファイルを参照してください。

(6) 使用例

KANF で始まるメッセージを標準出力に出力します。

入力形式：

```
/etc/comlog
```

出力形式：

```
mm/dd 1 hh:mm:ss 2 メッセージID 3 メッセージテキスト 4
```

注 1

メッセージを出力した日付を示します。日付は設定されないこともあります。

注 2

メッセージを出力した時刻を示します。時刻は設定されないこともあります。

注 3

メッセージ ID を示します。

注 4

メッセージテキストを示します。

5. 運用コマンド

5.2.2 xnfdelete (構成を削除する)

5.2.2 xnfdelete (構成を削除する)

(1) 形式

```
/etc/xnfdelete -n 仮想サーバ名
```

(2) 機能

XNF/LS の稼働中に、OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバを削除します。仮想サーバを削除する場合は、必ず「3.3 構成の変更」を参照してから実施してください。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -n 仮想サーバ名

削除する仮想サーバ名を指定します。

(5) 使用例

仮想サーバ (TPVC01) を削除します。

```
/etc/xnfdelete -n TPVC01
```

5.2.3 xnfedit (トレースを編集する)

(1) 形式

```
/etc/xnfedit -i 入力ファイル名称 [-f 出力ファイル名称]
[-x キーワード]
[-t 編集開始時刻] [-e 編集終了時刻] [-u]
```

(2) 機能

xnftrace コマンドで採取したトレースのファイルを基に、トレースを編集します。なお、
xnftrace コマンドでトレースを終了してから使用します。

(3) 実行者

一般ユーザ

(4) オプション

(a) -i 入力ファイル名称

xnftrace コマンドで採取したトレースのファイル名称を指定します。このオプションは必ず指定してください。

(b) -f 出力ファイル名称

編集結果を出力するファイル名称を指定します。

指定したファイルがない場合、ファイルが作成されます。すでにある場合は、上書きされます。また、省略した場合、標準出力に出力されます。

(c) -x キーワード

特定のキーワードに対応するトレースだけを編集するときに指定します。

-x オプションを省略した場合、トレースファイルのすべてのトレースを編集します。

-x オプションで指定できるキーワードを次に示します。

socket :

ソケット通信トレース

tli :

API トレース (XNF/LS の内部情報)

(d) -t 編集開始時刻

編集を開始するトレース中の、レコードを採取した時刻を指定します。

時刻は YY:MM:DD:hh:mm:ss、または YY:MM:DD (YY:00 ~ 99, MM:01 ~ 12,

5. 運用コマンド

5.2.3 xnfedit (トレースを編集する)

DD:01 ~ 31 , hh:00 ~ 23 , mm:00 ~ 59 , ss:00 ~ 59) で指定します。

省略した場合 , 最古のレコードから編集します。

(e) -e 編集終了時刻

編集を終了するトレース中の , レコードを採取した時刻を指定します。

時刻は YY:MM:DD:hh:mm:ss , または YY:MM:DD (YY:00 ~ 99 , MM:01 ~ 12 , DD:01 ~ 31 , hh:00 ~ 23 , mm:00 ~ 59 , ss:00 ~ 59) で指定します。

省略した場合 , 最新のレコードまで編集します。

-t オプションと同時に指定した場合 , -t オプションで指定した時刻から -e オプションで指定した時刻までを編集します。

(f) -u

編集しない状態 (16 進数字ペタ打ち) で出力します。省略した場合 , 編集した状態で出力されます。

(5) 使用例

(例 1)

入力ファイル (file1) から出力ファイル (file2) へ編集して出力します。

```
/etc/xnfedit -i file1 -f file2
```

(例 2)

キーワードに tli を指定して編集します。

```
/etc/xnfedit -i file1 -x tli
```

(例 3)

2009 年 10 月 1 日 9 時 00 分 00 秒以降のトレースを編集します。

```
/etc/xnfedit -i file1 -t 09:10:01:09:00:00
```

(例 4)

2009 年 10 月 1 日 9 時 00 分 00 秒から 2009 年 10 月 1 日 9 時 59 分 59 秒までのトレースを編集します。

```
/etc/xnfedit -i file1 -t 09:10:01:09:00:00 -e 09:10:01:09:59:59
```

5.2.4 xnfgen (ゼネレーションを実行する)

(1) 形式

```
/etc/xnfgen [-f 定義ファイル名称 [-c]]
```

(2) 機能

XNF/LS の構成定義文に従って、ゼネレーションを実行します。

xnfstart、または xnfgen コマンド実行中は、次の xnfgen コマンドは実行できません。

(3) 實行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -f 定義ファイル名称

XNF/LS の構成定義文法に従って作成された定義ファイルの名称を指定します。

ゼネレーション時、および定義文法チェック時は必ず指定してください。

(b) -c

構成定義文の文法チェックだけを実行します。

定義文法誤りが検出された場合は訂正し、文法誤りがすべてなくなった時点で、ゼネレーションを実行（このオプションを指定しないで xnfgen コマンド入力）してください。

(c) 全オプション省略

最後にゼネレーションした定義ファイルの内容を標準出力に表示します。

(5) 使用例

(例 1)

定義文法をチェックします。

```
/etc/xnfgen -f conf001 -c
```

(例 2)

ゼネレーションを実行後 XNF/LS を開始します。

5. 運用コマンド

5.2.4 xnfgen (ゼネレーションを実行する)

```
/etc/xnfgen -f conf001  
/etc/xnfstart
```

5.2.5 xnfoffline (オフライン状態にする)

(1) 形式

```
/etc/xnfoffline -n 仮想サーバ名
```

(2) 機能

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバをオフライン状態にします。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -n 仮想サーバ名

オフライン状態にする仮想サーバ名を指定します。

(5) 使用例

仮想サーバ (TPVC01) をオフライン状態にします。

```
/etc/xnfoffline -n TPVC01
```

5. 運用コマンド

5.2.6 xnfonline (オンライン状態にする)

5.2.6.1 xnfonline (オンライン状態にする)

(1) 形式

```
/etc/xnfonline -n 仮想サーバ名
```

(2) 機能

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバをオンライン状態にします。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -n 仮想サーバ名

オンライン状態にする仮想サーバ名を指定します。

(5) 使用例

仮想サーバ (TPVC01) をオンライン状態にします。

```
/etc/xnfonline -n TPVC01
```

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)

(1) 形式

バッファの使用状況を表示する場合

```
/etc/xnfshow -b
```

AP の状態を表示する場合

```
/etc/xnfshow -x tli [-i 内部AP名称 | -P プロセスID | -A | -I ]
```

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバのリソースを表示する場合

```
/etc/xnfshow -x tpvc [-c]  
または  
/etc/xnfshow -n 仮想サーバ名称
```

(2) 機能

バッファの使用状況 , AP の状態 , または OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバのリソースを表示します。

AP の状態には次のものがあります。

unbnd :

アンバインド状態

idle :

未確立

wcon_creq :

確立中 (発呼側)

wres_cind :

確立中 (着呼側)

data_xfer :

確立済み

(3) 實行者

一般ユーザ

5. 運用コマンド

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)

(4) オプション

(a) -b

XNF/LS のバッファの , 使用状況を表示する場合に指定します。

(b) -x キーワード

キーワードに対応する , リソースの一覧を表示する場合に指定します。

指定できるキーワードを次に示します。

tli :

AP の一覧を表示します。

tpvc :

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバの状態 , および構成情報の一覧を表示します。

(c) -i 内部 AP 名称

内部 AP 名称を指定します。AP を特定して表示する場合に指定します。内部 AP 名称とは , XNF/LS の内部で , 上位の AP と対応付けている名称です。TLI 通信機能の内部 AP 名称は , tli0001 ~ tli6144 です。

(d) -P プロセス ID

プロセス ID に対応する AP を表示する場合に指定します。

(e) -A

アクティブ状態 (確立済み) の AP だけを一覧表示する場合に指定します。

(f) -l

インアクティブ状態 (アンバインド状態 , 未確立 , または確立中) の AP だけを一覧表示する場合に指定します。

(g) -c

パスの状態を一覧で表示します。-x オプションで tpvc を指定するときだけ , 指定できます。

(h) -n 仮想サーバ名称

指定したリソースの状態を表示します。仮想サーバがオンライン状態の場合は , 仮想サーバの情報の登録状態がパスごとに出力されます。

(5) 使用例

(例 1)

バッファの使用状況を表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -b
```

出力形式 :

```
** XNF/LS buffer information ***
buf-name(buf-id)      size      limit      max-in-past(rate)  now(rate)
+-----+-----+-----+-----+-----+
バッファ名称 1(buf-id) 2 バッファ長 バッファ個数 過去最大使用数 現在使用数
:       :       :       :       :       :
+-----+-----+-----+-----+-----+
```

注 1

バッファ名称の先頭に * が付加されているものは、XNF/LS が内部的に設定するバッファ名称です。

注 2

buf-id は、XNF/LS が内部的にバッファを管理する情報です。

出力例 :

```
/etc/xnfshow -b
*** XNF/LS buffer information ***                               08/03/25 12:51:58
buf-name (buf-id)      size      limit      max-in-past(rate)  now(rate)
+-----+-----+-----+-----+
*TPTCP_send (0x0002)  65528      40      16( 40.0%)      0( 0.0%)
*TPTCP_recv (0x0003)  65531      40      16( 40.0%)      0( 0.0%)
+-----+-----+-----+-----+
```

(例 2)

AP の一覧を表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tli
```

5. 運用コマンド

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)

出力形式 :

```
p-id:プロセスID1 name:内部AP名称2 status:状態3 vass:VASS番号4  
:
```

注 1

AP のプロセス ID が表示されます。AP からプロセス ID 情報を受信していない場合、「*****」が表示されます。

注 2

XNF/LS で AP に付加した内部 AP 名称 (tli0001 ~) が表示されます。

注 3

AP の状態が表示されます。

注 4

VASS 番号が表示されます。VASS 番号が表示されるのは次の場です。

- AP からの確立要求処理中
- 確立済み

出力例 :

```
/etc/xnfshow -x tli  
p-id:23962      name:tli0001  status:idle      vass:***  
p-id:24178      name:tli0002  status:data_xfer  vass:5  
p-id:11258      name:tli0003  status:data_xfer  vass:5  
p-id:23962      name:tli0004  status:data_xfer  vass:5  
p-id:23962      name:tli0005  status:data_xfer  vass:5
```

(例 3)

AP を特定して表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tli -i 内部AP名称
```

出力形式 :

```
name:内部AP名称1  
status:状態2  
p-id:プロセスID3  
[t-sel:自側Tセレクタ4]  
[nsap:NSAPアドレス5]  
vass:VASS番号6
```

注 1

XNF/LS で AP に付加した内部 AP 名称 (tli0001 ~) が表示されます。

注 2

AP の状態が表示されます。

注 3

AP のプロセス ID が表示されます。AP からプロセス ID 情報を受信していない場合、「*****」が表示されます。

注 4

自側 T セレクタが表示されます。

注 5

相手 NSAP アドレスが表示されます。

注 6

VASS 番号が表示されます。VASS 番号が表示されるのは次の場合です。

- AP からの確立要求処理中
- 確立済み

出力例 :

```
/etc/xnfshow -x tli -i tli0009
name:tli0009
status:data_xfer
p-id:4812
t-sel:20
nsap:540072872203127000000001
vass:5
```

(例 4)

プロセス ID に対応する AP を表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tli -P プロセスID
```

出力形式 :

```
name:内部AP名称
status:状態
p-id:プロセスID
[t-sel:自側Tセレクタ]
[nsap:NSAPアドレス]
vass:VASS番号
```

5. 運用コマンド

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)

出力形式は例 3 と同様です。指定されたプロセス ID に対応する AP 分、表示されます。

出力例：

```
/etc/xnfshow -x tli -P 23962
name:tli0001
status:idle
p-id:23962
t-sel:20
vass:***

name:tli0004
status:data_xfer
p-id:23962
t-sel:20
nsap:540072872203127000000001
vass:5

name:tli0005
status:data_xfer
p-id:23962
t-sel:20
nsap:540072872203127000000001
vass:5
```

(例 5)

アクティブ状態の AP だけを表示します。

入力形式：

```
/etc/xnfshow -x tli -A
```

出力形式：

```
p-id: プロセスID    name: 内部AP名称    status: 状態    vass: VASS番号
:
```

出力形式は例 2 と同様です。

出力例：

```
/etc/xnfshow -x tli -A
p-id:24178      name:tli0002 status:data_xfer    vass:5
p-id:11258      name:tli0003 status:data_xfer    vass:5
p-id:23962      name:tli0004 status:data_xfer    vass:5
p-id:23962      name:tli0005 status:data_xfer    vass:5
```

(例 6)

インアクティブ状態の AP だけを表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tli -I
```

出力形式 :

```
p-id:プロセスID      name:内部AP名称    status:状態    vass:VASS番号  
          :  
          :
```

出力形式は例 2 と同様です。

出力例 :

```
/etc/xnfshow -x tli -I  
p-id:22564      name:tli0006 status:wres_cind    vass:***  
p-id:4756       name:tli0008 status:wcon_creq    vass:5
```

(例 7)

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバの状態の一覧を表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tpvc
```

出力形式 :

```
name:仮想サーバ名称  status:仮想サーバの状態        vass:仮想スロット番号  
          :  
          :
```

注

次の表を参照してください。

表 5-3 仮想サーバの状態

状態	説明
online	仮想サーバが使用できます。
offline	仮想サーバが使用できません。
offline in process	仮想サーバの停止処理中です。

出力例 :

サーバ上の仮想サーバがすべて表示されます。

5. 運用コマンド

5.2.7 xnfshow (状態を表示する)

```
name:SV001          status:online      vass:100
name:SV002          status:online      vass:200
name:SV003          status:online      vass:300
:
```

(例 8)

パス上の NSAP アドレスの一覧を表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -x tpvc -c
```

出力形式 :

接続されている全パスと各パス上の NSAP アドレスがすべて表示されます。

```
src_IP_addr:自局IP dst_IP_addr:相手局IP
[ src_nsap , または dst_nsap:NSAPアドレス ]
:
src_IP_addr:自局IP dst_IP_addr:相手局IP
[ src_nsap , または dst_nsap:NSAPアドレス ]
:
```

出力例 :

```
src_IP_addr:172.16.23.123 dst_IP_addr:172.16.123.124
src_nsap:4800089991234562
src_nsap:4800089991234563
dst_nsap:4800089991234570
src_IP_addr:123.16.23.123 dst_IP_addr:172.16.123.125
src_nsap:4800089991234562
src_nsap:4800089991234563
dst_nsap:4800089991234571
dst_nsap:4800089991234572
```

(例 9)

OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバを特定して表示します。

入力形式 :

```
/etc/xnfshow -n 仮想サーバ名称
```

出力形式 :

status が online のとき , 仮想サーバの情報の登録状態がパスごとに表示されます。

```
vass:仮想スロット番号
  name          :仮想サーバ名称
  nsap          :自局NSAPアドレス
  status         :仮想サーバの状態1
  initial_status :XNF/LS開始時の仮想サーバの状態2
[ src_IP_addr:自局IPアドレス dst_IP_addr:相手局IPアドレス status:パスの状態3 ]
  :
```

注 1

表 5-3 を参照してください。

注 2

次の表を参照してください。

表 5-4 XNF/LS 開始時の仮想サーバの状態

状態	説明
active	現用系
HAM	予備系

注 3

次の表を参照してください。

表 5-5 仮想サーバのパスの状態

状態	説明
offline	仮想サーバの情報は仮想ホストに登録されていません。
online in process	仮想サーバの情報を仮想ホストに登録中です。
online	仮想サーバの情報は仮想ホストに登録されています。
offline in process	仮想サーバの情報を仮想ホストから削除中です。

出力例：

```
vass:100
  name          :TPVC01
  nsap          :4800099991234562
  status         :online
  initial_status :active
  src_IP_addr:172.16.109.101  dst_IP_addr:172.16.56.7    status:online
  src_IP_addr:172.16.109.101  dst_IP_addr:10.208.55.4    status:online
  src_IP_addr:10.16.109.5      dst_IP_addr:10.10.10.100  status:offline
```

5. 運用コマンド

5.2.8 xnfstart (XNF/LS を開始する , または構成を追加する)

5.2.8 xnfstart (XNF/LS を開始する , または構成を追加する)

(1) 形式

```
/etc/xnfstart [-R]
```

(2) 機能

XNF/LS を開始します。

xnfgen コマンド実行中は使用できません。xnfgen コマンドでゼネレーションファイルを作成したあとに , このコマンドを入力します。

また , XNF/LS の稼働中に , -R オプションを指定すると , OSI 拡張高信頼化機能で使用する仮想サーバを追加できます。仮想サーバを追加する場合 , 必ず「3.3 構成の変更」を参照してから実施してください。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -R

XNF/LS を開始したあとに , 構成を追加する場合に使用します。稼働中の定義文に対して , 追加したいリソースの定義文を , 定義文ファイルに追加入力しておきます。この定義文ファイルに対して , xnfgen コマンドでゼネレーションファイルを作成したあと , このコマンドを入力します。

(5) 使用例

(例 1)

XNF/LS を開始します。

```
/etc/xnfstart
```

(例 2)

構成を変更して , 仮想サーバを追加します。

```
/etc/xnfstart -R
```

5.2.9 xnfstop (XNF/LS を終了する)

(1) 形式

```
/etc/xnfstop
```

(2) 機能

XNF/LS を終了します。

AP が動作中でも終了します。その後 , xnfstart コマンドで XNF/LS を再開始することもできます。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

ありません。指定しても無視します。

(5) 注意事項

xnfstop コマンドで終了する場合は , XNF/LS を使用するすべての上位アプリケーションプログラムが終了してから入力してください。アプリケーションプログラムが通信中のときに xnfstop コマンドを入力すると , 障害になることがあります。

5. 運用コマンド

5.2.10 xnftdump (メモリダンプを取得・編集する)

5.2.10 xnftdump (メモリダンプを取得・編集する)

(1) 形式

```
/etc/xnftdump { -f ダンプ出力ファイル名称 | -e ダンプ入力ファイル名称 | -E }  
[ -o 編集出力ファイル名称 ]
```

(2) 機能

XNF/LS稼働中に、XNF/LSのメモリダンプを取得・編集します。メモリダンプの編集は、XNF/LSが停止中でもできます。

ダンプする領域は、XNF/LSの内部テーブルです。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -f ダンプ出力ファイル名称

ダンプを取得するときに、ダンプを出力するファイル名称を指定します。

指定したファイルがない場合、ファイルが作成されます。すでにある場合は、上書きされます。

(b) -e ダンプ入力ファイル名称

ダンプファイルからダンプを編集するときに指定します。-fオプション指定で取得したダンプファイル名称を指定します。

(c) -E

XNF/LSの稼働中に、メモリから直接ダンプを編集するときに指定します。

(d) -o 編集出力ファイル名称

ダンプの編集結果を出力するファイル名称を指定します。

指定したファイルがない場合、ファイルが作成されます。すでにある場合は、上書きされます。

このオプションを省略した場合、標準出力に出力されます。このオプションは、-e、または-Eオプションを指定したときに指定できます。

(5) 使用例

(例 1)

ダンプファイル (dump01) にダンプを取得します。

```
/etc/xnftdump -f dump01
```

(例2)

ダンプファイル (dump01) を編集し、出力ファイル (dumpedit) に出力します。

```
/etc/xnftdump -e dump01 -o dumpedit
```

(例3)

メモリの内容を直接編集して、出力ファイル (dumpedit) に出力します。

```
/etc/xnftdump -E -o dumpedit
```

(6) 注意事項

xnftdump コマンドの編集オプション (-e または -E) 指定時に、「KANC127-E File (ファイル名) crashed.」が表示された場合は、/tmp の容量が不足している可能性があります。/tmp の容量が不足している場合は、/tmp の容量を増やしたあと、再度コマンドを実行してください。

5. 運用コマンド

5.2.11 xnftrace (トレースを採取する)

(1) 形式

トレースを採取してファイルに出力する、またはトレース起動後にファイルを初期化してトレース出力先を切り替える場合

```
/etc/xnftrace [-s -x キーワード] [-f ファイル名称 [-w ラップアラウンド長]]
```

トレースの採取を終了する場合

```
/etc/xnftrace -e [-x キーワード]
```

トレース出力ファイルを事前割り当てる場合

```
/etc/xnftrace -M ファイル名称 [-w ラップアラウンド長]
```

トレース起動後に事前割り当てしたファイルにトレース出力先を切り替える場合

```
/etc/xnftrace -R ファイル名称
```

トレース開始済みのリソース一覧を表示する場合

```
/etc/xnftrace
```

(2) 機能

次の機能があります。

- トレースを採取して、ファイルに出力します。
- トレースを出力するファイルの事前割り当てを行います。
- トレース開始済みのリソース一覧を表示します。
- トレース起動後にトレース出力ファイルの切り替えができます。
切り替えの方法は次の2種類です。

- f オプション指定

コマンド実行時に指定したファイルを初期化して、トレース出力先を切り替えます。

- R オプション指定

-M オプションで事前に割り当てた（初期化した）ファイルにトレース出力先を切り替えます。

切り替え時にファイルを初期化しないため、すぐに切り替えられます。

ファイル容量が大きいときに効果があります。

(3) 実行者

スーパーユーザ

(4) オプション

(a) -s

トレースの採取を開始します。

(b) -e

トレースの採取を終了します。

-x オプションを指定しない場合、すべてのトレースを終了します。

(c) -x キーワード

特定のキーワードに対応するリソースの、トレース採取を開始または終了するときに指定します。

-x オプションで指定できるキーワードを次に示します。

socket :

ソケット通信トレース

tli :

API トレース (XNF/LS の内部情報)

(d) -f ファイル名称

トレースを出力するファイル名称を指定します。

このオプションは、最初のトレース開始時に必ず指定してください。トレース採取中に、異なるリソースのトレース採取を開始する場合は、このオプションは省略してください。

指定したファイルがない場合、ファイルが新規に作成されます。すでにある場合には初期化されます。

トレース採取中に、トレース出力ファイルを切り替えることができます。切り替え方法を次に示します。

- 異なるリソースのトレース採取開始時に、トレース出力ファイルを切り替える場合
-s, -x, および -f オプションを指定します。
- トレース出力ファイルだけを切り替える場合
-f オプションだけを指定します。

ファイル切り替え時、-f オプションで現在使用している出力ファイルと同じファイルを指定すると、ファイルの切り替えはしません。また、ラップアラウンド長の変更もできません。

5. 運用コマンド

5.2.11 xnftrace (トレースを採取する)

(e) -w ラップアラウンド長

トレースファイルのラップアラウンド長を指定します。ラップアラウンド長は、480KBを1単位とする整数値で、指定範囲は1～255です（例えば2を指定すると、480KB×2=960KBがファイル容量になります）。

このオプションを省略した場合、1が仮定されます。

(f) -M

事前に割り当てるトレース出力ファイルのファイル名称を指定します。

このオプションは、XNF/LSが動作していないときでも指定できます。

(g) -R

トレース出力を切り替えるファイルのファイル名称を指定します。

このファイル名称には、-Mオプションで事前に割り当てたファイル、または-fオプションで割り当てたファイルを指定します。指定したファイルは上書きされます。

このオプションは、すでにトレースが起動されているときにだけ指定できます。

(h) 全オプション省略

オプションを何も指定しなかった場合、トレース採取中のリソース名称、ファイル名称、およびラップアラウンド長を表示します。

(5) 注意事項

採取したデータトレースは、xnfeditコマンドで編集して参照できます。ただし、xnfeditコマンドで編集する場合、トレース採取中のファイルは指定できません。必ず、-eオプション指定のxnftraceコマンドでトレース採取を停止したファイルを編集してください。

(6) 使用例

(例1)

APIおよびソケット通信トレースを採取します。トレースファイルのファイル名はfile1とします。

```
/etc/xnftrace -s -x tli -f file1 ..... APIトレース採取開始， -fオプション必要
/etc/xnftrace -s -x socket ..... ソケット通信トレース採取開始
<トレース採取>
:
/etc/xnftrace -e -x socket ..... ソケット通信トレース採取停止
/etc/xnftrace -e -x tli ..... APIトレース採取停止
```

(例2)

トレース採取中に、トレースファイルを切り替えます。また、全トレースを一括して停止させます。

```
/etc/xnftrace -s -x tli -f file1 ..... ファイルfile1にAPIトレース採取開始  
/etc/xnftrace -s -x socket ..... ソケット通信トレース採取開始  
/etc/xnftrace -f file2 -w 5 ..... ファイルfile2への切り替えおよびファイル容量  
                               の変更。以降、トレースはファイルfile2に出力  
<トレース採取>  
: ..... 全トレースを一括して停止
```

(例 3)

トレース採取中のリソース名称、ファイル名称、およびラップアラウンド長を表示します。

入力形式：

```
/etc/xnftrace
```

出力形式：

```
+-----+  
リソース名称  
+-----+  
*** trace file name(wraparound size) ***  
トレースファイル名称(ラップアラウンド長)
```

出力例：

```
/etc/xnftrace  
+-----+  
tli           socket  
+-----+  
*** trace file name(wraparound size) ***  
/trace/file01(1)
```

(例 4)

トレースファイルを事前に割り当てます。また、トレース開始後に事前に割り当ったファイルにトレース出力先を切り替えます。

```
/etc/xnftrace -M /trace/trace01 -w 100 ..... トレースファイル事前割り当て  
/etc/xnftrace -M /trace/trace02 -w 100 ..... トレースファイル事前割り当て  
/etc/xnftrace -s -x tli -f /tmp/trcdummy .... トレース採取開始  
                               (ダミーファイルを割り当てておく)  
/etc/xnftrace -R /trace/trace01 ..... ファイルtrace01に切り替え  
      : (オンライン開始)  
/etc/xnftrace -R /trace/trace02 ..... ファイルtrace02に切り替え  
      : (オンライン終了)  
/etc/xnftrace -e ..... トレース採取停止
```


6 メッセージ

この章では、XNF/LS が output するメッセージについて説明します。

6.1 メッセージの見方

6.2 メッセージの詳細

6.1 メッセージの見方

XNF/LS が出力するメッセージの見方について説明します。

6.1.1 メッセージの形式

メッセージは次の形式で表示されます。

```
{ KANCxxx-y | KANFxxxxx-E | KANSxxx-y } メッセージテキスト
```

(凡例)

KANC , KANF , KANS : XNF/LS のメッセージ ID

xxx または xxxx : メッセージ番号

-y : メッセージ種別

メッセージ種別には , -I , -W および -E の 3 種類があります。各メッセージ種別が示す内容は次のとおりです。

- -I : 情報の通知
- -W : 警告
- -E : エラー

メッセージテキストは , 英文で出力されます。テキスト中の() , " " , <> 内には , 実際の名称 , または値が表示されます。また , [] 内のコードは , 表示されない場合もあります。

このマニュアルで一行に記載しているメッセージでも , syslog ファイルや comlog コマンドでは複数行で表示される場合もあります。

6.1.2 メッセージの対処方法

「6.2 メッセージの詳細」では , 「要因」にメッセージが出力された原因を , 「対処」にユーザの対処方法を記述しています。

このマニュアルに記載されていない XNF/LS メッセージ (KANCxxx-y , KANFxxxxx-E , および KANSxxx-y メッセージ) については , 保守員に連絡してください。

6.1.3 メッセージの出力先

「6.2 メッセージの詳細」で記載されているメッセージの出力先は , メッセージ ID によって出力先が異なります。メッセージの出力先をメッセージ ID ごとに次に示します。

- KANC : 標準出力または標準エラー出力
- KANF : syslog ファイル (comlog コマンド実行時は標準出力)
- KANS : syslog ファイル

6.2 メッセージの詳細

KANC001-I

Usage:xnfgen [-f file name [-c]]

-f=configuration file name

-c=syntax check only

要因：xnfgen コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で、再度入力してください。

KANC004-E

XNF/LS configuration file (ファイル名称) cannot opened : "open" error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS 定義文ファイルのオープンに失敗しました。

対処：open システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANC005-E

XNF/LS configuration file (ファイル名称) I/O error : "lseek" error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS 定義文ファイルで I/O エラーが発生しました。

対処：lseek システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANC006-E

XNF/LS configuration file (ファイル名称) I/O error : "read" error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS 定義文ファイルで I/O エラーが発生しました。

対処：read システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANC007-E

XNF/LS file (ファイル名称) I/O error : " システムコール名称またはライブラリ関数名称 " error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS ファイルで I/O エラーが発生しました。

対処：システムコールまたはライブラリ関数のエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANC009-E

XNF/LS file (ファイル名称) error : line= 行番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS ファイルの行番号がフォーマット不正です。

対処：XNF/LS を再度組み込んでください。

KANC010-E

XNF/LS file (ファイル名称) cannot executed: "exec" error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す実行ファイルを実行できません。

対処：exec システムコールのエラー番号を基にして，調査してください。

KANC011-E

XNF/LS/PP 名称 system call error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因：PP 名称で示す XNF/LS の PP で，システムコール名称で示すシステムコールのエラーが発生しました。

対処：システムコールのエラー番号を基にして，調査してください。

KANC012-W

XNF/LS definition error:line= 行番号 , エラーメッセージ

要因：XNF/LS 定義文中の行番号で示す部分に誤りがあります。

対処：エラーメッセージを基にして，構成定義文を修正してください。エラーメッセージの内容については，表 6-1 を参照してください。

表 6-1 定義文のエラーメッセージの内容

エラーメッセージ	意味
(定義文名称またはオペランド)must be specified.	必要な定義文，またはオペランドが指定されていません。
(定義文名称またはオペランド)duplicated.	定義文，またはオペランドが重複しています。
(定義文名称) " 文字列 " duplicated.	文字列で示す部分が重複しています。
(定義文名称) "network_address" duplicated.	DTE_address オペランドの指定値，および network_id オペランドの指定値が重複しています。
(定義文名称) "port" duplicated.	host_adaptor_port オペランドの指定値が TPTCP_define 文の isotsap_port オペランドの指定値と重複しています。
invalid value (オペランド).	オペランドの値が不正です。
number of (定義文名称) over (個数).	定義文の数が多過ぎます。
number of (定義文名称) over (max_****).	定義文の数が，configuration 文の max_**** オペランドで指定した数を超えていました。
invalid sequence (定義文名称).	定義文の指定順序が不正です。
syntax error.	定義文またはオペランドの指定に誤りがあります。

6. メッセージ

エラーメッセージ	意味
syntax error or PP not installed.	定義文に誤りがあります。または、定義文に該当する PP がインストールされていません。

KANC013-E

XNF/LS/PP 名称 program error:error code= 内部障害コード

要因：PP 名称で示す XNF/LS の PP で、プログラム障害が発生しました。

対処：保守員に連絡してください。

KANC016-E

XNF/LS file (ファイル名称) : "link" error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示す XNF/LS ファイルのリンクに失敗しました。

対処：link システムコールのエラー番号を基にして、調査してください。

KANC017-E

XNF/LS configuration file (ファイル名称) crashed.

要因：ファイル名称で示す XNF/LS 定義文ファイルが破壊されています。

対処：定義文ファイルを再度作成してください。

KANC018-E

XNF/LS file (ファイル名称) crashed.

要因：ファイル名称で示す XNF/LS ファイルが破壊されています。

対処：XNF/LS を再度組み込んでください。

KANC019-E

XNF/LS program file (ファイル名称) not found.

要因：ファイル名称で示す XNF/LS ファイルが見つかりません。

対処：XNF/LS を再度組み込んでください。

KANC051-E

Syntax error.

要因：シンタックスが不正です。

対処：続けて出力される付加情報メッセージを参照して、正しいコマンドを入力してください。

KANC055-E

File (ファイル名称) I/O error: " システムコール名称またはライブラリ名称 "

error number = エラー番号

要因：ファイル名称で示すファイルで、I/O エラーが発生しました。

対処：システムコール名称またはライブラリ名称のエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANC056-E

File (ファイル名称) not found.

要因：ファイル名称で示すファイルがありません。

対処：正しいファイル名称を指定して、再度入力してください。

KANC057-E

XNF/LS system file (ファイル名称) not found.

要因：ファイル名称で示す XNF/LS システムファイルがありません。

対処：XNF/LS を再度組み込んでください。

KANC058-E

Invalid name specified.

要因：不正な名称を指定しています。

対処：正しい名称を指定して、再度コマンドを入力してください。

KANC059-E

Insufficient storage in command process.

要因：コマンドプロセス空間で、領域（仮想領域のメモリ）が不足しています。

対処：コマンドを入力した環境では実行できません。実行環境を確認してください。

KANC060-E

Permission denied.

要因：一般ユーザは使用できません。

対処：スーパーユーザとして登録している人が操作してください。

KANC061-E

Invalid keyword specified.

要因：不正なキーワードが指定されています。

対処：正しいキーワードを指定して、再度コマンドを入力してください。

KANC062-E

File (ファイル名称) not general file.

要因：ファイル名称で示すファイルは、一般ファイルではありません。

対処：正しいファイル名称を指定して、再度コマンドを入力してください。

6. メッセージ

KANC063-E

File name duplicated in " オプション 1" and " オプション 2".

要因：オプション 1 で指定したファイル名称が，オプション 2 で指定したファイル名称と重複しています。

対処：正しいファイル名称を指定して，再度コマンドを入力してください。

KANC064-E

Child process (コマンド種別 (ファイル名称 , リソース名称またはコード))

cannot generated. "fork" error number = エラー番号

要因：コマンド種別で示す子プロセスの生成に失敗しました。

対処：fork システムコールのエラー番号を基にして，原因を調査してください。

KANC065-E

Child process (コマンド種別 (ファイル名称 , リソース名称またはコード))

cannot executed. "exec" error number = エラー番号

要因：コマンド種別で示す子プロセスの実行に失敗しました。

対処：exec システムコールのエラー番号を基にして，原因を調査してください。

KANC066-I

Memory またはリソース名称 dumped to file (ファイル名称)

要因：メモリまたはリソース名称で示すリソースのダンプを，ファイル名称で示すファイルに出力しました。

KANC067-I

Memory, File (ファイル名称) またはリソース名称 dump edited.

要因：メモリ，ファイル名称，またはリソース名称で示すリソースのダンプ編集が終了しました。

KANC068-E

File (ファイル名称) not XNF/LS dump file.

要因：ファイル名称で示すファイルは，XNF/LS のダンプファイルではありません。

対処：XNF/LS のダンプファイルを指定して，再度入力してください。

KANC072-E

" コマンド名称 " in process.

要因：コマンド名称で示すコマンドが実行中のため，実行できません。

対処：コマンド名称で示すコマンドの終了後，再試行してください。なお，「" コマンド名称 " or " コマンド名称 "」のように，複数のコマンド名称が表示される場合があります。

KANC075-E

System call error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因：システムコールエラーが発生しました。

対処：システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして，原因を調査してください。

errno=2 の場合

XNF/LS が停止していないか確認してください。

KANC076-E

コマンド名称 time out.

要因：コマンド名称で示すコマンドで，XNF/LS のシステムプロセスからの応答がないため，タイムアウトしました。

対処：syslog ファイルや comlog コマンドで，直前に出力されたメッセージを確認し，直前に出力されたメッセージを基にして，原因を調査してください。

KANC091-E

Cannot accepted for リソース種別または詳細理由 .

要因：リソース種別で示すリソースには，受け付けられないコマンドです。または，詳細理由で示す理由で，コマンドは受け付けられませんでした。

対処：マニュアルを再確認してください。

KANC122-E

リソース名称 not online.

要因：リソース名称で示すリソースがオンライン状態でないため，受け付けられません。

対処：リソース名称で示すリソースをオンライン状態にしてから，再度入力してください。

KANC123-E

リソース名称 not offline.

要因：リソース名称で示すリソースがオフライン状態でないため，受け付けられません。

対処：リソース名称で示すリソースをオフライン状態にしてから，再度入力してください。

KANC124-I

Already online.

要因：すでにオンライン状態です。

KANC125-I

Already offline.

6. メッセージ

要因：すでにオフライン状態です。

KANC127-E

File (ファイル名称) crashed.

要因：ファイル名称で示すファイルが破壊されています。

対処：xntfdump コマンドの編集オプション (-e または -E オプション) を使用時に、このメッセージが表示された場合は、/tmp の容量が不足している可能性があります。/tmp の容量が不足している場合は、/tmp の容量を増やしたあと、再度コマンドを実行してください。そのほかの場合は、保守員に連絡してください。

KANC132-E

" コマンド名称 " command process aborted.

要因：xnfstop コマンドが入力されたため、コマンド名称で示すコマンドを実行できませんでした。

KANC133-E

XNF/LS not started.

要因：XNF/LS が開始されていません。

対処：XNF/LS の起動が完了しているか、または xnfstop コマンドを投入していないかを確認してください。

KANC134-E

XNF/LS already started.

要因：XNF/LS はすでに開始されています。

対処：XNF/LS が停止している場合に、このメッセージが出力されたときは、前回 XNF/LS が正常に終了していないおそれがあります。xnfstop コマンドを実行してから、xnfstart コマンドを実行してください。

KANC151-I

Red Hat Linux の場合

Usage: xnfstart [-R]

-R = configuration change

HP-UX 11i(IPF) の場合

Usage: xnfstart

要因：xnfstart コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で再度入力してください。

KANC152-E

Not generated.

要因 : xnfgen コマンドによるゼネレーションが実施されていません。または、PP の追加・削除・変更をしたあとに自動ゼネレーションが失敗しました。

対処 : xnfgen コマンドによるゼネレーションを実施してください。

KANC154-I

XNF/LS configuration changed.

要因 : xnfstart -R コマンド処理が終了しました。

対処 : comlog コマンドを入力するか、または syslog ファイルを参照して、xnfstart -R 実行時にエラーメッセージが出力されていないかを確認してください。

KANC156-E

XNF/LS start failed.

要因 : XNF/LS の起動に失敗しました。

対処 : syslog ファイルや comlog コマンドで、直前に出力されたメッセージを確認し、直前に出力されたメッセージを基にして、原因を調査してください。

KANC157-E

XNF/LS stop failed.

要因 : XNF/LS の停止に失敗しました。

対処 : syslog ファイルや comlog コマンドで、直前に出力されたメッセージを確認し、直前に出力されたメッセージを基にして、原因を調査してください。

KANC158-E

Child process (コマンド種別 (ファイル名称)) stopped.

要因 : コマンド種別で示す子プロセスの停止を検知しました。

対処 : 直前に出力されたメッセージを基にして、原因を調査してください。

KANC181-I

Usage : xnfonline -n name

-n = resource name

要因 : xnfonline コマンドの文法エラーです。

対処 : 正しい文法で再度入力してください。

KANC221-I

Usage : xnfoffline -n name

-n = resource name

6. メッセージ

要因：xnfoffline コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で再度入力してください。

KANC261-I

Usage:xnfshow -b | -x tli [{-i name | -P process-id | -A | -l}]

-b=show of buffer

-x=tli(keyword of TLI)

-i=inner AP name(tlixxxx:xxxx=4-digit decimal)

-P=process-id

-A=active resource name listing

-l=inactive resource name listing

要因：xnfshow コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で再度入力してください。

KANC276-I

Usage:xnfshow -b | -x tli [{-i name | -P process-id | -A | -l}]

| -n name | -x tpvc [-c]

-b=show of buffer

-x=tli(keyword of TLI) | tpvc(keyword of TPTCP_VC)

-i=inner AP name(tlixxxx:xxxx=4-digit decimal)

-P=process-id

-A=active resource name listing

-l=inactive resource name listing

-n=resource name(TPTCP_VC)

-c=PATH status

要因：xnfshow コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で再度入力してください。

KANC301-I

Usage:xnftrace [-s|-e][-x keyword]

[-f file name[-w wraparound size]]

[-M file name[-w wraparound size]][-R file name]

-s=start trace

-e=end trace

(none)=list trace

-x=keyword
 -f=trace data output file
 -w=trace file wraparound size(1-255)
 -M=trace data output allocation file
 -R=trace data output change file

要因：xnftrace コマンドの文法エラーです。

対処：正しい文法で再度入力してください。

KANC302-I

Trace for リソース名称 started.

要因：リソース名称で示すリソースのトレースを開始しました。

KANC304-I

Trace for リソース名称 stopped.

要因：リソース名称で示すリソースのトレースが終了しました。

KANC306-I

All trace stopped.

要因：すべてのトレースが終了しました。

KANC308-E

Trace file name not specified.

要因：トレースファイル名称が指定されていません。

対処：トレースファイル名称を指定して、再度入力してください。

KANC309-I

Trace file changed.

要因：トレース出力ファイルが切り替わりました。

KANC313-E

Trace file cannot allocated by wraparound size.

要因：トレースファイルがラップアラウンド長分割り当てられません。

対処：媒体の残り容量を確認してください。

KANC317-E

Trace daemon not started.

要因：トレースデーモンが開始されていません。

対処：トレースを採取する場合は、xnftrace コマンドを実行してください。

6. メッセージ

KANC341-I

Usage : xnfdit -i input file name[-f output file name]

[-x keyword]

[-t started time] [-e ended time][-u]

-x = specific resource (keyword) edit

-t,-e = YY : MM : DD : hh : mm : ss or YY : MM : DD

-u = unedited list

要因 : xnfdit コマンドの文法エラーです。

対処 : 正しい文法で再度入力してください。

KANC342-I

Trace edited.

要因 : トレース編集が終了しました。

KANC349-I

No trace record.

要因 : トレースレコードがありません。

KANC350-E

File (ファイル名称) not XNF/LS trace file.

要因 : 入力ファイルが XNF/LS のトレースファイルではありません。

対処 : XNF/LS のトレースファイル名称を指定してください。

KANC381-I

Usage : xnftdump -f file name | -e file name | -E[-o file name]

-f = dump to file

-e = edit dump file

-E = dump and edit

-o = output file of edited list

要因 : xnftdump コマンドの文法エラーです。

対処 : 正しい文法で再度入力してください。

KANC531-I

Usage : xnfdelete -n name

-n = resource name

要因 : xnfdelete コマンドの文法エラーです。

対処 : 正しい文法で再度入力してください。

KANC861-E

*** message logging control utility ***

Usage : comlog

要因 : comlog コマンドの文法エラーです。

対処 : 正しい文法で再度入力してください。

KANC863-E

オプション名称 option error.

要因 : 指定オプションの指定値が不正です。

対処 : 指定オプションの指定値を正しい形式で指定し直してください。

KANF10401-E

Memory allocation error.

要因 : メモリの確保に失敗しました。

対処 : メモリ所要量を見直してください。

KANF11301-E

Memory allocation error.

要因 : メモリの確保に失敗しました。

対処 : メモリ所要量を見直してください。

KANF11605-E

File(ファイル名称) I/O error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因 : ファイル名称で示すファイルで , I/O エラーが発生しました。

対処 : システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF11606-E

System call error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因 : システムコールエラーが発生しました。

対処 : システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF11607-E

File(ファイル名称) not found.

要因 : ファイル名称で示すファイルがありません。XNF/LS をインストールしたあと , 一度も XNF/LS を開始していないおそれがあります。

対処 : xnfstart コマンドを実行してください。

6. メッセージ

KANF15001-E

File(ファイル名称) I/O error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因 : ファイル名称で示すファイルで , I/O エラーが発生しました。

対処 : システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF15002-E

System call error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因 : システムコールエラーが発生しました。

対処 : システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF16001-E

Memory allocation error.

要因 : メモリの確保に失敗しました。

対処 : メモリ所要量を見直してください。

KANF16002-E

System call error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因 : システムコールエラーが発生しました。

対処 : システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF16003-E

XNF/LS system file(ファイル名称) not found.

要因 : ファイル名称で示す XNF/LS システムファイルがありません。

対処 : XNF/LS を再度組み込んでください。

KANF16004-E

Child process(ファイル名称) "fork" error. errno= エラー番号

要因 : 子プロセスの生成に失敗しました。

対処 : fork システムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF16005-E

Child process(ファイル名称) "exec" error. errno= エラー番号

要因 : 子プロセスの実行に失敗しました。

対処 : exec システムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

KANF16006-E

Child process(ファイル名称) stopped.

要因：子プロセスの停止を検知しました。

対処：

Red Hat Linux の場合

/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかに応じて、このメッセージが outputされた時刻に、コアファイルが次のディレクトリに出力されていないか確認してください。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfss/ras/dump ディレクトリの下

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリの下

HP-UX 11i(IPF) の場合

/xnfss/ras/dump ディレクトリにコアファイルが出力されていないか確認してください。

コアファイルが出力されている場合は、コアファイルを採取して保守員に連絡してください。コアファイルが出力されていない場合は、直前に出力されたメッセージを基にして、原因を調査してください。

KANF16007-E

File(ファイル名称) I/O error: " システムコール名称 " error number= エラー番号

要因：ファイル名称で示すファイルで、I/O エラーが発生しました。

対処：システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF17000-E

Child process(ファイル名称) "fork" error. errno= エラー番号

要因：子プロセスの生成に失敗しました。

対処：fork システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF17001-E

Child process(ファイル名称) "exec" error. errno= エラー番号

要因：子プロセスの実行に失敗しました。

対処：exec システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF17002-E

System call error: " システムコール名称 " errno= エラー番号

要因：システムコールエラーが発生しました。

6. メッセージ

対処 :

Red Hat Linux の場合

システムコール名称が read の場合は、このメッセージが出力された時刻にコアファイルが出力されていないかを確認してください。コアファイルの出力先は、/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかで異なります。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリの下

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリの下

HP-UX 11i(IPF) の場合

システムコール名称が read の場合は、/xnfs/ras/dump ディレクトリにコアファイルが出力されていないか確認してください。

コアファイルが出力されている場合は、コアファイルを採取し、保守員に連絡してください。コアファイルが出力されていない場合は、システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF17003-E

Communication process stopped abnormally. pid= プロセス ID

要因 : XNF/LS の通信プロセス (XNFcomuproc) が異常終了したため、通信プロセスを回復します。ただし、回復回数上限 (3 回) を超えた場合は、KANF17005-E メッセージを出力し、XNF/LS を停止します。

対処 :

Red Hat Linux の場合

/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかに応じて、次のファイルを採取し、保守員に連絡してください。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリ下のコアファイル

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリ下にある、このメッセージが出力された時刻のコアファイル

HP-UX 11i(IPF) の場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリ下のコアファイルを採取し、保守員に連絡してください。

KANF17004-E

Communication process recovery failed.

要因 : XNF/LS の通信プロセス (XNFcomuproc) の回復に失敗しました。

対処 : このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF17005-E

Communication process recovery count over.

要因 : XNF/LS の通信プロセス (XNFcomuproc) の回復回数上限 (3 回) を超えたため , XNF/LS を停止します。

対処 :

Red Hat Linux の場合

/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかに応じて , 次のファイルを採取し , 保守員に連絡してください。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリ下のコアファイル

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリ下にある , このメッセージが出力された時刻のコアファイル

再開始する場合は , xnfstart コマンドを実行してください。

HP-UX 11i(IPF) の場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリ下のコアファイルを採取し , 保守員に連絡してください。

再開始する場合は , xnfstart コマンドを実行してください。

KANF17007-E

System call error: "poll" revents= 発生イベント情報 (16 進)

要因 : システムコールエラーが発生しました。

対処 :

Red Hat Linux の場合

/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかに応じて , このメッセージが出力された時刻に , コアファイルが次のディレクトリに出力されていないか確認してください。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリの下

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリの下

HP-UX 11i(IPF) の場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリに , コアファイルが出力されていないか確認してください。

6. メッセージ

コアファイルが出力されている場合は、コアファイルを採取して保守員に連絡してください。コアファイルが出力されていない場合は、poll システムコールのイベント番号を基にして、原因を調査してください。

KANF18000-E

System call error: "システムコール名称" errno= エラー番号

要因：システムコールエラーが発生しました。

対処：

Red Hat Linux の場合

/etc/sysctl.conf の kernel.core_pattern パラメタでコアファイル出力先を変更したかどうかに応じて、このメッセージが出力された時刻に、コアファイルが次のディレクトリに出力されていないか確認してください。

コアファイル出力先を変更していない場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリの下

コアファイル出力先を変更している場合

変更したディレクトリの下

HP-UX 11i(IPF) の場合

/xnfs/ras/dump ディレクトリに、コアファイルが出力されていないか確認してください。

コアファイルが出力されている場合は、コアファイルを採取して保守員に連絡してください。コアファイルが出力されていない場合は、システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF18002-E

System call error: "poll" revents= 発生イベント情報 (16 進)

要因：システムコールエラーが発生しました。

対処：poll システムコールの発生イベント情報を基にして、原因を調査してください。

KANF19001-E

System call error: "システムコール名称" error number= エラー番号

要因：システムコールエラーが発生しました。

対処：

Red Hat Linux の場合

システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

HP-UX 11i(IPF) の場合

システムコール名称が semop の場合は、カーネル調整パラメタ semmnu の値が小さい可能性があります。semmnu の設定値が正しいか見直してください。正しく

ない場合は、semnnu の値を変更して HP-UX をリブートしてください。

上記以外の場合は、システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF26201-E

Setup information error ID=" 内部障害コード "

要因：XNF/LS/Host Adaptor のゼネレーション情報に異常があります。

対処：xnfgen コマンド実行後、再度 xnfstart コマンドを入力してください。

KANF26204-E

Cannot add " リソース名称 ", name duplicated.

要因：指定した名称はすでに使用されているため、該当するリソースは追加できませんでした。

対処：構成定義をやり直して、再度 xnfstart -R を実行してください。

KANF26205-E

Cannot add " リソース名称 ", network address duplicated.

要因：指定した NSAP アドレスは、定義済み TPTCP_VC すでに使用されているため、該当するリソースは追加できませんでした。

対処：構成定義をやり直して、再度 xnfstart -R を実行してください。

KANF26206-E

Cannot add " リソース名称 ", network address duplicated.

要因：指定した NSAP アドレスは、相手局で定義したホスト側 NSAP アドレスと重複しているため、該当するリソースは追加できませんでした。

対処：構成定義をやり直して、再度 xnfstart -R を実行してください。

KANF26207-E

Cannot add " リソース名称 ", over resource.

要因：仮想サーバ情報が最大数を超えていたため、該当するリソースは追加できませんでした。

対処：構成定義をやり直して、再度 xnfstart -R を実行してください。

KANF26211-E

Routing Error VASS=" 仮想サーバの仮想スロット番号 " SCC=" 詳細エラーコード "

要因：相手 NSAP アドレスが不正、またはネットワークコネクションのリソース不足によって、コネクション確立要求が失敗しました。

対処：表 A-3 に示す詳細エラーコード、切断理由コードの意味と対処を参照してください。

6. メッセージ

KANF26213-E

Failed due to contention. name "仮想サーバ名称".

要因：ほかの仮想サーバの起動が優先されたため、仮想サーバを起動できませんでした。

対処：ほかの仮想サーバの状態を確認してください。または、保守員に連絡してください。

KANF26214-E

Switch over to virtual server. name "仮想サーバ名称".

要因：仮想サーバ名称で示す仮想サーバがほかのサーバで起動されたため、このサーバ上の仮想サーバを停止しました。

対処：ほかの仮想サーバの状態を確認してください。

KANF26221-E

Short Packet PT="PDU タイプ"

要因：OSI 拡張高信頼化機能で規定されている PDU 長の最小値よりも短い長さの PDU を受信したため、受信 PDU を破棄しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF26222-E

Reference Error PT="PDU タイプ" SA=" サーバの通信管理番号 "

要因：受信した PDU の通信管理番号に該当するネットワークコネクションがないため、受信 PDU を破棄しました。通信管理番号は OSI 拡張高信頼化機能で規定しています。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF26223-E

Reference Error PT="PDU タイプ" HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：受信した PDU の通信管理番号に該当するネットワークコネクションがないため、受信 PDU を破棄しました。通信管理番号は OSI 拡張高信頼化機能で規定しています。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF26224-E

Resource Over PT="PDU タイプ" HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：接続先相手ホストからの接続要求に対して割り当てるリソースが不足しています。

対処：XNF/LS 構成定義の、最大接続仮想ホスト数 (max_TPTCP_vhost) を見直してください。

KANF26228-E

NSAP Address Error PT="PDU タイプ" HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：受信した NSAP 登録要求の NSAP アドレスが不正なため、接続先相手ホストにエ

ラーを通知しました。

対処：保守員に連絡して、接続先相手ホストを調査してください。

KANF26229-E

Protocol Version Error PT="PDU タイプ"

要因：OSI 拡張高信頼化機能で規定されていないプロトコルバージョンを持ったパス接続要求を受信したため、接続先相手ホストにエラーを通知しました。

対処：保守員に連絡して、接続先相手ホストを調査してください。

KANF2622a-E

Rejected incoming connection SA=" サーバの通信管理番号 " HA=" ホストの通信管理番号 " SCC=" 詳細エラーコード "

要因：接続先相手ホストからのコネクション確立指示を拒否しました。

対処：表 A-3 に示す詳細エラーコード、切断理由コードの意味と対処を参照してください。

KANF2622b-E

Sequence Error PT="PDU タイプ"

要因：接続先相手ホストからシーケンスが不正な PDU を受信したため、受信 PDU を破棄しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF2622c-E

Unknown Packet "PDU 長 ":"PDU の内容 "

注 最大 16 バイト分表示されます。

要因：不正な PDU を受信したため、受信 PDU を破棄しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF2622d-E

Open Confirm error SA=" サーバの通信管理番号 " CC="NSAP 登録拒否理由コード "

要因：NSAP 登録要求に対して、再試行できないエラー応答を受信したので、NSAP 登録処理を中断しました。

対処：表 A-4 に示す NSAP 登録拒否理由コードの意味と対処を参照してください。

KANF2622e-E

Open Confirm error (R) SA=" サーバの通信管理番号 " CC="NSAP 登録拒否理由コード "

要因：NSAP 登録要求に対して、再試行できるエラー応答を受信しました。60 秒間隔で NSAP 登録要求が成功するまで再試行します。

対処：表 A-4 に示す NSAP 登録拒否理由コードの意味と対処を参照してください。

6. メッセージ

KANF26231-E

LI Error PT="PDU タイプ" HA=" ホストの通信管理番号 "

要因 : PDU 長 (LI) が不正な PDU を受信したので , エラー応答送信 , または受信 PDU を破棄しました。

対処 : 接続先相手ホストを調査してください。

KANF26232-E

LI Error PT="PDU タイプ" SA=" サーバの通信管理番号 "

要因 : PDU 長 (LI) が不正な PDU を受信したので , エラー応答送信 , または受信 PDU を破棄しました。

対処 : 接続先相手ホストを調査してください。

KANF26233-E

Open Confirm error (S) HA=" ホストの通信管理番号 " CC="NSAP 登録拒否理由コード "

要因 : 経路切り替え処理中の仮想ホストに対して , 経路切り替え要求を行ったため , 経路切り替えを中断しました。

対処 : 表 A-4 に示す NSAP 登録拒否理由コードの意味と対処を参照してください。

KANF26234-E

Open Confirm error SA=" サーバの通信管理番号 " CC="NSAP 登録拒否理由コード "

要因 : NSAP 登録要求に対して , 競合によるエラー応答を受信したので , NSAP 登録処理を中断しました。

対処 : 表 A-4 に示す NSAP 登録拒否理由コードの意味と対処を参照してください。

KANF26235-E

Over Length Packet PT="PDU タイプ "

要因 : 長さが 65 バイト以上の不正な PDU を受信したため , 受信 PDU を破棄しました。

対処 : 接続先相手ホストを調査してください。

KANF26241-E

Path disconnected. code=" 内部障害コード "

要因 : パスが切断されました。

対処 : 続けて出力されるパス情報を基に , ネットワークや相手局側を確認してください。内部障害コードの内容および意味を次に示します。

内部障害コード	意味	対処
0x0010	パスの切断を検出しました。	ネットワークや相手局側を確認してください。

内部障害コード	意味	対処
0x0020	エラーなどによってサーバ側がパスを切断しました。	このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。
0x0021	新たに接続されたバスを使用するため、接続中のバスを切断しました。	アソシエーション確立の再試行をしてください。
0x0030	生存監視による切断です。	ネットワークや相手局側を確認してください。

KANF26242-E

Time out. PT="PDU タイプ" HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：要求した NPDU に対する相手局ホストからの応答がありません。

対処：続けて出力されるバス情報を基に、ネットワークや相手局側を確認してください。

KANF26243-E

Time out. PT="PDU タイプ" SA=" サーバの通信管理番号 "

要因：要求した NPDU に対する相手局ホストからの応答がありません。

対処：続けて出力されるバス情報を基に、ネットワークや相手局側を確認してください。

KANF26244-E

LI Error PT="PDU タイプ"

要因：PDU 長 (LI) が不正な PDU を受信したので、エラー応答送信、または受信 PDU を破棄しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF26245-E

Resource shortage.

要因：内部リソース不足が発生しました。

対処：XNF/LS の構成定義を見直してください。

KANF26246-E

Can't Call, Too many TCs.

要因：最大 TC 数をオーバーしたため、TC の確立要求を拒否しました。

対処：XNF/LS の構成定義を見直してください。

KANF26247-E

Incoming Call Rejected, Too many TCs.

要因：最大 TC 数をオーバーしたため、TC の確立指示を拒否しました。

対処：XNF/LS の構成定義を見直してください。

6. メッセージ

KANF26248-E

Resource shortage, Too many paths.

要因：最大パス数をオーバーしたため，パスの接続要求を拒否しました。

対処：XNF/LS の構成定義を見直してください。

KANF262a*-E

システムコール名称 error return pid=" プロセス ID": errno=" エラー番号 "

* は 0 ~ f のどれかの値です。

要因：OSI 拡張高信頼化機能で，システムコール名称に示すソケット通信用のシステムコールでエラーが発生しました。

対処：errno の値を基に，原因を調査してください。errno=98 の場合は，

TPTCP_common 文の host_adaptor_port オペランドで指定しているポート番号をほかのプログラムで使用していないか見直してください。

KANF262b*-E

システムコール名称 error return pid=" プロセス ID": errno=" エラー番号 "

* は 0 ~ f のどれかの値です。

要因：OSI 拡張高信頼化機能で，システムコール名称に示す非通信系のシステムコールでエラーが発生しました。

対処：errno の値を基に，原因を調査してください。

KANF262d1-E

Invalid NPDU pid=" プロセス ID": LI="PDU 長 "

要因：PDU 長 (LI) が不正な PDU を受信したので，コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF262d2-E

Invalid NPDU pid=" プロセス ID": PT="PDU タイプ "

要因：PDU タイプが不正な PDU を受信したので，コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF262d3-E

Invalid NPDU pid=" プロセス ID": SA= " サーバの通信管理番号 ": HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：通信管理番号が不正な PDU を受信したので，コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF262d4-E

Invalid NPDU pid=" プロセス ID": length=" 受信長 "

要因：長さが不正な PDU を受信したので、コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF262d6-E

> Invalid primitive pid= " プロセス ID" : primcode=" 内部コード "

要因：不正なプリミティブを受け付けました。

対処：保守員に連絡してください。

KANF262f0-E

> NSAP="NSAP アドレス "(" 内部障害コード ")

要因：NSAP アドレスを表示します。

対処：このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。

KANF262f1-E

> NSAP="NSAP address unknown" (" 内部障害コード ")

要因：XNF/LS/Host Adaptor の RAS 情報を表示します。

対処：このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。

KANF262f2-E

> Unknown Packet "PDU 長 ":"PDU の内容 "

注　　最大 16 バイト分表示されます。

要因：不正な PDU の情報を表示します。

対処：このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。

KANF262f3-E

> src_IP_addr="自局 IP アドレス" dst_IP_addr="相手局 IP アドレス"

要因：パス情報を表示します。

対処：このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。

KANF262f4-E

> rc1= " 詳細コード 1":rc2= " 詳細コード 2"

要因：障害発生時に、付加情報を表示します。

対処：このメッセージの前に出力された、KANF262xx-E のメッセージの内容に従って対処してください。

6. メッセージ

KANF860f1-E

860 TLSEL : Setup information error ID = 内部障害コード

要因 : TL 共通部のゼネレーション情報に異常があります。

対処 : xnfgen コマンド実行後 , 再度 xnfstart コマンドを実行してください。

KANF864a0-E

864 TLI : システムコール名称 error pid= プロセス ID : errno= エラー番号

要因 : TLI ライブラリ内のシステムコールでエラーが発生しました。

対処 :

Red Hat Linux の場合

システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基にして , 原因を調査してください。

errno=6 の場合

XNFSLS が停止していないか , または configuration 文の
max_TPTCP_connection オペランドに指定した値以上のトランSPORTコネク
ションを接続しようとしているかを確認してください。

errno=22 の場合

XNFSLS が停止していないか確認してください。

HP-UX 11i(IPF) の場合

システムコール名称が semop の場合は , カーネル調整パラメータ semmnu の値が
小さい可能性があります。 semmnu の設定値が正しいか見直してください。正しく
ない場合は , semmnu の値を変更して HP-UX をリブートしてから ,xnfstart を実行
してください。

上記以外の場合は , システムコール名称で示すシステムコールのエラー番号を基に
して , 原因を調査してください。

errno=6 および errno=22 の場合の対処は , Red Hat Linux の場合と同様です。

KANF864a1-E

864 > TLI 関数名称 , Maintenance information= 保守情報

要因 : 前に出力されているメッセージの保守情報

対処 : このメッセージは単独では出力されません。前に表示された KANF864a0-E メッ
セージの対処方法を参照してください。

KANF8660*-E

866 システムコール名称 error return pid= プロセス ID : errno= エラー番号

* は 0 ~ f のどれかの値です。

要因 : OSI 拡張機能で , システムコール名称に示すソケット通信用のシステムコールで
エラーが発生しました。

対処：errno の値を基に，原因を調査してください。

Red Hat Linux の場合

errno=98 の場合は，TPTCP_define 文の isotsap_port オペランドで指定しているポート番号をほかのプログラムで使用していないか見直してください。errno=99 の場合は，XNF/LS 構成定義の，自局 IP アドレス指定の IP アドレスを見直してください。

HP-UX 11i(IPF) の場合

errno=227 の場合は，XNF/LS 構成定義の，自局 IP アドレス指定の IP アドレスを見直してください。

KANF86620-E

866 Invalid TPkt header pid= プロセス ID: version= 受信した RFC1006 パケットヘッダ内の RFC1006 のバージョン

要因：RFC1006 パケットヘッダ内のバージョンが不正な PDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86621-E

866 Invalid TPkt header pid= プロセス ID: packet_length= 受信した RFC1006 パケットヘッダ内のパケット長

要因：RFC1006 パケットヘッダ内のパケット長が不正な PDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86622-E

866 Invalid LI (Reject) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

要因：TPDU 長 (LI) が不正な TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86623-E

866 Invalid TI (Reject) pid= プロセス ID: TI= 受信した TPDU の TI(16 進)

要因：TPDU 種別 (TI) が不正な TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86624-E

866 Invalid LI (Reject CR_TPDU) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

6. メッセージ

要因：PDU 長（LI）が不正な CR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86625-E

866 Invalid LI (Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

要因：PDU 長（LI）が不正な CC_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86626-E

866 Invalid LI (Reject DT_TPDU) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

要因：PDU 長（LI）が不正な DT_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86627-E

866 Invalid LI (Reject DR_TPDU) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

要因：PDU 長（LI）が不正な DR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86628-E

866 Invalid LI (Free ER_TPDU) pid= プロセス ID: LI= 受信した TPDU の LI(16 進)

要因：PDU 長（LI）が不正な ER_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86629-E

866 Invalid DST_REF (Reject CR_TPDU) pid= プロセス ID: dref= 受信した TPDU のあて先レファレンス (16 進)

要因：あて先レファレンスが不正な CR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662a-E

866 Invalid DST_REF (Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID: dref= 受信した TPDU のあて先レファレンス (16 進)

要因：あて先レファレンスが不正な CC_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662b-E

866 Invalid DST_REF (Reject DR_TPDU) pid= プロセス ID: dref= 受信した TPDU のあて先レファレンス (16 進)

要因：あて先レファレンスが不正な DR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662c-E

866 Invalid DST_REF (Free ER_TPDU) pid= プロセス ID: dref= 受信した TPDU のあて先レファレンス (16 進)

要因：あて先レファレンスが不正な ER_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662d-E

866 Invalid SRC_REF (Reject DR_TPDU) pid= プロセス ID: sref= 受信した TPDU の送信元レファレンス (16 進)

要因：送信元レファレンスが不正な DR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662e-E

866 Invalid class (Reject CR_TPDU) pid= プロセス ID: class= 受信した TPDU のクラス (16 進)

要因：クラスが不正な CR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8662f-E

866 Invalid class (Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID: class= 受信した TPDU のクラス (16 進)

要因：クラスが不正な CC_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86633-E

866 Connection rejected (TCP/IP) pid= プロセス ID

要因：OSI 拡張機能で，TCP/IP 側コネクションが相手局から切断されました。

6. メッセージ

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、ネットワーク網や相手局側を確認してください。

KANF86635-E

866 TS1 timer time out (CR_TPDU) pid= プロセス ID

要因：OSI 拡張機能で、CR_TPDU パケットを送信しましたが、その応答が返ってこないため、監視タイマ（TPTCP_define 文の TS1 オペランドで指定した TS1 タイマ値）がオーバーし、タイムアウトしました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、ネットワーク網や相手局側を確認してください。

KANF86636-E

866 TS1 timer time out (ER_TPDU) pid= プロセス ID

要因：OSI 拡張機能で、プロトコル誤りを検出したため、ER_TPDU パケットを送信しましたが、その応答が返ってきませんでした。その結果、監視タイマ（TPTCP_define 文の TS1 オペランドで指定した TS1 タイマ値）がオーバーし、タイムアウトしました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、ネットワーク網や相手局側を確認してください。

KANF86637-E

866 Invalid TPDU length (Reject) pid= プロセス ID

要因：長さが不正な TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、相手局側を確認してください。

KANF86638-E

866 Invalid length of PL (Reject CR_TPDU) pid= プロセス ID

要因：パラメタ長が不正な CR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、相手局側を確認してください。

KANF86639-E

866 Invalid length of PL (Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID

要因：パラメタ長が不正な CC_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に、相手局側を確認してください。

KANF8663a-E

866 Invalid maximum TPDU size (Reject CR_TPDU) pid= プロセス ID

要因：最大 TPDU 長が不正な CR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8663b-E

866 Invalid maximum TPDU size (Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID

要因：最大 TPDU 長が不正な CC_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8663c-E

866 Connection negotiation failed(Reject CC_TPDU) pid= プロセス ID

要因：相手システムとのネゴシエーションに失敗しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8663d-E

866 Invalid length of PL (Reject DR_TPDU) pid= プロセス ID

要因：パラメタ長が不正な DR_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8663e-E

866 Invalid length of PL (Free ER_TPDU) pid= プロセス ID

要因：パラメタ長が不正な ER_TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF8663f-E

866 Invalid TPDU length (Free) pid= プロセス ID

要因：長さが不正な TPDU を受信しました。

対処：KANF8666c-E で表示される相手局 IP アドレスを基に，相手局側を確認してください。

KANF86662-E

866 > src_tsel= 自側 T セレクタ

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として自局の T セレクタを表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方

6. メッセージ

法を参照してください。

KANF86663-E

866 > dst_tsel= 相手側 T セレクタ

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として相手局の T セレクタを表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF86664-E

866 > T セレクタ (17 バイト目以降)

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として T セレクタの 17 バイト目以降を表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。KANF86662-E メッセージ，または KANF86663-E メッセージとペアで出力されます。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF86667-E

866 > src_tsel=null

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として自局の T セレクタを表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF86668-E

866 > dst_tsel=null

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として相手局の T セレクタを表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF8666c-E

866 > dst_IP_addr= 相手局 IP アドレス (16 進)

要因：OSI 拡張機能での障害発生時に，付加情報として相手局の IP アドレスを表示しました。

対処：このメッセージは単独では出力されません。前に表示されたメッセージの対処方法を参照してください。

KANF866a1-E

866 fcntl error pid= プロセス ID : errno= エラー番号

要因：システムコールエラーが発生しました。

対処：システムコールのエラー番号を基にして、原因を調査してください。

KANF866d1-E

866 Invalid NPDU pid=" プロセス ID": LI="PDU 長 "

要因：PDU 長 (LI) が不正な PDU を受信したので、コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF866d2-E

866 Invalid NPDU pid=" プロセス ID": PT="PDU タイプ "

要因：PDU タイプが不正な PDU を受信したので、コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF866d3-E

866 Invalid NPDU pid=" プロセス ID": SA=" サーバの通信管理番号 ": HA=" ホストの通信管理番号 "

要因：通信管理番号が不正な PDU を受信したので、コネクションを切断しました。

対処：接続先相手ホストを調査してください。

KANF866d4-E

866 Routing Error SCC=" 詳細理由コード "

要因：相手 NSAP アドレスが不正、またはネットワークコネクションのリソース不足のため、上位層からのコネクション確立要求を拒否しました。

対処：表 A-3 に示す詳細エラーコード、切断理由コードの意味と対処を参照してください。

KANF866f1-E

866 OSI_EX : Setup information error ID = 内部障害コード

要因：OSI 拡張機能のゼネレーション情報に異常があります。

対処：xnfgen コマンド実行後、再度 xnfstart コマンドを実行してください。

KANF86701-E

867 OSI_EX_CL : Setup information error ID = 内部障害コード

要因：自局 IP アドレス指定機能のゼネレーション情報に異常があります。

対処：xnfgen コマンド実行後、再度 xnfstart コマンドを実行してください。

6. メッセージ

KANS002-E

XNF/LS PP install Failed, エラーメッセージ . PP = <PP 名> MODULE = <モジュール名>

要因 : PP の組み込みに失敗しました。

PP 名 :

XNF/LS 関連の PP 名称

モジュール名 :

エラーが発生したスクリプト。before_17pp , remove_17pp , または
pend_1700_00 (17pp はプログラムコード)

エラーメッセージ :

内部詳細メッセージ (xxxxxx error. : xxxxxx でエラー発生)

対処 : XNF/LS 関連の PP を削除したあと , 再度 XNF/LS 関連の PP を組み込んでください。PP が削除できない場合は , OS 起動スクリプトを解除したあとにリブートして , 再度 PP の削除をしてください。

KANS003-E

Can't Install or Remove XNF/LS PP while XNF/LS Process running. PP = <PP 名>

MODULE = <モジュール名>

要因 : XNF/LS 関連 PP の動作中に , XNF/LS 関連 PP の組み込み , または削除をしようとしました。

PP 名 :

XNF/LS 関連の PP 名称

モジュール名 :

エラーが発生したスクリプト。before_17pp , または remove_17pp (17pp はプログラムコード)

対処 : XNF/LS 関連 PP を停止したあと , XNF/LS 関連 PP の組み込み , または削除をしてください。

付録

付録 A 詳細エラーコード、および切断理由コード

付録 B XNF/LS のトレース形式

付録 C NSAP アドレス形式

付録 D XNF/AS との相違点

付録 E XNF/H との相違点

付録 A 詳細エラーコード、および切断理由コード

出力されるエラーコードについて説明します。

詳細エラーコード、切断理由コードを表 A-1 ~ 表 A-4 に示します。これらは、XNF/LS が設定している付加情報です。AP 側でエラーの判定などに使用しないでください。

表 A-1 トランスポート層 (TL) の詳細エラーコード、切断理由コード

コード	意味	対処
0x09200001	トランスポートコネクションのリソース不足です。	構成定義を見直してください。
0x04000108	マルチネットワーク情報が不正です。	AP 側の NSAP アドレスの設定が正しいか確認してください。
0x04c00106	クラス 0 またはクラス 2 で動作できません。	1. AP がスロット番号を指定している場合、スロット番号の設定が正しいか確認してください。 2. AP 側のクラスの設定が正しいか確認してください。
0x04c00107	クラス 4 で動作できません。	
0x04640001	システムコールでエラーが発生しました。	syslog ファイルや comlog コマンドで、メッセージを確認し、メッセージを基にして原因を調査してください。

表 A-2 OSI 拡張機能使用時の詳細エラーコード、切断理由コード

コード	意味	対処
0x04601000	DR_TP DU 受信 時のコード	理由は未定義です。
0x04201001		TSAP が輻輳（ふくそう）しています。
0x04621002		TSAP に付属するセッションエンティティがありません。
0x04c21003		アドレスが不明です。
0x04c11200	ER_TP DU 受信 時のコード	理由が特定できません。
0x04c11201		パラメタコードが不正です。
0x04c11202		TPDU タイプが不正です。
0x04c11203		パラメタ値が不正です。

コード	意味	対処
0x04601103	TS1 のタイムアウトです。次のどちらかで タイムアウトが発生しました。 • トランSPORTコネクション確立時の応 答監視時間 • 接続先にエラーを通知したとの、接続 先からの TCP コネクション解放監視時間	相手アドレス情報を確認してください。 正しい場合は保守員に連絡してください。
0x04001104	アドレス情報が不正です。	相手アドレス情報を確認してください。
0x04411105	ヘッダ不正のパケットを受信しました。	保守員に連絡してください。
0x04202102	トランSPORTコネクションのリソース不 足です。	構成定義を見直してください。
0x04004001	TCP コネクションが切断されました。	相手局および TCP/IP の状態を調 査してください。問題ない場合は 保守員に連絡してください。
0x04204002	TCP コネクションの確立が拒否されました。	アソシエーション確立を再試行し てください。再確立できない場合 は保守員に連絡してください。
0x04625001	OSI 拡張高信頼化機能用のシステムコール でエラーが発生しました。	syslog ファイルや comlog コマン ドで、メッセージを確認し、メッ セージを基にして、原因を調査し てください。

表 A-3 ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の詳細エラーコード、切断理由コード

コード	意味	対処
0x03000000	通常切断をしました。	アソシエーション確立を再試行し てください。
0x036500a3	ネットワークコネクションのリソースが不足 しています。	構成定義を見直してください。
0x036500e3	バスが使用できません。	アソシエーション確立を再試行し てください。
0x03650110	バスが切断されました。または、バスを切斷 しました。	アソシエーション確立を再試行し てください。
0x03651100	ホスト側開局中のため、切斷しました。	
0x03652010	応答監視がタイムアウトしました。	
0x03653100	ホスト側閉局中のため、切斷しました。	
0x03653300	切り替えによって切斷しました。	
0x03653900	ホスト側閉局により、切斷しました。	
0x03653b00	切り替えによって切斷しました。	
0x036600e8	不正な相手 NSAP アドレスに対して、コネ クションの確立を要求、または確立の指示を 受け付けました。	指定した相手 NSAP アドレスを 確認、または相手局の状態を調査 してください。
0x036600e9	仮想サーバが使用できません。	仮想サーバをオンライン状態にし てください。

表 A-4 ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の NSAP 登録拒否理由コード

コード	意味	対処
0x0001	規定外の PDU 種別を受信しました。	相手局を調査してください。
0x0002	PDU 長 (LI) が不正です。	
0x0003	フォーマット (パラメタ) が不正です。	
0x0004	プロトコルのバージョンが不正です。	
0x0201	系切り替えによる NSAP アドレスの登録を拒否しました。	アソシエーション確立を再試行してください。
0x0202	系切り替えによる NSAP アドレスの登録が競合しました。	
0x0401	自局の NSAP アドレスと重複しました。	XNF/LS 構成定義と接続先相手ホストの定義を見直してください。
0x0402	相手ホストにサーバ側 NSAP アドレスが定義されていません。	
0x0801	リソース不足です。	
0x0802	系切り替えの処理中です。	アソシエーション確立を再試行してください。
0x0e01	同一バスにリファレンスを割り当て済みです。	相手局を調査してください。
0xff01	そのほかの要因です。	

付録 B XNF/LS のトレース形式

XNF/LS で採取できるトレースには、API トレースおよびソケット通信トレースの 2 種類があります。API トレースは内部情報のトレースです。ソケット通信トレースのトレース形式について説明します。

注意事項

- トレース採取機能の目的は障害調査用です。
- CPU 高負荷時にはトレース採取が抜ける場合があります。
- 採取するデータ長には制限があります。送受信データがすべて採取されるわけではありません。

ソケットトレース形式を次に示します。

```
*** 08/11/08 10:53:36[044527] ***
socket      name:tli0001                      #00000000010
  xnf-pid[    56789] func[send]                ] fd[        4]
  src-ip[ 10.210.84.165] src-port[50000]
  dst-ip[ 10.210.84.163] dst-port[ 102]
  sendlen[   100]
  rc(sendoklen)[     48] errno[    ]
data
  0000: 31323334 35363738 39303132 33343536 1234567890123456
  0010: 37383930 31323334 35363738 39303132 7890123456789012
  0020: 33343536 37383930 31323334 35363738 3456789012345678
*** 08/11/08 10:53:36[044527] ***
socket      name:tli0001                      #00000000010
  xnf-pid[    56789] func[recv]                ] fd[        4]
  src-ip[ 10.210.84.165] src-port[50000]
  dst-ip[ 10.210.84.163] dst-port[ 102]
  buflen[   100] flags[0x00000000]
  rc(recvlen)[     48] errno[    ]
data
  0000: 31323334 35363738 39303132 33343536 1234567890123456
  0010: 37383930 31323334 35363738 39303132 7890123456789012
  0020: 33343536 37383930 31323334 35363738 3456789012345678
```

- YY/MM/DD HH:MM:SS[XXXXXX] : トレース採取時刻。年 / 月 / 日 時間 : 分 : 秒 [マイクロ秒] の形式で表示されます。
- name : 内部 AP 名称または「*****」が表示されます。仮想サーバの場合は、TPTCP_VC 文の name オペランドに指定した仮想サーバ名称が表示されます。
- xnf-pid : XNF/LS のプロセス ID が表示されます。
- func : ソケット関数名が表示されます。
- fd : fd が表示されます。ただし、socket 関数のエラー時は、[] 内は空白になります。
- src-ip : 自 IP アドレスまたは「*****」が表示されます。
- src-port : 自ポート番号または「*****」が表示されます。
- dst-ip : 相手 IP アドレスまたは「*****」が表示されます。
- dst-port : 相手ポート番号または「*****」が表示されます。

- sendlen : send 関数の第 3 引数が表示されます。
- rc(sendoklen) : send 関数のリターン値が表示されます。
- errno : errno 値が表示されます。関数の正常終了時は，[] 内は空白になります。
- data : 送受信データ情報が表示されます。
- buflen : バッファ長が表示されます。
- flags : recv 関数で指定した flags が表示されます。
なお，XNF/LS/BASE 01-00 (Red Hat Linux) の場合，flags は表示されません。
- rc(recvlen) : recv 関数のリターン値が表示されます。

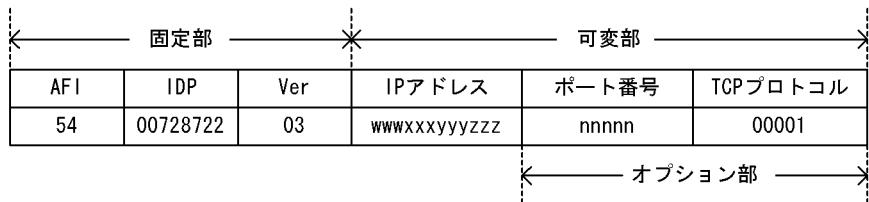
付録 C NSAP アドレス形式

ここでは、OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式、および OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式について説明します。

(1) OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式

OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式を次に示します。

図 C-1 OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式



- この形式は RFC1277 に従っています。
- NSAP アドレスは、オクテット単位に記述してあります。
- wwwxxxxyyzzz は IP アドレスに合わせて指定してください。
- wwwxxxxyyzzz および nnnnn は、前ゼロ 10 進数で指定してください。
- オプション部は 5 バイト固定です。オプション部省略時のポート番号は、00102 が仮定されます。通常はオプション部を指定しない運用をしてください。
- 着呼時は、オプション部が省略された形式の NSAP アドレスが上位 AP に通知されます。

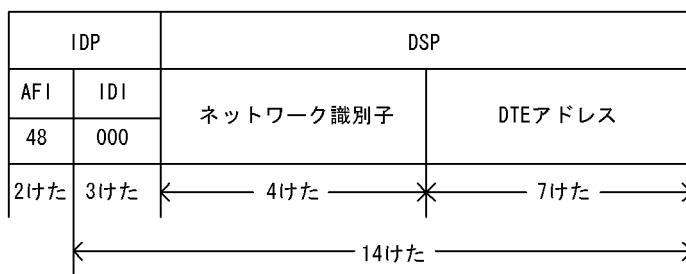
(例) IP アドレス = 192.66.24.1 の場合の NSAP アドレス指定例 (オプション部を指定しない場合)

540072872203192066024001

(2) OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式

OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式を次に示します。

図 C-2 OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式



- この形式は INTAP (V1.0) アドレス体系実装規約の WAN 形式 2 に従っています。
- NSAP アドレスは、オクテット単位に記述してあります。

付録 D XNF/AS との相違点

XNF/AS と XNF/LS の相違点について説明します。

(1) 通信機能

XNF/LS では、OSI 拡張機能として、エンドシステムとの通信機能だけをサポートしています。上位 AP は TLI-AP だけです。XNF/AS でサポートしている次の機能は、XNF/LS ではサポートしていません。

- OSI 通信機能を使用した OSAS-AP
- ゲートウェイシステムとして動作する OSI 拡張機能

(2) 環境設定

OS の違いなどによって、環境設定方法が XNF/AS と異なります。XNF/LS の環境設定方法の詳細については、「3.1 XNF/LS の環境設定」を参照してください。

(3) 定義

XNF/AS では、エンドシステムとして動作する OSI 拡張機能を定義するために、次の二つを定義する必要がありました。

- 構成定義文
- OSI 拡張機能のシステムパラメタ

XNF/LS では、これら二つの定義を構成定義文に統合しました。XNF/AS から XNF/LS への構成定義文の変更点を表 D-1 に示します。また、XNF/AS の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応を表 D-2 に、OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の、XNF/AS と XNF/LS の構成定義文の変更点を表 D-3 に、それぞれ示します。

表 D-1 XNF/AS から XNF/LS への構成定義文の変更点

定義文	XNF/AS でのオペラン ド	XNF/LS でのオペラ ンド	変更点
configuration	version	version	なし
	max_TSAP	max_TSAP	指定できる範囲 を 1 ~ 2000 か ら、1 ~ 2048 に変更しま した。
	max_TLI_connection	なし	指定不要にしま した。
	max_TPTCP_connect ion	max_TPTCP_conne ction	なし
TPTCP_buffer	name	name	なし

定義文	XNF/AS でのオペラント	XNF/LS でのオペランド	変更点
	number	send_number recv_number	受信バッファプールのバッファ個数だけでなく、送信バッファプールのバッファ個数も指定できるようになりました。
	size	なし	指定不要にしました。
TPTCP_define	VASS	VASS	なし
	なし (XNF/AS では、/etc/services に定義)	isotsap_port	指定を構成定義文に統合しました。
	なし (XNF/AS では、OSI 拡張機能のシステムパラメタ)	max_TPDU	指定を構成定義文に統合しました。
	なし (XNF/AS では、OSI 拡張機能のシステムパラメタ)	TS1	指定を構成定義文に統合しました。
	なし	tcp_nodelay	指定を構成定義文に統合しました。
TPTCP_slot	VASS	VASS	なし
	IP_address	IP_address	なし

表 D-2 XNF/AS の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応

XNF/AS の OSI 拡張機能のシステムパラメタ	XNF/LS の構成定義文
最大 TPDU 長	TPTCP_define 文の max_TPDU オペランド
TS1 タイマ値	TPTCP_define 文の TS1 オペラント
Nagle アルゴリズム無効化	TPTCP_define 文の tcp_nodelay オペラント
遅延 ACK 無効化	なし
受信バッファサイズ	なし
送信バッファサイズ	なし
キープアライブ機能	TPTCP_define 文の so_keepalive オペラント
キープアライブ再送回数	なし
キープアライブ送信間隔	なし
キープアライブ再送間隔	なし

表 D-3 OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の、XNF/AS と XNF/LS の構成定義文の変更点

定義文	XNF/AS でのオペラント	XNF/LS でのオペラント	変更点
configuration	max_TPTCP_VC	max_TPTCP_VC	なし
	max_TPTCP_path	max_TPTCP_path	なし
	max_TPTCP_vhost	max_TPTCP_vhost	なし
TPTCP_common	patrol_time	patrol_time	なし
	receive_buffer_size	なし	XNF/LS ではサポートしていません。
	send_buffer_size	なし	XNF/LS ではサポートしていません。
	tcp_nodelay	tcp_nodelay	なし
	tcp_nodelayack	なし	XNF/LS ではサポートしていません。
TPTCP_VC	name	name	なし
	VASS	VASS	なし
	DTE_address	DTE_address	なし
	network_id	network_id	なし
	initial_status	initial_status	なし
	buffer_pool	なし	OSI 通信機能で使用するオペラントのため、XNF/LS ではサポートしていません。
	なし (XNF/AS では、/etc/services に定義)	host_adaptor_port	指定を構成定義文に統合しました。

(4) コマンド

XNF/AS と XNF/LS とのコマンド文法の相違点を表 D-4 に示します。また、XNF/LS で削除されたコマンドを表 D-5 に示します。

表 D-4 XNF/AS と XNF/LS とのコマンド文法の相違点

コマンド名	オプション	説明	XNF/AS	XNF/LS
comlog	なし	エラーメッセージを表示		

コマンド名	オプション	説明	XNF/ AS	XNF/ LS
xnfdelete	-n 名称	リソース名称を指定		
	-x キーワード	キーワードを指定		-
xnfedit	-i 入力ファイル 名称	採取したトレースのファイ ル名称を指定		
	-f 出力ファイル 名称	編集結果を出力するファイ ル名称を指定		
	-x キーワード	キーワードを指定		1
	-a 内部名称	AP を特定してトレースを編 集		-
	-n 名称	リソース名称を指定		-
	-t 編集開始時刻	編集を開始するトレースの レコード採取時刻を指定		
	-e 編集終了時刻	編集を終了するトレースの レコード採取時刻を指定		
	-S	回線のソフトウェアトレー スを編集		-
	-H	回線のハードウェアトレー スを編集		-
	-u	編集しない状態でトレース を出力		
	-d	フレーム名称などを編集出 力しない		-
xnfgen	全オプション省 略	XNF/AS ゼネレーション番号の 使用状況一覧を標準出 力に表示 XNF/LS ゼネレーション済みの 定義ファイルの内容を 標準出力に表示		
	-f 定義ファイル 名称	定義ファイルの名称を指定		
	-c	構成定義文の文法をチエッ ク		
	-n ゼネレーショ ン番号	ゼネレーション番号を指定		×
	-r	指定したゼネレーション番 号を再 IPL 時に起動		×
	-d ゼネレーショ ン番号	ゼネレーション環境を削除		×
xnfoffline	-n 名称	リソース名称を指定		

コマンド名	オプション	説明	XNF/ AS	XNF/ LS
xnfonline	-n 名称	リソース名称を指定		
xnfshow	-x	キーワードを指定		2
	-i 内部 AP 名称	内部 AP 名称を指定		
	-P プロセス ID	プロセス ID に対応する AP を表示		
	-A	アクティブ状態の AP を一覧表示		
	-I	インアクティブ状態の AP を一覧表示		
	-b	バッファの使用状況を表示		
	-n	指定したリソースやチャンネルラインなどの状態を表示		
	-t	NCAM・SLUS インタフェースの LU のチューニング情報を表示		-
	-c	使用しているバス、コネクションリソース、相手局リストなどの状態を表示		
	-d	PU または LU の状態を表示		-
	-h	回線種別、PU の状態、経路の状態、VASS 番号など、HNA1 次局の状態を表示		-
	-s	HNA2 スロットの状態を表示		-
xnfstart	-R	開始後に構成を追加		
	-n ゼネレーション番号	ゼネレーション番号を指定		×
xnfstop	なし	XNF/AS XNF/AS を終了 XNF/LS XNF/LS を終了		
xnftdump	-f ダンプ出力ファイル名称	ダンプを出力するファイル名称を指定		
	-e ダンプ入力ファイル名称	ダンプファイルからダンプを編集するときに指定		
	-E	メモリから直接ダンプを編集するときに指定		
	-o 編集出力ファイル名称	ダンプの編集結果を出力するファイル名称を指定		

コマンド名	オプション	説明	XNF/ AS	XNF/ LS
xnftrace	全オプション省略	トレース採取中のリソース名称、ファイル名称、およびラップアラウンド長を表示		
	-s	トレースの採取を開始		
	-e	トレースの採取を終了		
	-x キーワード	キーワードを指定		1
	-a 内部名称	AP または PU を特定してトレース採取		-
	-n 名称	リソース名称を指定		-
	-f ファイル名称	トレース出力ファイルのファイル名称を指定		
	-w ラップアラウンド長	ラップアラウンド長を指定		
	-H	回線のハードウェアトレースを開始または終了		-
	-O トレースオプション	採取するトレースを変更		-
-l 回線トレースデータ長				-
-M ファイル名称	事前に割り当てるトレース出力ファイルのファイル名称を指定		x	3
	-R ファイル名称	トレース出力を切り替えるファイルのファイル名称を指定	x	3

(凡例)

: サポート

x : 未サポート

- : サポート対象外(回線接続またはチャネル接続)

注 1

tli 指定および socket 指定だけサポートしています。

注 2

tli 指定および tpvc 指定だけサポートしています。

注 3

XNF/AS では、xnftrace2 コマンドの機能に該当します。

表 D-5 XNF/LS で削除されたコマンド (XNF/AS と XNF/LS の相違点)

コマンド名称	備考
xnfboot	XNF/LS では、xnfstart コマンドに統合しました。
xnfshutdown	XNF/LS では、xnfstop コマンドに統合しました。
xnftpprmgen	XNF/LS では、xnfgen コマンドに統合しました。
xnftpstop	XNF/LS では、xnfstop コマンドに統合しました。
xnftrace2	XNF/LS では、xnftrace コマンドに統合しました。
xnftune	なし

付録 E XNF/H との相違点

XNF/H と XNF/LS の相違点について説明します。

(1) 通信機能

XNF/LS では、OSI 拡張機能として、エンドシステムとの通信機能だけをサポートしています。上位 AP は TLI/AP だけです。XNF/H でサポートしている次の機能は、XNF/LS ではサポートしていません。

- OSI 通信機能を使用した OSAS·AP
- ゲートウェイシステムとして動作する OSI 拡張機能

(2) 環境設定

OS の違いなどによって、環境設定方法が XNF/H と異なります。XNF/LS の環境設定方法の詳細については、「3.1 XNF/LS の環境設定」を参照してください。

(3) 定義

XNF/H では、エンドシステムとして動作する OSI 拡張機能を定義するために、次の二つを定義する必要がありました。

- 構成定義文
- OSI 拡張機能のシステムパラメタ

XNF/LS では、これら二つの定義を構成定義文に統合しました。XNF/H から XNF/LS への構成定義文の変更点を表 E-1 に示します。また、XNF/H の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応を表 E-2 に示します。

表 E-1 XNF/H から XNF/LS への構成定義文の変更点

定義文	XNF/H でのオペラント	XNF/LS でのオペラント	変更点
configuration	version	version	なし
	max_TSAP	max_TSAP	指定できる範囲を 1 ~ 2000 から、1 ~ 2048 に変更しました。
	max_TLI_connection	なし	指定不要にしました。
	max_TPTCP_connection	max_TPTCP_connection	なし
TPTCP_buffer	name	name	なし

定義文	XNF/H でのオペラン ド	XNF/LS でのオペラ ンド	変更点
	number	send_number recv_number	受信バッファ プールのバッ ファ個数だけで なく、送信バッ ファプールの バッファ個数も 指定できるよう にしました。
	size	なし	指定不要にしま した。
TPTCP_define	VASS	VASS	なし
	なし (XNF/H では、 /etc/services に定義)	isotsap_port	指定を構成定義 文に統合しまし た。
	なし (XNF/H では、 OSI 拡張機能のシス テムパラメタ)	max_TPDU	指定を構成定義 文に統合しまし た。
	なし (XNF/H では、 OSI 拡張機能のシス テムパラメタ)	TS1	指定を構成定義 文に統合しまし た。
	なし	tcp_nodelay	TCP の Nagle アルゴリズムを 無効にできるよ うにしました。
TPTCP_slot	VASS	VASS	なし
	IP_address	IP_address	なし

表 E-2 XNF/H の OSI 拡張機能のシステムパラメタと XNF/LS の構成定義文の対応

XNF/H の OSI 拡張機能のシステムパラメタ	XNF/LS の構成定義文
最大 TPDU 長	TPTCP_define 文の max_TPDU オペラ ンド
TS1 タイマ値	TPTCP_define 文の TS1 オペランド

(4) コマンド

XNF/H と XNF/LS とのコマンド文法の相違点を表 E-3 に示します。また、XNF/LS で削除されたコマンドを表 E-4 に示します。

表 E-3 XNF/H と XNF/LS とのコマンド文法の相違点

コマンド名	オプション	説明	XNF/H	XNF/ LS
comlog	なし	エラーメッセージを表示		

付録 E XNF/H との相違点

コマンド名	オプション	説明	XNF/H	XNF/LS
xnfedit	-i 入力ファイル 名称	採取したトレースのファイル名称を指定		
	-f 出力ファイル 名称	編集結果を出力するファイル名称を指定		
	-x キーワード	キーワードを指定	1	-
	-n 名称	リソース名称を指定	-	-
	-t 編集開始時刻	編集を開始するトレースのレコード採取時刻を指定		
	-e 編集終了時刻	編集を終了するトレースのレコード採取時刻を指定		
	-H	回線のハードウェアトレースを編集	-	-
	-u	編集しない状態でトレースを出力		
xnfgen	全オプション省略	XNF/H ゼネレーション番号の使用状況一覧を標準出力に表示 XNF/LS ゼネレーション済みの定義ファイルの内容を標準出力に表示		
	-f 定義ファイル 名称	定義ファイルの名称を指定		
	-c	構成定義文の文法をチェック		
	-n ゼネレーション番号	ゼネレーション番号を指定	x	
	-r	指定したゼネレーション番号を再 IPL 時に起動	x	
	-d ゼネレーション番号	ゼネレーション環境を削除	x	
xnfshow	-x	キーワードを指定	2	
	-i 内部 AP 名称	内部 AP 名称を指定		
	-P プロセス ID	プロセス ID に対応する AP を表示		
	-A	アクティブ状態の AP を一覧表示		
	-I	インアクティブ状態の AP を一覧表示		
	-b	バッファの使用状況を表示		

コマンド名	オプション	説明	XNF/H	XNF/LS
	-n	指定したリソースやチャンネルラインなどの状態を表示		×
	-t	NCAM・SLUS インタフェースの LU のチューニング情報を表示		-
	-c	使用しているバス、コネクションリソース、相手局リストなどの状態を表示		×
	-d	PU または LU の状態を表示		-
	-s	HNA2 スロットの状態を表示		-
xnfstart	-R	開始後に構成を追加		×
	-n ゼネレーション番号	ゼネレーション番号を指定		×
xnfstop	なし	XNF/H XNF/H を終了 XNF/LS XNF/LS を終了		
xnftdump	-f ダンプ出力ファイル名称	ダンプを出力するファイル名称を指定		
	-e ダンプ入力ファイル名称	ダンプファイルからダンプを編集するときに指定		
	-E	メモリから直接ダンプを編集するときに指定		
	-o 編集出力ファイル名称	ダンプの編集結果を出力するファイル名称を指定		
xnftrace	全オプション省略	トレース採取中のリソース名称、ファイル名称、およびラップアラウンド長を表示		
	-s	トレースの採取を開始		
	-e	トレースの採取を終了		
	-x キーワード	キーワードを指定		1
	-n 名称	リソース名称を指定		-
	-f ファイル名称	トレース出力ファイルのファイル名称を指定		
	-w ラップアラウンド長	ラップアラウンド長を指定		
	-M ファイル名称	事前に割り当てるトレース出力ファイルのファイル名称を指定	×	

コマンド名	オプション	説明	XNF/H	XNF/LS
	-R ファイル名称	トレース出力を切り替える ファイルのファイル名称を 指定	×	

(凡例)

: サポート

x : 未サポート

- : サポート対象外 (回線接続またはチャネル接続)

注 1

tli 指定および socket 指定だけサポートしています。

注 2

tli 指定だけサポートしています。

表 E-4 XNF/LS で削除されたコマンド (XNF/H と XNF/LS の相違点)

コマンド名称	備考
xnfdelete	RFC1006 プロトコルに基づく OSI 通信では、XNF/H もサポートしていません。
xnfoffline	RFC1006 プロトコルに基づく OSI 通信では、XNF/H もサポートしていません。
xnfonline	RFC1006 プロトコルに基づく OSI 通信では、XNF/H もサポートしていません。
xnftpprngen	XNF/LS では、xnfgen コマンドに統合しました。
xnftpstop	XNF/LS では、xnfstop コマンドに統合しました。
xnftune	なし

索引

C

comlog 60
configuration 40

G

gzip パッケージのインストール [Red Hat Linux の場合] 18

I

IP_address [TPTCP_slot 文] 48
IP アドレス [TPTCP_slot 文] 48
isotsap_port [TPTCP_define 文] 46

M

max_TPDU [TPTCP_define 文] 46
max_TPTCP_connection [configuration 文] 40
max_TPTCP_path [configuration 文] 41
max_TPTCP_VC [configuration 文] 41
max_TPTCP_vhost [configuration 文] 41
max_TSAP [configuration 文] 40

N

name [TPTCP_buffer 文] 42
NSAP アドレス形式 129
NSAP アドレス形式 [OSI 拡張機能] 129
NSAP アドレス形式 [OSI 拡張高信頼化機能] 129

O

OSI 拡張機能 9
OSI 拡張機能使用時の詳細エラーコード、切断理由コード 124
OSI 拡張機能の NSAP アドレス形式 129
OSI 拡張機能のネットワーク構成 9
OSI 拡張機能用自局 IP アドレス定義文 48
OSI 拡張機能用情報定義文 46

OSI 拡張機能用バッファ定義文 42
OSI 拡張機能を使用する場合の定義 51
OSI 拡張高信頼化機能 10
OSI 拡張高信頼化機能の NSAP アドレス形式 129
OSI 拡張高信頼化機能の最大仮想サーバ数 [configuration 文] 41
OSI 拡張高信頼化機能の最大接続相手仮想リスト数 [configuration 文] 41
OSI 拡張高信頼化機能の最大パス数 [configuration 文] 41
OSI 拡張高信頼化機能用仮想サーバ定義文 49
OSI 拡張高信頼化機能用共通定義文 44
OSI 拡張高信頼化機能を使用する場合の定義 53
OS 起動時および停止時のセットアップスクリプトの例 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 21
OS 起動時のセットアップスクリプト登録 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 21
OS 起動時のセットアップスクリプト登録 [Red Hat Linux の場合] 18
OS 停止時のセットアップスクリプト登録 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 21
OS 停止時のセットアップスクリプト登録 [Red Hat Linux の場合] 18

P

PP 削除 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 22
PP 削除 [Red Hat Linux の場合] 19
PP 追加・更新 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 22
PP 追加・更新 [Red Hat Linux の場合] 19

R

recv_number [TPTCP_buffer 文] 42
RFC1006 プロトコル 2

S

send_number [TPTCP_buffer 文] 42
so_keepalive [TPTCP_define 文] 47
syslog ファイルの設定 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 19
syslog ファイルの設定 [Red Hat Linux の場合] 17

T

tcp_nodelay [TPTCP_define 文] 47
TLI 通信機能 3
TPTCP_buffer 42
TPTCP_common 44
TPTCP_define 46
TPTCP_slot 48
TPTCP_VC 49
TS1 [TPTCP_define 文] 46
TS1 タイマ値 [TPTCP_define 文] 46

V

VASS [TPTTCP_define 文] 46
VASS [TPTTCP_slot 文] 48
version [configuration 文] 40

X

XNF/AS と XNF/LS とのコマンド文法の相違点 [XNF/AS と XNF/LS] 133
XNF/AS との相違点 131
XNF/H と XNF/LS とのコマンド文法の相違点 [XNF/AS と XNF/LS] 139
XNF/H との相違点 138
XNF/LS 2
XNF/LS/BASE 6
XNF/LS/Host Adaptor 6
XNF/LS/OSI Extension 6
XNF/LS/OSI Extension/Cluster 6
XNF/LS が送出するメッセージ 29
XNF/LS が使用する障害情報ファイル 28
XNF/LS で削除されたコマンド [XNF/AS と XNF/LS] 137

XNF/LS で削除されたコマンド [XNF/H と XNF/LS] 142
XNF/LS の PP 組み込み [HP-UX 11i(IPF) の場合] 21
XNF/LS の PP 組み込み [Red Hat Linux の場合] 18
XNF/LS の環境設定 16
XNF/LS の特長 2
XNF/LS を開始する 78
XNF/LS を構成するソフトウェア 6
XNF/LS を終了する 79
xnfdelete 62
xnfedit 63
xnfgen 65
xnfoffline 67
xnfonline 68
xnfshow 69
xnfstart 78
xnfstop 79
xnftdump 80
xnftrace 82

あ

アダプタ番号の指定 34
アンダスコア IV

い

異常時の運用 30

う

運用開始 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 22
運用開始 [Red Hat Linux の場合] 19
運用コマンド 12, 57
運用コマンドの形式 59
運用停止 [HP-UX 11i(IPF) の場合] 22
運用停止 [Red Hat Linux の場合] 19

え

エラーコード 124
エラーメッセージを表示する 60

お

- オプション 59
- オプションフラグ 59
- オフライン状態にする 67
- オペラント 38
- オペラントの階層 39
- オンライン状態にする 68

か

- カーネル調整パラメタの設定〔HP-UX 11i(IPF)の場合〕19
- カーネルパラメタの設定〔Red Hat Linuxの場合〕17
- 開始 24
- 仮想スロット番号 46
- 仮想スロット番号〔TPTCP_define文〕46
- 仮想スロット番号〔TPTCP_slot文〕48
- 環境設定 15

き

- キープアライブ機能 32
- キーワードとコマンドの対応 59

く

- 区切り記号 38

こ

- コアファイル 30
- コアファイル出力先を変更した場合 28
- 構成定義開始宣言文 40
- 構成定義作成とゼネレーション〔HP-UX 11i(IPF)の場合〕22
- 構成定義作成とゼネレーション〔Red Hat Linuxの場合〕18
- 構成定義文 35
 - 作成の概要 36
 - 定義文一覧と指定できる文数 36
- 構成定義文の定義例 51
- 構成定義文の変更点〔XNF/ASとXNF/LS〕131

構成定義文の変更点〔XNF/HとXNF/LS〕

- 138
- 構成の定義機能 8
- 構成の変更 26
- 構成変更 13
- 構成変更後の開始 24
- 構成を削除する 62
- 構成を追加する 78
- コマンドでの運用 12
- コマンドでの開始 24
- コマンドの一覧 12
- コマンド名称 59
- コメント 38

さ

- サービス 3
- 最大TPDU長〔TPTCP_define文〕46
- 最大TSAP数〔configuration文〕40
- 最大トランスポートコネクション数〔configuration文〕40

し

- 自局IPアドレス指定(系切り替え)構成例 10
- 自局IPアドレス指定機能 9
- 自局IPアドレス指定機能を使用するときの注意事項 33
- 自局IPアドレス指定機能を使用する場合の定義 52
- システムのメモリ不足 30
- 指定領域 39
- 自動開始 24
- 自動ゼネレーション 36
- 終了 24
- 受信バッファ個数〔TPTCP_buffer文〕42
- 詳細エラーコード 124
- 状態を表示する 69

せ

- 切断理由コード 124
- セットアップスクリプト登録〔HP-UX 11i(IPF)の場合〕21

セットアップスクリプト登録〔Red Hat Linux の場合〕 18
ゼネレーションを実行する 65
全角文字の扱い 39
前提プログラム 6

そ

送信バッファ個数〔TPTCP_buffer 文〕 42
ソフトウェア構成 6

ち

着用 TCP ポート〔TPTCP_define 文〕 46

つ

通常ゼネレーション 36
通信機能 9

て

定義文の終わり 38
定義文ファイルの作成 36
定義文名 38

と

トランSPORT層 (TL) の詳細エラーコード, 切断理由コード 124
トレースを採取する 82
トレースを編集する 63

な

内部 AP 名称 70

に

日本語の扱い 39

ね

ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の NSAP 登録拒否理由コード 126
ネットワーク層 (OSI 拡張高信頼化機能) の 詳細エラーコード, 切断理由コード 125

は

バージョン番号〔configuration 文〕 40
ハードウェア構成 6
バッファプール名称〔TPTCP_buffer 文〕 42
半角文字の扱い 39

ひ

引数 59

ふ

ファイルの I/O エラー 31
プロセスの異常終了 30
プロトコル 3
プロトコルとサービスの範囲 3
プロトコルの機能 3
プロトコルの範囲 3

ほ

保守運用機能 12

め

メッセージ 87
メッセージの出力先 88
メモリダンプを取得する 80
メモリダンプを編集する 80

り

リソースの削除 26
リソースの追加 26
リソースの変更 27

ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内

1. マニュアル情報ホームページ

ソフトウェアマニュアルの情報をインターネットで公開しています。

URL <http://www.hitachi.co.jp/soft/manual/>

ホームページのメニューは次のとおりです。

マニュアル一覧	日立コンピュータ製品マニュアルを製品カテゴリ、マニュアル名称、資料番号のいずれかから検索できます。
CD-ROMマニュアル	日立ソフトウェアマニュアルと製品群別CD-ROMマニュアルの仕様について記載しています。
マニュアルのご購入	マニュアルご購入時のお申し込み方法を記載しています。
オンラインマニュアル	一部製品のマニュアルをインターネットで公開しています。
サポートサービス	ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開サービスを記載しています。
ご意見・お問い合わせ	マニュアルに関するご意見、ご要望をお寄せください。

2. インターネットでのマニュアル公開

2種類のマニュアル公開サービスを実施しています。

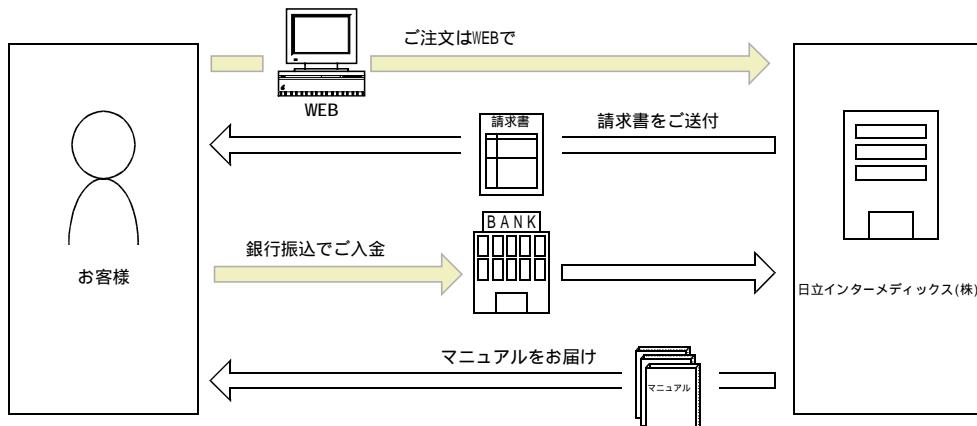
(1) マニュアル情報ホームページ「オンラインマニュアル」での公開

製品をよりご理解いただくためのご参考として、一部製品のマニュアルを公開しています。

(2) ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開

ソフトウェアサポートサービスご契約のお客様向けにマニュアルを公開しています。公開しているマニュアルの一覧、本サービスの対象となる契約の種別などはマニュアル情報ホームページの「サポートサービス」をご参照ください。

3. マニュアルのご注文



マニュアル情報ホームページの「マニュアルのご購入」にアクセスし、お申し込み方法をご確認のうえ WEB からご注文ください。ご注文先は日立インターメディックス(株)となります。

ご注文いただいたマニュアルについて請求書をお送りします。

請求書の金額を指定銀行へ振り込んでください。

入金確認後 7 日以内にお届けします。在庫切れの場合は、納期を別途ご案内いたします。